



Sendai Ikuei Gakuen

since

1905

仙台育英学園創立 111 周年記念

仙台育英学園史

仙台育英学園 111 年 への歩み

東日本大震災から学ぶ教育機関のリスクマネジメント

創造ある復興を 目指して



I-Challenge 125

進 取 華 校



学校法人 仙台育英学園
秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
理事長・校長 加藤 雄彦

会津盆地から遠く離れた山々には残雪の雪形が映え、里の木々には淡い緑が芽吹き始めた峠の山道を下ると、ライオン先生のニックネームで親しまれている創業者加藤利吉先生の顕彰碑まで間もなくとなります。平成4年(1992年)4月に、創立88周年記念事業として飯盛山に建立してから早くも25年の月日が経ちました。

振り返ると、幾多の学園存亡の危機に際して、生活信条七か条を擁して生徒たちを熱心にご指導下さって来た職員のご尽力と、いつも快くご支援を賜ってきた同窓生や関係者のお力のおかげであり、衷心より感謝申し上げます。

特に、平成17年(2005年)5月22日第11回さつき祭、ウォークラリー中に飲酒暴走車による交通事故が発生し、新入生3名の尊い命が瞬時に奪われる痛ましい出来事がありました。無事に帰宅させられなかったことを未だに悔いています。さらに、重軽傷者22名が受けた心身の傷は、月日を経ても癒えないものがあり、大変心を痛めています。

毎年開催している「アイ・ライオン・ディ」では飲酒運転根絶のためのさまざまな行事を行なって参りましたが、関係法規の強化が図られたにも関わらず、このような痛ましい事故がなくなる現実と向き合って、法を順守すべきはずの大人の意識の欠如に憤りを禁じ得ません。

さて、平成23年(2011年)3月11日、太平洋沿岸を震源とした東日本大震災による大津波では宮城県だけで1万人を超える犠牲者を出し、さらに東京電力福島第1原子力発電所の放射能汚染事故によって、町全体が帰宅困難な状態になっている現状に、原発事故の恐ろし

▼ 多賀城校舎



▲ 宮城野校舎



さを痛感いたします。

度重なる余震は本学園の宮城野校舎に甚大な被害を与え、一時は同校舎の再起は不可能であると覚悟しました。しかしながら、国や県をはじめ多くの団体や人々のご支援やご援助を賜った結果、おかげ様で生徒・職員が快適な学園生活を過ごせる環境に整ってきました。これまでの皆様から頂戴しましたご厚意やご支援がなければ、正に学園の存続が危ぶまれていただけにひたすら感謝を申し上げます。

この感謝の気持ちをお返しするには、さまざまな先進的な教育方法を柔軟に取り入れて、本学園ならではの工夫を加えながら、21世紀の東北地方の復興と振興を担う有意義な人材を輩出することに尽きると思います。

これを自分なりに表現するならば、「進取華校」ではないかと考えます。つまり、魅力的内容で人々に関心を抱いてもらえるアイデアを産出し、学園機能を効率的・能動的に発揮させ、創造的な学校を築き上げていくことが東北復興に欠かせないと感じるからです。

本学園は創立以来、先の大戦では米軍機による空襲で全校舎が焼失する戦災に見舞われ、昭和40年（1965年）3月には不審火による主要校舎の焼失という人災を経験し、さらに東日本大震災による宮城野校舎の喪失という天災に遭遇してきました。このほかにも、幾多の困難を乗り越えてきましたが、そのたびごとに皆様から数知れないご高配を賜って参りました。改めて学園を代表して感謝の気持ちをお伝え申し上げますとともに、今後とも変わらないご理解とご厚志を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

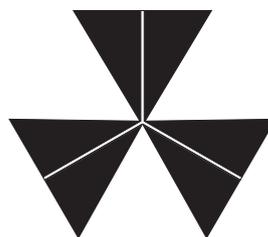
シンボルマーク



I-LION

仙台育英学園の伝統を継承しつつライオン（創立者加藤利吉先生の愛称であった）の持つ、全知、全能を讃え常に未来を考え、グローバルな視野で世界にはばたき、栄光をかちとる人間像を象徴させた。このシンボルマークの愛称は IKUEI-LION の意味を表す“アイ ライオン”とした。制定は 1992 年（平成 4 年）4 月 1 日。

校章



本校のある宮城野は、古来宮城野萩で有名な地であり、この萩の葉を図案化した。建学精神である「至誠」「質実剛健」「自治進取」の調和と末広がり的发展を期している。制定は 1962 年（昭和 37 年）4 月 1 日。

創立 125 周年に向けて



I-Challenge 125

本学園は 2005 年（平成 17 年）10 月 1 日に創立 100 周年を迎えた。この時を機に、来る 2030 年（創立 125 周年）に向け、新たな学校づくりを推進していこうという思いと決意を込めて、“I-Challenge 125”というスローガンとそのロゴマークを設定した。



創立者 加藤利吉先生

- 明治15. 12. 3 福島県若松（現、会津若松市）大町名子屋町 141 に生まれる。
28. 3 若松尋常高等小学校高等科第2学年修了。
34. 3 東京市神田区東京学院に進み、国語、数学等を学んで卒業。
37. 3 東京市神田区正則英語学校において英文学を学んで卒業。
37. 4 陸軍第二師団歩兵第29連隊（若松市）に召集される。
38. 2. 28 日露戦争奉天戦において敵弾を受け、負傷。
38. 4. 19 仙台衛戍病院に入院加療。（9/18 退院、除隊）
38. 10. 1 仙台市東四番丁 53 に私塾「英育会」（その後「育英塾」と改組）を創立し、中等・高等教育機関受験希望者を対象に英語・数学の教授を開始する。
39. 11. 1 英数のほかに、国語・漢文・地理・歴史の教授も始める。
この間、学園長として学園の発展に心血を注ぎ、特に太平洋戦争中は戦災で校舎をはじめすべてを失ったが、精力を傾けて奔走した結果、宮城野の現在地に新たな学園を建設するなど、本学園隆盛の礎を築き上げられた。
- 昭和 37. 3. 24 東北大学附属病院において逝去（享年 81 歳）。従六位勲六等瑞宝章をおくられる。
37. 4. 11 学園葬を挙行し、全校でご冥福を祈る。
- 平成 28. 10. 1 学園創立 111 周年
28. 12. 3 創立者生誕 134 年

《建学精神》

至誠 質実剛健 自治進取

至誠力行

学校法人仙台育英学園の創設者、加藤利吉先生は明治15年(1882)12月3日に現在の福島県会津若松市で生誕した。明治28年(1895)3月、尋常高等小学校高等科第2学年修了後、炭百俵を貨車に積んで上京、これを学資として東京神田の東京学院や正則英語学校で学んだ。卒業後さらに、英国人ハーデー、ルーズ、米国人カンニングハム、ヘンリー、ゲルハートなどの外国人教師の下で英語学・英文学の研鑽を積んだ。

明治37年(1904)4月、第2師団歩兵第29連隊に召集され、日露戦争の激戦地奉天戦に従軍、翌年2月28日敵弾により頭部および顔面を負傷した。同年4月19日から仙台衛戍病院(現在の宮城県議会議事堂周辺)において療養した後全快し、同年9月18日退院、同日付で除隊となった。

明治38年(1905)10月1日、仙台市東四番丁53番地に住居を構えると同時に、私塾「英育会」(その後育英塾に改組)を開塾し、英語・数学を教授した。翌年11月1日からは国語・漢文のほか地理・歴史も加えて教授するようになった。現在の学校法人仙台育英学園の原点はここにある。

開塾以来、私学による国民の教育に心魂を傾け、利吉先生が掲げる「至誠」、「質実剛健」、「自治進取」を建学精神として次々と先生の理想を実現していった。大正11年(1922)には待望の仙台育英中学校を創立して、校長職に就任した。同時に学校の経営基盤の安定を図るために先生の私財を寄付して、財団法人東北育英義会を発足させた。

学校の敷地取得、校舎の建設、設備の充実のため日々東奔西走し、心身の過労も意に介さず、学校発展の使命達成に全力で傾倒した。この先生の魂に触れた職員・生徒・同窓生・保護者なども先生の期待に応え、それぞれが真摯な活動を展開した。その教育実績は日々向上の一途を辿り、「ここ、仙台の地に育英あり」の世評を得るようになり、私学教育の殿堂が出現した。昭和16年(1941)10月7日、創立者加藤利吉先生は約20年にもおよぶ校長職を退き、理事長職に専念した。

同年12月8日、太平洋戦争が勃発し、学校教育も完全な戦時体制となった。昭和20年(1945)7月9日夜半から仙台は米軍機から投下された焼夷弾による空襲を受け、市内各地が火の海と化した。当時、東三番丁(外記丁角)にあった仙台育英中学校の新校舎は昭和14年(1939)10月の建築であり、最も新しい大講堂220坪(726㎡)は昭和18年(1943)10月に落成したばかりの真新しいものであ

たが、全ての校舎1,800坪(5,940㎡)をこの時焼失した。翌朝、廃墟と化した学び舎に立たれた先生の教育にかける決意は揺るぎ無く、「仙台育英は必ず再建する」と断言し、直ちに復興事業に取り掛かった。

しかしながら、外記丁校地はGHQに接収され、その後は仙台市都市計画により緑地帯と指定されたため、同地での学校再建は不可能となった。そのため市内の施設を転々としながら、最後は行く場所が無くなると宮城野原にある薬師堂の軒下を借り、文字通りの青空教室のなかで授業は続けられた。

先生の土地探しの姿はまさに阿修羅の如きものであった。心に思い描いた候補地の夢は何回も無残に打ち砕かれたが、昭和21年(1946)4月になって元陸軍用地宮城野原(現在の宮城野校舎)のうち7,000坪(23,100㎡)を新校地として獲得することができた。さらに、戦後の資材不足、社会経済の混乱によって学校復興のための校舎建築は困難を極め、昭和23年(1948)4月から学校直営による校舎の建築作業が開始され、翌年3月に第1期工事600坪(1,980㎡)の新校舎の完成を以ってようやく苦難の青空教室は解消された。

明治38年(1905)10月1日の開塾以来、専ら加藤利吉先生の個人経営と私財の寄付によって進展してきた本学園は戦後、施行された新学制や私立学校法に基づく学校法人によって経営管理され、昭和26年(1951)3月1日には学校法人仙台育英学園として誕生することとなった。昭和37年(1962)3月24日、81歳で生涯を閉じられたが、長きにわたり私学教育の発展に寄与された功績は大きく、偉大なる校長としてここに顕彰碑を設置し、東日本大震災から2年で復興を成し遂げた宮城野校舎にその名を刻む。

平成25年(2013)3月24日

学校法人仙台育英学園理事長 加藤雄彦

※これは、宮城野新校舎GP(Great Principal)ホールに掲げられている碑文の写しですが、『至誠力行』という言葉は創設者の加藤利吉先生が生前、生徒・保護者に人間としての生き方を説くときに使われたということです。

なお、力行(リッコウ)の辞書的な意味は、努力して行うことという意味です。

生活信条

(互譲)

一、われらは互いに譲り合い 明るい人間関係を建設する

(切磋)

一、われらは互いに磨き合い 真の学力を身につける

(錬磨)

一、われらは互いに鍛え合い 強靱なからだをつくる

(規律)

一、われらは互いに戒め合い 節度ある生活をする

(寛容)

一、われらは互いにゆるし合い 和やかな学園を建設する

(感謝)

一、われらは人や物に感謝し 慎み深い生活をする

(奉仕)

一、われらは率先して事にあたり 世のため人のために力を尽くす

校歌

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
校歌

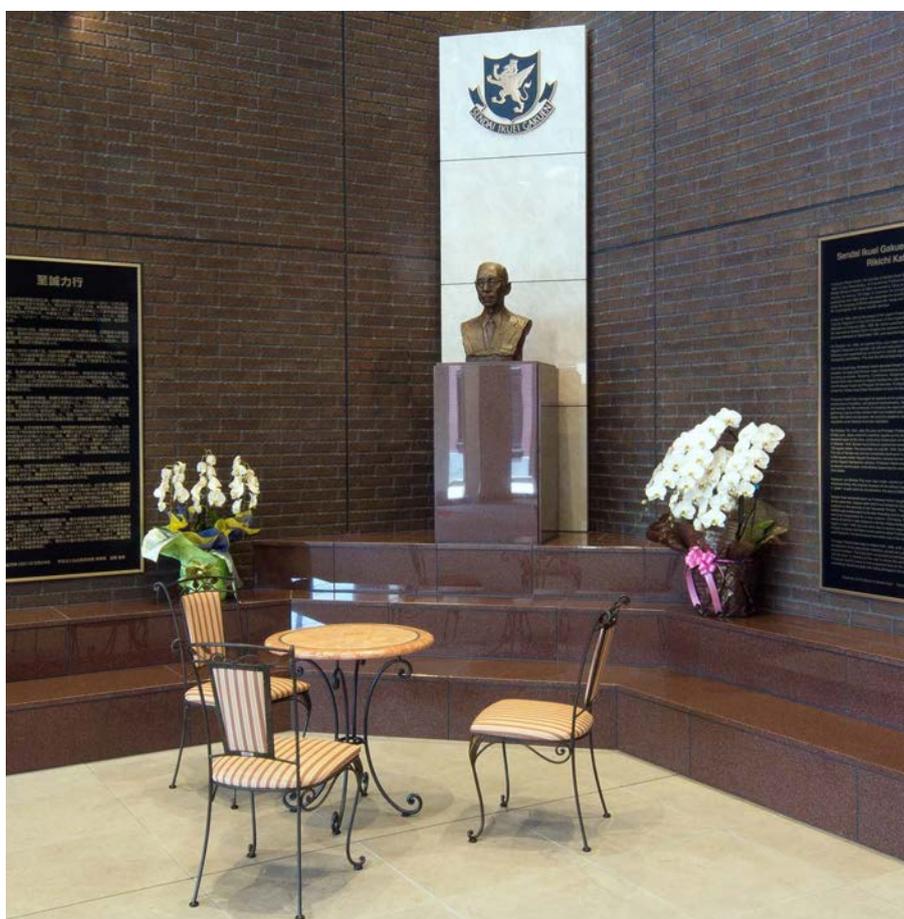
1930年(昭和5年)
2月22日制定

加藤利吉 作詞
服部正 作曲

一
南冥遙か天翔る
鴻鵠棲みし青葉城
ああ松島や千賀の浦
天の恵める青葉郷
ここに根ざしし育英の
我が学舎に栄光あれ

二
平和の光民主国
護憲の教えあきらかに
我が日の本の国のはな
学びの園に咲き匂う
斯の道守る育英の
我が学舎に栄光あれ

三
見よ北辰は燦として
理想の彼岸に輝けり
高く掲ぐる自治の旗
進取の意気に輝けり
旗ひるがえる育英の
我が学舎に栄光あれ



▲ 宮城野校舎 GP (Great Principal) ホール内 創立者 加藤利吉先生の像

目次

巻頭言	2
-----	---

第1部 東日本大震災からの復興	11
------------------------	-----------

I 大震災から宮城野新校舎完成まで	13
--------------------------	-----------

2011/2012	14
------------------	-----------

M9.0の衝撃！宮城野校舎は壊滅的被害
多賀城校舎では500人超の生徒が一夜を
文部科学省高等教育局私学部私学行政課が宮城野校舎を視察
生徒・保護者の被災状況と被災生徒への対応について
秀光6年生 山形蔵王で疎開学習
NYSEメンバーから励ましのメッセージが
韓国の企業『KOLON』の方々が義援金を携えて
仙台育英学園 東日本大震災復興計画（第1次）
秀光中等教育学校 第9回入学式
仙台育英学園高等学校 全日制課程入学式
生徒たちによる炊き出しボランティア
2011 NYSE とのジョイントコンサート
『国際物理オリンピック2011』に出場
外国語コース ハワイ・ホームステイ研修
仙台育英学園 東日本大震災復興計画（第2次）
世界各地のさまざまな方々から支援・励ましが
宮城野校舎解体工事及び宮城野・多賀城仮設校舎設置
宮城県議会総務企画委員会県内調査（宮城野校舎）
特進1年の菅原さん、日下さんが夏季タボス会議に参加
キューバ復興支援コンサート
2011年 秋～冬 宮城野校舎で
加藤雄彦理事長・校長先生がキューバ共和国から叙勲
宮城野校舎地鎮祭
インドネシア共和国バンドン市教育訪問団・姉妹校提携式

2012/2013	24
------------------	-----------

M-フレックスコース1年生が植樹祭に参加
第1回サイエンス・コ・ラボ
2012 この年もたくさんの方々からの支援・励ましが
秀光海外研修【第1回 NYSA】
平野さんロンドン五輪銀メダル獲得の報告会
陸上長距離、ケニア出身選手が全国大会で優勝
陸上リレーチーム、日本ユース選手権で優勝
ILHA
建設が進む宮城野新校舎 上棟式
書道部 せんだいメディアテークで記念展
石巻教育連絡事務所 竣工式
硬式野球部、全国優勝
2012/2013 国際交流の輪はさらに広く、大きく
多賀城育英グラウンド整備工事完成式並び始球式
学校法人仙台育英学園 新宮城野校舎 竣工式・除幕式

資料編	30
大震災を乗り越えて 2011 3.11 の記録 宮城野校舎地鎮祭 生徒会長挨拶	
II 宮城野新校舎での授業スタートから	43
2013/2014	44
宮城野新校舎 ゼルコバホールで新校舎開校式と秀光入学式を挙 行 特別進学と英進進学コース II 類が宮城野新校舎で授業をスタート 慶長遣欧使節出帆 400 年、キューバとのさらなる絆 広域通信制課程の 3 つめの拠点、ILC 沖縄開設に向けて	
2014/2015	48
沖縄に本学園の新しい教育拠点、ILC 沖縄が開校 多賀城校舎 NC ホールに新しい茶室、裏千家宗匠を招いて茶室披 き キューバとの絆にさらなる展開、交流の集い、そしてキューバ訪問 秀光野球部、仙台育英硬式野球部、ともに全国大会で栄えある優勝！ 国際バカロレア ディプロマ プログラム、東北初の認定校に	
2015/2016	52
秀光中等教育学校生徒全員が宮城野の新しい校舎に移転 国際バカロレアのプログラム (IBDP) 本格的にスタート 仙台育英硬式野球部、秀光野球部、ダブルでの全国準優勝！！ 110 周年式典は Global Education にふさわしい国際的なものに	
2016	56
IBDP の前段階にあたる MYP のトライアルが秀光でスタート 講演「教育機関のリスクマネジメント」、震災から 5 年半を経た 9 月 12 日に	
特別寄稿	
教育機関のリスクマネジメント	59
寄稿にあたって 教育機関のリスクマネジメント	61

第2部 学園創立110周年記念事業 83

I 教育環境の整備 84

- 多賀城校舎の整備 「学びと環境のリニューアル」
- ILC 青森、ILC 沖縄の開設 「通信制課程の広域化」
- 石巻教育連絡事務所の開設 「通学と学習の拠点が誕生」
- 山形学習センターの建設 「教育拠点の充実及び広域化」
- 宮城野新校舎完成 「学園復興の象徴、宮城野に」
- ICT 教育環境の整備 「125周年に向けた教育の挑戦」
- 秀光の宮城野校舎への位置変更 「創立者の夢、実現に向けて」

II 教育課程の充実 94

- 各コースの教育課程等の改編 「コースの改編・新設」
- I-Lion Hawaii School 「ILHA が教えてくれたこと」
- サイエンス・コ・ラボの展開 「科学への探究心を深める」
- MOS 資格、情報処理検定への取り組み 「情報ライセンス取得への挑戦」
- 情報科学コースでの ICT 教育の取り組み 「グローバルライセンスの取得」
- 国際バカロレア IBDP 導入について 「IBDP 授業開始」
- e-learning Program の e-Spire 導入 「パソコン使い、英語技能習得」
- 秀光中等教育学校で MYP 導入 「2020 年大学入試改革への挑戦」
- 仙台育英孔子課堂の設立 「東北初の文化交流拠点が誕生」

沿革 2011 - 2016 105

- 学園の沿革 2011 - 2016
- 藍綬褒章 受章 加藤 雄彦 理事長・校長先生 主なご功績 概要

編集後記 120

〈第1部〉

東日本大震災からの復興



I-Challenge 125

〈第1部〉
東日本大震災からの復興

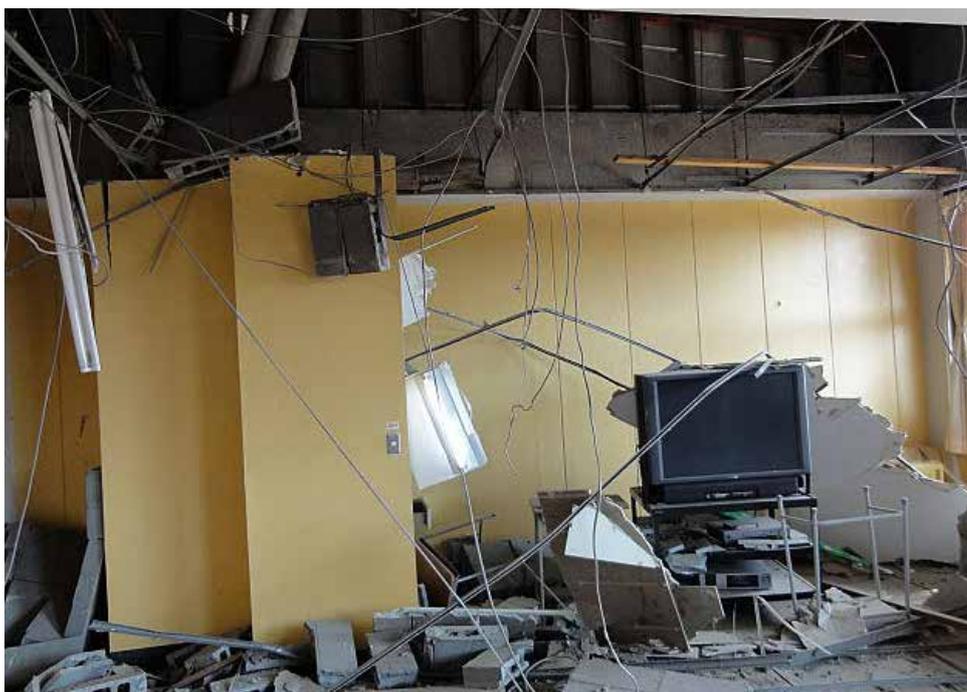


I

大震災から
宮城野新校舎完成
まで

2011

【平成 22 年度】



M9.0 の衝撃! 宮城野校舎は壊滅的被害

2011年3月11日午後2時46分、宮城野校舎を激しい揺れが襲った。

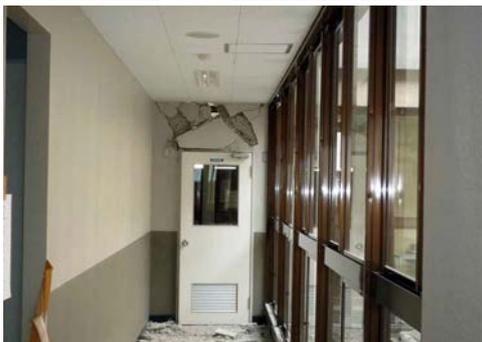
14時46分、校内放送で非常連絡が流れ、揺れの大きな地震が発生することを知らされる。今までに体験したことのない揺れに体が硬直するも、ストーブの消火を指示し、避難通路の確保にあたった。全員机下に身を潜め、落下物から身を守ることに努め、揺れ

が収まるのを待った。揺れが収まったのを確認しグラウンドに避難を開始したが、栄光校舎と南冥校舎の接続部分が大きく引き剥がされ壁のいたところが崩落し、事の重大さを実感した。なおも余震が続き校舎が崩壊するのではと、恐怖と寒さで体の震えが止まらなかった。生徒たちも先生方の誘導・指示のもと、整然とグラウンドに集合し、整列点呼確認を行う。一人の怪我

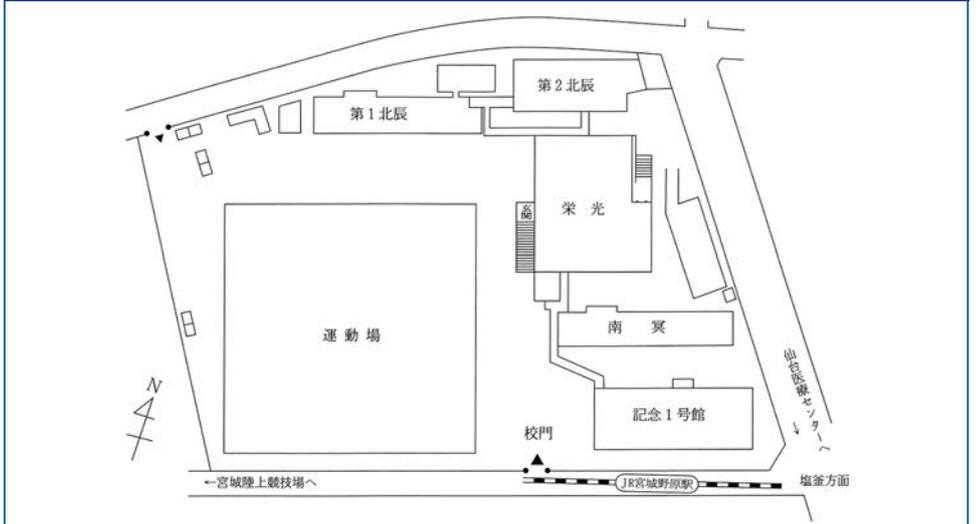
人もなく無事避難できた。たびたび襲ってくる余震により防球ネットの支柱が大きく揺らぐ。生徒たちをグラウンド中央に集め、二次被害対策に努める。

雪が舞い日没が近づき、気温も0度近くまで下がり、着の身着のままの状態避難した生徒の体調不良や帰宅困難な状況を考慮し、帰宅を早めた。

【澤田敏明（当時入試部担当教頭）のレポートより】



宮城野校舎 被害状況（概要）



	第一北辰	第二北辰	栄光	南冥	記念1号館
構造被害	小	小	大(立入禁止)	小	中ないし大
仕上被害	大	大	-	中	大

宮城野校舎建物別被害状況

文部科学省（構造被災建物）調査
（日本建築学会学校建築委員会指導書・概要）

栄光 昭和39年築 RC構造 4階建
多くの柱の長辺方向に損傷度Ⅱ～Ⅳのせん断ひび割れ、せん断破壊、耐震壁にもⅡ、Ⅲ程度のせん断ひび割れ、短辺方向の耐震壁には損傷度Ⅰ、Ⅱ程度のせん断ひび割れ。主に4階、3階の垂れ壁部分に圧壊あり。構造躯体の損傷が著しく、[大破]しており、補強により所要の耐震性能を得ることが

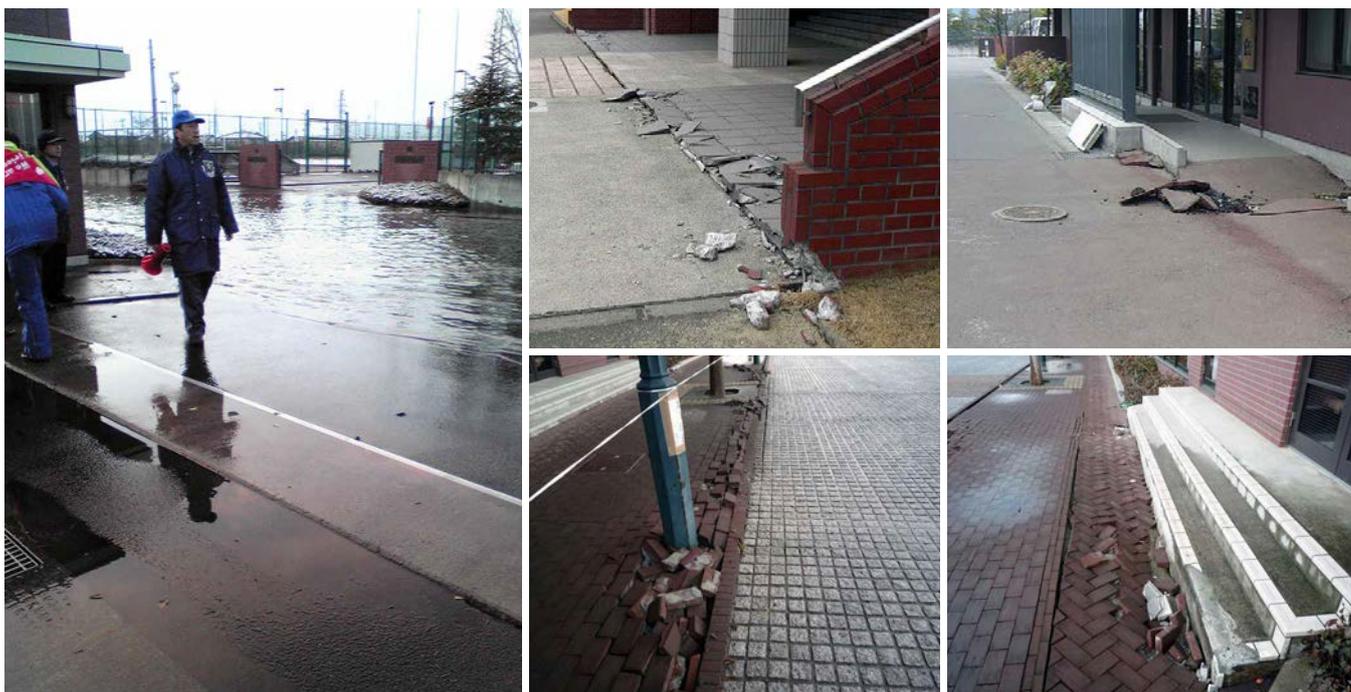
困難で、「改築」が妥当。

記念1号館 昭和45年築 RC一部S造 3階建
天井水平ブレースが多数破断、仕上げ材が落下、屋根面にうねりがある。鉄骨屋根梁とRC造柱接合部に損傷が生じ、コンクリートが落下している。RC造部分は比較的軽微。S造屋根大破。建物の建築年が古く柱が細いため、構造耐震指標Is値が小さいと予想され、所定の耐震性能を得るために十分な補強計画を検討するか、改築を検討することが必要。

南冥 昭和36年築 RC構造 4階建
第二北辰 昭和48年築 RC構造 5階建
第一北辰 昭和36年築 RC構造 4階建
多くの柱の長辺方向に損傷度ⅡからⅣ（**第一北辰**のみⅡからⅢ）のせん断ひび割れ、せん断破壊が生じている。短辺方向の耐震壁及び長い片側袖壁付き柱には損傷度Ⅱ、Ⅲ程度のひび割れが見られる。被災度は、「中破」、柱の補強による復旧の可能性があると思われる。ただし、建築年が古く、柱のせん断強度を十分確保する補強を検討するか、改築を検討することが必要。

2011

【平成 22 年度】



多賀城校舎では 500 人超の生徒が一夜を

多賀城校舎は 外見上の損傷はなく…

多賀城校舎の建物は創立 100 周年（平成 17 年 10 月 1 日）記念事業の一環として、これまで 10 年の歳月をかけて整備してきましたので外見上の損傷はありませんでした。校内で学年末の特別授業に参加していた 1, 2 年生約 700 人と 140 人程の教職員は混乱し当惑した状態ではあったものの全員無事であったことが何事にも優る救いでした。また、停電と断水とガス供給停止のため多少の不自由さはありませんでしたが、次々と襲ってくる恐怖と障害に比べればたいしたことではなかったと後日思い知らされることとなります。

【加藤雄彦理事長・校長「大震災を乗り越えて」（公益社団法人 私学経営研究会「私学経営 40 周年記念号」原稿（2012/09/07）より（P.30~に全文掲載）】

「仙台湾に 10m の津波」 の音がラジオから …

多賀城校舎では、卒業した 3 学年、秀光の 6 学年を除く 1, 2 年が授業をしていました。最初は小さな揺れ、そのうち収まるだろうと誰しも思った矢

先、突然経験したこともないような大きな揺れが起こり、それがしばらくの間続きました。生徒は机の下にもぐりましたが、机の脚をしっかり握っていても転がりそうな激しさで、一瞬建物が倒壊するのではないかと恐怖を感じるほどでした。ようやく揺れがひとまず収まったところで、全員中庭に集合させ様子を見ることにしましたが、かなり大きな余震が続いていました。雪が舞う寒さの中、ラジオから突然「仙台湾に 10m の津波」という音声が響いてきました。余震による建物被害を心配して中庭に避難させたものの、津波の心配によって今度は生徒全員をウエストウイング 3 階に避難させることとしました。

夕闇が迫り、生徒を帰宅させたくとも交通機関はマヒ、通信手段も不通で家庭との連絡はとれない、そのうち津波で学校付近の田んぼ、道路が冠水し始めました。いよいよ生徒の帰宅をあきらめざるを得ない状況となり、そのための対策を検討し始めました。校長先生の陣頭指揮の下、発電機による最小限の照明の確保、水や食料（菓子類）、毛布などの配布、十分とは言えないまでもできるだけのことをしました。幸い、ウエストウイング 1 階のトイレは、

このような時のため井戸水使用の設備が整っていたため、何とかここだけトイレを確保することができました。

ウエストウイング 3 階での “寒くて暗く長い” 一夜

寒くて暗く長い夜がこうして始まりました。沿岸部の悲惨な情報が次々と伝わると、職員・生徒の中に暗澹たる気分が伝わっていきました。近くの石油基地から火の手が上がり、時に爆発音を響かせながら一晩中燃えていた火災も恐怖を伴っていました。生徒は、不平不満をいうこともなく不自由をよくしのぎ、恐らく一睡もしないで朝を迎えました。共に一夜を過ごした生徒は、秀光を含めて 500 名を越えました。

翌朝、シャトルバスによる生徒の輸送計画を立て、何とか生徒を送り出したときにはひとまずほっとした気持ちとともに、どっと疲労感に襲われたのは私一人ではなかったと思います。しかし、シャトルバスを送り出したものの、家までたどり着けず戻ってきた生徒は 5, 60 名に上り、寮での避難生活は 3 月 15 日まで続きました。

【鈴木信男（当時英進進学コース教頭）のレポートより】

文部科学省高等教育局私学部私学行政課が宮城野校舎を視察

「公立学校だけでなく、私立学校にも同等の対応で復興に向けての支援を全力で行っていきます」



3月28日、文部科学省高等教育局私学部私学行政課の担当官が本学園法人局を来訪。3月11日の大震災による本学園の被害状況についての調査が行なわれ、宮城野校舎の損害状況を視察した。

来訪した担当官に、加藤雄彦校長先生は文部科学大臣にあてた『現状報告（東日本大震災による被害）』を提出し、3月28日時点における生徒の安否確認状況、および本震で傷んだ建物・

施設の現状、今後大きな余震が発生した場合のさらなる被害の可能性、福島原子力発電所の問題など、現時点において解決に向けて早急に考慮していかなければならない難題の数々について報告。これに対して、文部科学省担当官からは、国として学校復興の補正予算を組み、「公立学校だけでなく、私立学校にも同等の対応で復興に向けての支援を全力で行っていきます」と、力強い言葉を得た。

生徒・保護者の被災状況と被災生徒への対応について

仙台育英学園高等学校

東日本大震災による生徒（在校生）の犠牲者 なし

保護者の被災について

①保護者の死亡

1年4名、2年3名、3年4名

②家屋の流失または床上浸水、半壊（以上）

1年164件、2年166件、3年130件（通信制を除く）

被災生徒への対応

被災生徒の安全確保

(1) 電車の不通、通学バスの運行停止（危険回避）、その交通機関の混乱等で帰宅できず校舎内に泊まった生徒数約550名（校舎2、3階教室、会議室を利用、毛布及び緊急食料を配布、教職員約100名）

(2) 2日目を降 残留生徒は、13日（日）が約100名、14日が約30名、15日が10名となったが、寮に宿泊、最後の生徒が帰宅できたのは4月中旬。校長以下教職員で炊き出しをした。（これらの生徒に加え、自宅倒壊・流失等の生徒が入寮した）

(3) 3月19日（土）より、可能な教職員が出勤し、生徒安否の確認を開始し、3月31日頃までに、全生徒の安否確認完了。

秀光中等教育学校

東日本大震災による生徒の犠牲者

①在校生はなし ②平成22年度卒業生 死亡1名

被災生徒数

(1) 家族の死亡

5年2名（父1名 祖母1名）

(2) 家屋半壊以上等

55件

1年4件、2年8件、3年4件、4年10件、5年13件、6年16件

被災生徒への対応

被災生徒への安全確保

(1) 3月11日に校舎内教室に宿泊した生徒数151名

(2) 3月12日以降 帰宅困難生徒は学校の寮に宿泊

3月20日に最後の生徒が帰宅

(3) 3月29日（生徒入校許可日）頃までに全生徒の安否確認

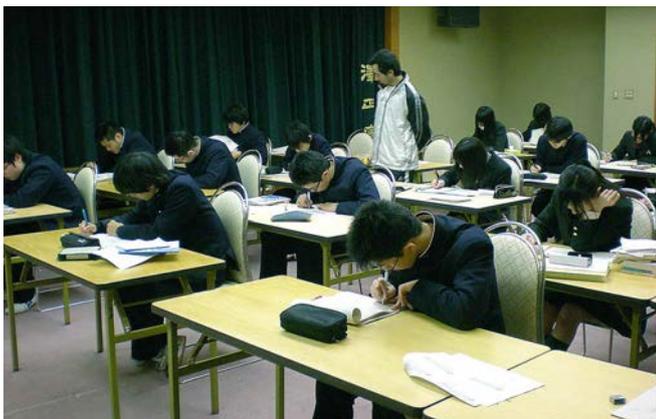
2011

【平成 23 年度】

復興に向けて 02 2011. 4. 02 - 10

秀光 6 年生 山形蔵王で疎開学習 失われた学習時間を取り戻す

3月11日の大震災での被災により、平常授業を含む学習の機会が少なからず奪われた。この学習の不足分を少しでも補おうと、授業再開までの間、大学受験を1年後に控えた秀光6年生を対象に、震災の地を離れた場で「疎開学習」が実施された。行われた場所は山形蔵王温泉にある宿泊施設(高原ホテル)『ヴァルトベルク』。期間は4月2日(土)から10日(日)までの8泊9日。28名の生徒が参加した。



復興に向けて 03 2011. April

NYSE メンバーから励ましのメッセージが Dear Sendai Ikuei Students

震災後、さまざまな方々から「仙台育英、頑張れ!」のメッセージをいただいた。最初に送ってくださったのは、秀光誕生3年目(1998/平成10年)から毎年、おもに多賀城市文化センターを会場にして秀光生徒とのジョイントコンサートを行って来たニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル(NYSE)のメンバーの方々。10年以上にわたって培ってきた互いの信頼の絆を確かめ合った。

* * * * *

Please know that you and your families are in my daily thoughts and prayers. I have always been amazed by the passion and pride that you have always shown toward our joint concerts together. In these dire times please do not give up hope. Believe it or not, you can be a beacon of hope and possibly provide comfort for all of those in your community by continuing to pursue your musical ambitions. Be it through playing local songs of your town for your families or performing duets in public for those in hospitals or for those in need at homeless shelters. Continue to be creative and may you be rewarded beyond your wildest dreams. I hope that I may again have the opportunity to work closely with all of you in the very near future.

Roman Cisneros Clarinetist, New York Symphonic Ensemble

復興に向けて 04

韓国の企業『KOLON』の方々が義援金を携えて 困難を乗り越え ともに走ろう



2011. 4. 07 & 4. 27



4月7日、授業再開に向けて校舎の復旧工事が急ピッチで行われている本学園宮城野校舎に、韓国の企業『KOLON(コーロン社)』から3名の方々が来訪。韓国のスポーツを愛する方々や同社の社員有志から集めていただいた義援金を仙台育英学園へと届けてくださった。韓国における同社主催のマラソン大会で本学園とつながりがある同社の呼びかけで集まった義援金の額は、なんと1億3,000万ウォン。また、3週間後の4月27日には700人分にも及ぶ肉を携えて多賀城校舎へ。食べきれないほどの焼肉で生徒たちを励ました。

仙台育英学園 東日本大震災復興計画 (第1次) 2011. 5. 30 HPに掲載

宮城野・多賀城校舎の木々が青々とし、成長の力強さを感じられる暖かな日々が続くようになって参りました。しかし、多賀城校舎から僅か300mしか離れて

いない国道45号線周辺は大津波の被害から未だ復旧できない状況があらこちらで見受けられ、あの時のことが甦り、心が痛みます。

さて、5月27日(金)開催されました理事会・評議員会において「仙台育英学園 東日本大震災復興計画」(第1次)が決まりましたので、その骨子を下記のとおりお知らせいたします。

関係の皆さまには復興計画の実行過程

において多大なるご迷惑とご辛抱をおかけすることとなりますが、一日も早い安心・安全な教育環境づくりを目指して参りますので、何とぞご理解を賜りますようお願い申し上げます。

記

1 宮城野校舎に所在する栄光、南冥、記念1号館、第二北辰の4棟は来月初旬

未来へのステップ 01 2011. 4. 21

秀光中等教育学校 第9回入学式 多賀城校舎の桜、満開の日に



多賀城校舎中区南側に植えられた桜が美しく花開いた4月21日(木)、多賀城校舎グローリーホールにおいて『秀光中等教育学校 第9回入学式』が挙行された。秀光が1996年(平成8年)に中学校としてスタートしてから16回目の入学式となる。新入生は53名。新入生代表の丸山太啓くんは、「先月、3月11日に起きた東日本大地震では多くの方々が犠牲を負いました。このような状況の中で我々1年生53名は家族の思いやりや期待に包まれ、平成23年度入学生として憧れの秀光中等教育学校の門をくぐることができました。私たちに今、求められていることは東北地方をさらに復興に導いていけるような自立した精神と思いやりのある人間になることです」と、力強く宣誓した。

未来へのステップ 02 2011. 4. 29

仙台育英学園高等学校 全日制課程入学式 志を持ってことにあたれば



4月29日(金)、仙台育英学園高等学校全日制課程の入学式が多賀城校舎グローリーホールで挙行された。この日は、偶然にも宮城県が東日本大震災からの復興に向けて一丸となることを誓って“震災復興キックオフデー”と名付けられた日。午前9時の式では特別進学コース、外国語コース、英進進学コースⅠ、Ⅱ類の新入生が、午後3時の式ではT-フレックスコースとM-フレックスコースの新入生880名がグローリーホールに並んだ。

「みなさんには郷土宮城の復興に向けた期待と強い願いが託されているようであります」「夢や希望は、志をもってことにあたれば、いつかかたちとなってあらわれると信じています」(校長式辞より)

復興に向けて 05

2011. 4. 26 -

生徒たちによる炊き出しボランティア

私たちも被災された方々の役に立つことができるのだ



5月からの授業開始を前に、生徒たちが避難所生活をしている方々への“炊き出しボランティア”をスタートさせた。

「大地震のあと、4月の中旬まで学校にも通えないまま家でテレビニュースを見て、なんとか被災された方々の力になることはできないかと思っていました。今回の炊き出しで、私たちも被災された方々のお役に立つことができるのだと実感しました」(参加した外国語コース生徒)

から12月下旬までの間、解体工事を行う。

2 宮城野校舎には第二北辰に代わる「宮城野1号館・2号館」(仮設校舎)を8月上旬までに完成する。

3 解体工事の進捗状況を見ながら、遅くとも本年12月初旬には新南冥(のべ床面積約7,500㎡)、新栄光(のべ床面積約2,800㎡)、新体育館(のべ床面積

3,000㎡)、合わせて約13,300㎡の3棟を着工する。竣工時期は平成25年3月を目標とする。

4 多賀城校舎中区駐車場(グローリーホールと真勝園グラウンドの間)には6月下旬までに多賀城1号館(仮設校舎)を建設する。

なお、今後予想されている余震や福島原発事故の状況により本計画の進捗状況に影響がでる場合もありますので、ご了承承願します。

以上

2011

【平成 23 年度】

未来へのステップ 03 2011. 7. 17

2011 NYSE とのジョイントコンサート グローリーホールを会場に



1998 年（平成 10 年）から多賀城市文化センターを会場に開催されてきたニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル（NYSE）と秀光とのジョイントコンサート。

この年は開催自体が危ぶまれていたが、各方面からの支援・協力により本学園多賀城校舎グローリーホールで開催された。さらに、日本を代表するピアニスト、仲道郁代さんの特別出演というサプライズもあり、震災の悲しみを少しの間忘れさせる素晴らしいコンサートとなった。

未来へのステップ 04 2011. 7. 10 - 18

『国際物理オリンピック 2011』に出場 世界大会で金メダルを獲得



これまで、『日本ジュニア数学オリンピック』、『物理チャレンジ 2010』金賞など、数学、物理、化学などの大会で素晴らしい成績を残してきた佐藤遼太郎くん（塩竈第二小出身）が秀光 6 年のこの年、ついに“世界大会”へ！ タイのバンコクで開催された『第 42 回 国際物理オリンピック 2011』に日本代表 5 人のうちの 1 人として出場、「理論問題試験」「実験問題試験」に挑戦し、金メダルを獲得した。5 人のメンバーは灘高校 3 人、開成高校 1 人、そして佐藤くん。佐藤くんは翌年、東京大学理科 1 類に現役で進学した。

復興に向けて 06

2011. 4. 25 - 7. 08

外国語コース ハワイ・ホームステイ研修 ARIGATOU! HAWAII!!!

仙台育英外国語コース 2 年生の海外研修が、2010 年（平成 22 年）10 月に開校した本学園の現地校 ILion Hawaii School (ILHA: アメリカ合衆国ハワイ州・ホノルル市) で実施された。この研修は、通常の期間より長期間の 2 ヶ月半（4 月 25 日～7 月 8 日）。その理由は、「大震災で被害を受けた生徒たちの心を癒してやりたい」との思いから ILHA の Earl Okawa 校長先生や現地の日米協会、ハワイ在住の日系人、アメリカ系企業の方々のご好意により、現地の方々がボランティアでホームステイを引き受けてくださったため。写真は現地での「まつり インハワイ」の様子。感謝の気持ちでパレードに参加した。



仙台育英学園 東日本大震災復興計画 (第 2 次) 2011. 8. 2 HP に掲載

優雅な七夕飾りが風に揺られ、そこに書いてある短冊の一片に大震災の犠牲になられた方々への祈りや日常生活に戻りたいと願う切なる思いを拝見するとき、同じ気持ちが心から湧いてくるのを感じます。

昨日開催されました本学園理事会・評議員会において東日本大震災復興計画

(第 2 次) が策定され、すでに決まっている同計画（第 1 次）と合わせた内容となって本計画が実施されます。今後は国、県はじめ関係機関のご指導を受けながら下記の通り進めて参ります。

記

1 宮城野校舎に所在する 5 棟の耐力度調査の結果から国の定める基準（4,500 点）に満たないことが判明しました。これと並行して進められている耐震診断の内容及び日本建築学会から示された指導

書に基づいて、第一北辰の利用を大幅に制限することになります。

2 8 月 1 日使用開始予定の仮設校舎（宮城野 1 号館・2 号館）では第一北辰の普通教室数を補うことが困難なため、8 月下旬を目途に仮設校舎（宮城野 3 号館・4 号館及び多賀城 2 号館）を整備します。これにより、英進進学コース II 類の第 1・2 学年（4 学級）は多賀城校舎に移転することになります。M-フレックスコース及び通信制課程は引き続き宮城野校舎で授業を行います。

世界各地のさまざまな方々から支援・励ましが



▲ 4月28日、南アジアにあるブータン王国の小中一貫校の生徒達から、「私達はみんなあなた達のために祈り…」といった心のこもった励ましと応援のメッセージが。



▲ 5月7日、シンガーソングライターの高橋優さん（1983年生まれ、秋田県横手市出身）によるミニライブが多賀城校舎グロリーホールで開催された。



▲ 津波で制服を失ったM-フレックスコースの生徒のために、オンワード商事が新しい制服を無償提供して下さることに。5月21日、宮城野校舎で贈呈式が行われた。



▲ 5月24日、アメリカ空軍に所属しハワイで働くトレーシー・サエキさんが、現地の小学生が折った千羽鶴を携えて多賀城校舎に。ILHA研修での本校生徒との交流が縁。



▲ 本校の節電対策に賛同して下さった『アーバ・とおやま』（七ヶ浜町汐見台）の星玲さんが、扇風機50台を寄付して下さった。（6月29日）



▲ 本校出身、日本・クロアチア友好協会仙台支部長の渡辺公一さんが、交換留学生として本校でかつて学んだクロアチアにある姉妹校の生徒からの寄付金を届けに。（7月1日）

宮城野校舎解体工事及び
宮城野・多賀城仮設校舎設置

- 2011.3.19
法人局を「第二北辰」大会議室に移動して執務を開始、併せて災害復興本部を設置
- 2011.7.01
仮設校舎「多賀城1号館」完成
- 2011.7.04
法人局を宮城野校舎から多賀城校舎に移転
- 2011.7.20
宮城野校舎「南冥」解体工事開始
- 2011.8.01
仮設校舎「宮城野1・2号館」完成
- 2011.8.09
宮城野校舎「栄光」解体工事開始
- 2011.9.01
仮設校舎「宮城野3・4号館」及び「多賀城2号館」完成
- 2011.9.22
宮城野校舎「記念1号館」解体工事開始
- 2011.10.01
仮設校舎「宮城野5号館」完成
- 2011.10.04
宮城野校舎「第二北辰」解体工事開始
- 2011.11.07
宮城野校舎「第一北辰」解体工事開始

3 宮城野校舎の復興計画に関する協議を設計関係者と継続的に進めて参りました。その結果、新南冥（延べ面積6,748㎡）、新栄光（延べ面積4,921㎡）、エントランス（延べ面積366㎡）、新北辰（体育施設・通信制課程・実習施設など：延べ面積概ね5,100㎡）、合わせて延べ面積概ね17,135㎡によって構成される内容で今後進めていく予定です。

4 多賀城校舎及び多賀城セクションの大規模修繕工事は7月20日から始まりまし。これらにかかる資金は1億5千万円になる見込みです。

5 さらに、上記2の仮設校舎のリース料が1億6千万円になる見込みです。

6 これまでに行った緊急修繕費、廃棄物処理費、引越し費などおよそ6千万円支出していますが、今後さらに移転費用などが増加する見通しです。

おります。しかし、3年後には新たな校舎が国や県等のご支援により完成いたします。それまでの間、本学園への変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。なお、今後の計画が最大余震などの発生等により遅延しないことを祈っております。

以上

これまでも生徒・保護者はじめ職員そして関係の皆さまにはご不自由さとお辛抱をおかけし、大変申し訳ない気持ちで

2011/2012【平成23年度】

復興に向けて 08

2011. 9. 12

宮城県議会総務企画委員会県内調査（宮城野校舎）

宮城野新校舎竣工への支援を要請

「大震災の被害状況」について、及び「生徒への対応について」の調査のために、9月12日、宮城県議会総務企画委員会の委員10名と地元議員2名が来校（宮城野校舎）した。本学園から大泉学園副理事長（当時）が3月11日当日、生徒は平常授業のため校舎内にいたが、生徒、教職員ともに1人の怪我人もいなかったことを報告し、宮城野校舎の被害が甚大なために5棟すべてを解体して全面的改築をし、3棟に集約して2013年（平成25年）3月末の竣工をめざすことへの支援を要請した。質疑応答・意見交換終了後、震災による被害の跡が残る第一北辰4階の状況を視察していただいた。



復興に向けて 11 2011. October

2011年 秋～冬 宮城野校舎で



▲ 震災から7ヶ月が過ぎた10月11日、宮城野新校舎建設の工事現場で、昭和20年代の“初代宮城野校舎”の基礎が偶然見つかった。発見の現場は、解体中の記念一号館の下。コンクリートの基礎と、数十年間土にあって赤茶色に錆びついた鉄骨が掘り出された。このコンクリートと鉄筋は昭和24年当時、多賀城海軍工廠（こうしょう）から移築され、当時、講堂として使用された建物の基礎。初代宮城野校舎の面影が、数十年の眠りから覚め、“三代目”宮城野新校舎の建設現場に姿を現したといえる。

復興に向けて 09

2011. 9. 14 - 16

特進1年の菅原さん、日下さんが夏季ダボス会議に参加

世界的な会議で自らの体験を報告



中国・大連で開かれた『夏季ダボス会議』に、特別進学コース1年の菅原彩加さんと英進進学コース1年の日下マリアさんが招かれ、2人は自らの被災体験と被害地の深刻な現状を伝え、被災地への長期的な支援を訴えた。この会議に、仙台育英獅子太鼓部5名も参加した。



▲ 新校舎完成に向けて急ピッチの工事が進む宮城野校舎で仙台育英軽音楽同好会、初の野外ライブが開かれた。特設のステージで演奏したのは2010年（平成22年）秋に誕生した同好会のメンバー。M-フレックスコース500人の生徒が秋空の下で仲間が演奏する音楽を楽しんだ。

復興に向けて 10

2011. 12. 08

キューバ復興支援コンサート

「頑張っぺ、仙台育英」の歌声に

キューバのミュージシャン“スエナ・クバーノ”によるコンサートが、新校舎建設のための工事が進められている宮城野校舎屋外の特設テント内で開かれた。会場には宮城野の仮設校舎で学ぶM-フレックスコースの生徒と、スペイン語を学ぶ外国語コースの生徒が招かれた。



加藤雄彦理事長・校長先生がキューバ共和国から叙勲

文化、スポーツでの10年を超える友好親善のしるしとして



キューバと日本両国の友好親善を促進した功績により、加藤雄彦理事長・校長先生がキューバ共和国から『友好勲章』を贈られた。

本学園とキューバ共和国との交流は10年以上前に遡る。1999年（平成11年）に駐日キューバ大使館からエルネスト・メレンデス特命全権大使（当時）が本学園を訪れ、「キューバと宮城県との400年におよぶ友好関係」について講演。その講演での“出会い”をきっかけに、本学園はキューバ共和国との友好のしるしに、創立100周年記念事業の一環として首都ハバナに支倉常

像を寄贈するプロジェクトをスタートさせ、2001年（平成13年）、ハバナにおいて除幕式が行われた。また、2000年（平成12年）にはハバナ・マルセロサラード校との姉妹校提携、シドニーオリンピック参加のキューバ野球チームの合宿地としての受け入れやワールドカップ出場の女子バレーボールチームの練習地としての提供など、スポーツ面でも多くの交流が行われてきた。『友好勲章』は、これらの友好親善貢献への謝意として贈られたもの。授与式は11月29日、東京都内のキューバ大使館で行われた。

宮城野校舎地鎮祭

来春（2013年3月）の完成に向け、東北復興の願いを込めて

2012年1月23日、宮城野校舎において新校舎建設のための地鎮祭が挙行され、学園理事長 加藤雄彦先生が工事の無事を祈り、鍬入れを行った。

2011年3月11日に発生した東日本大震災以来、我々は苦難の時期を過ごして参りました。その中であって、日本国内はもちろんのこと、海外からも沢山のお励ましの言葉を頂き、復旧から復興へのモードに、切り替えられようになりました。本日、東北復興の願いを込めて、創立107周年を迎えた仙台育英学園は、宮城野校舎復興事業を開始いたします。皆様には、今後とも温かいご支援を賜りますようお願いをしながらお願い申し上げます。

平成24年1月23日

学校法人 仙台育英学園
理事長 加藤 雄彦



インドネシア共和国バンドン市教育訪問団・姉妹校提携式

“アジアの仲間がたくさん増えました!!”

2012年3月29日、本学園とインドネシア共和国バンドン市の高校14校との姉妹校提携が行われた。インドネシア共和国バンドン市から、同市教育委員会教育長および同市高校の校長13名と副校長1名が3月28日に来日。翌29日に多賀城校舎NCホールにおいて本学園

との姉妹校提携式が挙行された。姉妹校提携の調印式のあとは交流・親睦会が。本学園からは秀光オーケストラが登場。インドネシアからは同行した民族衣装に身を包んだ楽団と歌手が同国の民族楽器アングレンによる演奏が行われた。

2012 【平成24年度】

復興に向けて 13 2012. 5. 26

M-フレックスコース1年生が植樹祭に参加 千年希望に輝く丘造りのために



5月26日、岩沼市にある空港南公園。この公園内に震災瓦礫を盛り土にして津波よけの丘陵（千年希望の丘）が造られ、集まった約900人の参加者によって約20種類、6,000本の苗木が植樹された。この植樹祭は横浜国立大名誉教授である宮脇昭先生の提唱により大震災で甚大な被害を受けた岩沼市が震災復興の一環として開催したものだ。この日、M-フレックスコース1年生がボランティア活動として参加し、植樹活動を行った。

未来へのステップ 07 2012. 7. 14

第1回サイエンス・コ・ラボ 科学的探究心を磨こう！

特別進学コースと秀光中等教育学校生徒による理科の共同実験講座『サイエンス・コ・ラボ』。“科学的探究心を磨こう”のスローガンのもと、東北大学から専門の先生を招いて指導を受けながら専門分野の実験・実習を行うこの講座は、2012年7月からスタートした。記念すべき第1回目は東北大学高等教育開発推進センター教授の指導による『霜箱製作と自然の放射線の観察』。多賀城校舎化学実験室で実施されたが、翌2013年度以降は宮城野校舎の新しい実験室に場所を移して実施*1されている。



*1：『サイエンス・コ・ラボ』については第2部P.96,97に詳細

復興に向けて 14

2012

米国、イタリア、フィンランド…この年もたくさんの方々からの支援・励ましが



▲4月23日、ニューヨーク在住のシンガーソングライター、AKさんが多賀城校舎に。NCホール音楽室で秀光2年生と4年生の授業に参加してピアノの弾き語りを披露し、生徒たちと語り合う時間を持った。



▲5月31日、米国ニューヨークを拠点に活躍する世界でもトップレベルのアンサンブルを誇る小編成のオーケストラ、オルフェウス室内管弦楽団が本校・多賀城校舎を訪れ、ワークショップが開催された。



▲9月15日、イタリア・クレモナ在住の弦楽器製作者が共同製作したヴァイオリン1挺を被災地の学生オーケストラに贈るという目的で結成された「Violino Goschy」のメンバーが多賀城校舎に。贈呈式及び演奏が行われた。



▲9月18日、仙台出身でニューヨーク在住のシンガーソングライター、KI-YO（清貴）さんが来校。ピアノ弾き語りによるミニライブ&トークショーが多賀城校舎サウスウィング中講義室で開催された。



▲10月5日、米国ニューヨークを拠点に活躍するライブペインター、PESUさんが来校。白いキャンバスに即興的に絵を描いていくライブペインティングを多賀城校舎の教室で秀光生徒を前に披露。

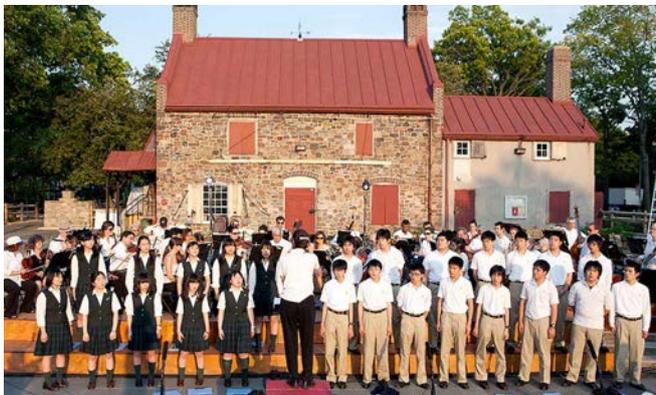


▲12月10日、東日本大震災の被災地や全国各地の子供たちのために企画された『サンタ・プロジェクト』の一環として、フィンランドから“サンタさん”及び女性デュオが来校。心温まる“クリスマス会”を開いてくれた。

未来へのステップ 08 2012. 7. 14 - 26

秀光海外研修【第1回 NYSA】

NYでの海外研修がスタート



この年から秀光の海外研修“NYSA (New York Shukoh Academy)”がスタート。第1回は2012年7月14日から26日までの約2週間。4年生が米国ニューヨーク州内において現地の家庭にホームステイしながら、大学で語学研修、NYの名所や大学を巡る。この年は現地でのコンサートに参加。文化交流を行った。

未来へのステップ 10 2012. September

陸上長距離、ケニア出身選手が全国大会で優勝
新生陸上競技部長距離、健闘！



ケニアからの留学生選手男女2人が、インターハイと国体で優勝した。男子ヒラム・ガディアくんはインターハイ1,500m、ぎふ清流国体5,000mで優勝。女子のメリー・ワイディラさんはインターハイ1,500m、国体3,000mで優勝を勝ち取った。

未来へのステップ 12 2012. 4. 25

ILHA

本学園ハワイ現地校として

2010年(平成22年)10月1日、米国ハワイ州ホノルル市内に、本学園ハワイ現地校“ILHA” (I-Lion Hawaii School) が開校した。一般家庭にホームステイしながら語学(英語)、Social Studies、Sports & Activitiesなどの研修が行われる。研修は外国語コースを皮切りにスタートした。写真(左側)は4月25日、秀光(多賀城校舎)で講演中のILHA校長 Earl Okawa先生。

未来へのステップ 09 2012. 9. 18

平野さんロンドン五輪銀メダル獲得の報告会

約束のメダルを手に再訪



本学園出身の卓球選手・平野早矢香さん(ミキハウス所属)が9月18日、多賀城校舎へ。半年前の3月にも来校し、ロンドンオリンピックを前にして「メダルをとって日本に帰ってきます」との言葉を生徒たちに残したが、その“宣言”どおり、女子団体で銀メダルを獲得。約束のメダルを手にしての報告を行った。

未来へのステップ 11 2012. 10. 19 - 21

陸上リレーチーム、日本ユース選手権で優勝
短距離リレーでも初の快挙！



短距離も負けず劣らずの快挙。仙台育英陸上競技部のリレーチームが『第6回日本ユース選手権』(10月19～21日、愛知県名古屋市)のリレー(4×100m)に出場し、40秒94のタイムで優勝した。



2012/2013【平成24年度】

復興に向けて 15

2012. 9. 19



建設が進む宮城野新校舎 上棟式 翌年3月の竣工を目指して 「新南冥」校舎の屋根に

9月19日（水）、建設が進む宮城野校舎で、竣工後も建物が無事であることを願っての上棟式が挙行された。式は建設現場内に特設された式場で行われ、式場内での神事のあと、参列者は建設中の『新南冥』の建物の前に。一行が見守る前で、紅白の幕に包まれた屋根材が巨大なクレーンに吊るされて上昇し、建設中の建物の最上部の一角に組み込まれた。新しい宮城野校舎の建設は、2013年3月の竣工をめざして、急ピッチで進められていく。

未来へのステップ 13 2012. 8. 10 - 15

書道部 せんだいメディアテークで記念展 部員・卒業生による席上揮毫も

全国書道展に出展し、数々の賞を獲得してきた仙台育英書道部が、『第19回国際高校生選抜書展全国準優勝・宮城県高校生選抜書展10年連続団体受賞記念展』をせんだいメディアテーク5Fギャラリーで開催した。発案は、10年分の輝かしい実績とともに築き上げてきた仙台育英書道部の卒業生たち。会場には現役部員と卒業生たちの10年間の受賞作品が展示された。600人に及ぶ人たちが詰めかけ、会場では席上揮毫も行われた。



未来へのステップ 14 2012. 9. 21

石巻教育連絡事務所 竣工式 石巻の新しい教育拠点として

仙台育英学園と石巻地区を結ぶ新しい教育の拠点、石巻教育連絡事務所の竣工式が9月21日に開催された。事務所延床面積180,83㎡、鉄骨2階建て。10月3日からは仙台育英学園と石巻地区を結ぶ3台の石巻シャトルバスの運行も始まり、石巻地区に住む生徒の通学のための“シャトルバス・ステーション”としての機能も本格的にスタートした。





硬式野球部、全国優勝

明治神宮野球大会、
全国優勝を手にする！

夏の甲子園大会（2年ぶり23度目）で3回戦進出。続く国体（高校野球硬式の部）で全国優勝、そして2年生を中心にした新チームは秋季東北地区高校野球大会を勝ち抜いて6年ぶり7度目の優勝を手にした末に、なんと第43回明治神宮野球大会【高校の部】で全国優勝を果たした。この時の上林誠くんの「これで満足するのではなく、さらに上を目指して…」の挨拶の言葉は後輩たちへと引き継がれ、3年後の大輪の花（夏の甲子園準優勝）へと繋がっていく。

マレーシア、ニュージーランド、インドネシア、アイルランド、中国…国際交流の輪はさらに広く、大きく



▲ 2012年3月15日、マレーシアの高校生36名が本校を訪問。外務省が進める『21世紀東アジア青少年大交流計画』にもとづいたもので、秀光の生徒と交流。三味線&長唄の授業、部活動の様子などを見学した。



▲ 4月10日、ニュージーランドのクライストチャーチ市にある姉妹校、Christchurch Boys' High School から15名の生徒が本校へ。本校生徒との交流後、一行は南三陸町で被災者支援のボランティア活動を行った。



▲ 9月24～28日、2012年3月に姉妹校提携が行われたインドネシア共和国バンドン市の高校を仙台育英獅子太鼓部の部員10名が同市からの招待を受けて訪問。獅子舞と和太鼓による演奏を披露した。



▲ 9月28日、ジョン・ニアリー駐日アイルランド共和国大使が本校を訪ね、外国語コースと特別進学コースの生徒を対象に、多賀城校舎中講義室で「アイルランドの歴史」「日本とのつながり」等をテーマに講演を行った。



▲ 2013年1月、本校と姉妹校提携を行ったインドネシア共和国バンドン市にある高校の生徒28名が本校を訪問。約2週間にわたって本校生徒と一緒に授業を受けたり、福島県会津若松市を訪ねたりした。



▲ 2013年2月5日、国際交流基金日中交流センター主催による『心連心：中国高校生長期招へい事業』として1年間日本で学ぶ中国人高校生32名が来校。『これからの日中関係に必要なものは何か』などをテーマに話し合った。

2013 【平成 24 年度】



復興に向けて 16

多賀城育英グラウンド整備工事完成式並び始球式



▲多賀城校舎 野球グラウンド『真勝園』



▲多賀城校舎 多目的グラウンド（サッカー場）

2013年3月24日

学校法人仙台育英学園 新宮城野校舎 竣工式・除幕式

学園復興への道

竣工式・除幕式 挨拶文からの抜粋

桜前線が北上し、桜の開花が待ち遠しい季節となりましたこの良き日に東日本大震災で甚大な被害を受けた仙台育英学園宮城野校舎の改築工事が滞りなく終わりましたことに本学園を代表して御礼申し上げます。

本学園にとって宮城野校舎は創立者加藤利吉先生のご苦勞の産物です。なぜならば、太平洋戦争末期の仙台空襲による校舎焼失、戦後の学校用地の進駐軍による接収、社会混乱のなかでの土地探し、極度の建築資材の不足と幾重にも困難があったなかで、不撓不屈の強靱な精神力を持った利吉先生が私財を投じて学園復興の地として今日まで私学教育を支えてきた場所だからです。

宮城野の萩が美しく咲くみやびな地に学園復興の象徴となる新校舎を建築し、私立学校の運営を再開できることは感慨深いものがあります。それは利吉先生のご苦勞には遠く及ばないものの、学園代表者としてその責務を

果たすことができたからです。

これから運動施設を中心としてさらに関連の工事は継続されていきますが、来月12日の始業式からは多賀城校舎に移動していた生徒たちを迎え、13日には新入生を受け入れられることを楽しみとしながら、新年度の準備を進める所存です。

奇しくも、本日は利吉先生、「法徳院殿壽照興学利圓大居士（ほうとくいんでんじゅしょうこうがくりえんだいこじ）」の五十二回忌にあたります。この日に合わせて宮城野新校舎が竣工したことも利吉先生の精神が本学園に生きていることの証であると思います。

平成 25 年 3 月 24 日
学校法人 仙台育英学園
理事長 加藤 雄彦



2013. 3. 04

多賀城校舎グラウンドが全天候型のスポーツ施設に

新しい宮城野校舎の建築工事と並行して、多賀城校舎の運動場の施設整備が進められた。

多賀城校舎の野球場『真勝園』と多目的グラウンド（サッカー場）、テニスコートが、全天候型の緑あざやかなスポーツ施設に生まれ変わった。3月4日（月）、多賀城育英グラウンド整備工事完成式並び始球式が多賀城校舎中區で挙行された。屋内練習場内の式典の後には多目的グラウンドで仙台育英サッカー部によるPKでの始球式。続いて野球場『真勝園』で学園理事長 加藤雄彦先生と工事を担当した安藤建設株式会社東北支社支店長による始球式（ともにバッターとして）が行われた。



▲多賀城校舎 テニスコート

大震災を乗り越えて

公益社団法人 私学経営研究会 私学経営 40 周年記念号掲載原稿 (2012/09/07)

学校法人 仙台育英学園
仙台育英学園高等学校
秀光中等教育学校

理事長・校長 加藤 雄彦

ここに掲載するのは、学園理事長・校長 加藤雄彦先生が 公益社団法人 私学経営研究会『私学経営 40 周年記念号』（2013 年 4 月号）掲載のために寄稿された『大震災を乗り越えて』の全文。執筆されたのは 2012 年 9 月で、大震災発生の瞬間からその後の生徒等への対応、学校再開、そして宮城野校舎建て替えの決意、2012 年 1 月の地鎮祭から翌年 3 月に竣工式を迎える半年前までのいきさつ…これらへの記憶とそれぞれへの思いが克明に記されている。

【東日本大震災】

平成 23 年 3 月 11 日（金）、次の日に予定されていた仙台育英学園高等学校通信制課程（在籍 544 人）の卒業証書授与式の準備が滞りなく終わり、宮城野校舎法人局の職員に多賀城校舎に移動（車で 15 分程度、距離にして 9km）することを告げて、いつも通り国道 45 号線を石巻方面に向かいました。途中忘れ物に気づき、多賀城校舎そばの自宅の扉を開けた瞬間に自分の生涯で経験したことのない、海からの怒号のような地鳴りと籠の背中に乗って振り回されているような激震に襲われました。その揺れは収まるどころか、強弱を交えながら 3 分近く続き、辺りは建物や街路のきしむ轟音とあちこちで助けを求める声が混合し、この世の終焉とはこのような状態をいうのかと恐れ、思考停止になっていく自分を奮い立たせることで必死でした。

一旦揺れが収まり、自分や周囲の人々が怪我もなく無事であり、近所で火災が発生した様子もなかったことを確認できました。反射的に防災服に着替えて、災害対策用リュック（懐中電灯、ラジオ、電池、充電器、タオル、マスク、軍手、飴、ミネラルウォーター

ター、着替え、ビニール袋、ティッシュペーパー、雨具、ビタミン剤などが入った 3 日分の 10kg 登山用）を担ぎ、余震が続くなか徒歩 5 分の多賀城校舎に到着しました。

幸いにも多賀城校舎の建物は創立 100 周年（平成 17 年 10 月 1 日）記念事業の一環として、これまで 10 年の歳月をかけて整備してきましたので外見上の損傷はありませんでした。校内で学年末の特別授業に参加していた 1, 2 年生約 700 人と 140 人程の教職員は混乱し当惑した状態ではあったものの全員無事であったことが何事にも優る救いでした。また、停電と断水とガス供給停止のため多少の不自由さはありませんでしたが、次々と襲ってくる恐怖と障害に比べればたいしたことではなかったと後日思い知らされることになります。

一方、築 40 年から 50 年を越える老朽化した宮城野校舎の 5 つの建物は損傷著しく、多賀城校舎と同様に学年末の特別授業や部活動に参加していた 1, 2 年生約 500 人と 100 人近い教職員は激しい揺れのなか、建物の崩壊を恐れ一斉に校庭に無事避難していました。ところが執拗に続く余震のため建物の破壊が進むことを教職員は懸念して生徒の身の回り品を

持ち出すことを断念させ、帰宅させることといたしました。当然のことでしたが交通機関は全てストップし、徒歩か自転車での帰宅が困難な生徒たちは友人、親戚、縁者の家を頼るか、多賀城校舎への避難を強いられることとなったのです。この判断と指導は副理事長、学事担当常務理事、法人局長、教頭先生らによってなされたことは、大津波対策で奔走していた我々多賀城校舎側に緊急防災電話（宮城県沖地震を想定してNTT東北から被災後1時間に限り使用可能な有線電話）で伝えられましたが、適切な処置だったと今でも考えています。

岩手県の三陸沿岸部では学校現場や地域の防災対策の一環として強力に推進されてきた津波対策と実際の教育・訓練は成果を挙げ、釜石の奇跡と後日評価された「津波てんでんこ」（自分の命は自分で守り、家族は自分と同じ避難行動を直ちにとると信じて各自の最善を尽くす）を見事実践したことはご存知のことと思います。（もちろん大槌町はじめ自治体のなかには想定津波を超える被害に遭われ、首長や職員が多数犠牲になったことも忘れてはなりません。）

では宮城県は一体どうだったのでしょうか？

宮城県、少なくとも仙台湾に面した沿岸地域に居住している人々であれば、30年以内に99%の確率で発生する宮城県沖地震への備えのため学校も自治体や地域も準備を整え、十分対応できる能力を備えていました。ところがそれは宮城県沖を想定震源域としたマグニチュード7クラスの地震への備えであり、東日本大震災の震源域である岩手三陸海岸、宮城県沖、福島・茨城沿岸の広域を同時震源とするマグニチュード9.0の大地震を想定しているものではなかったのです。

実際には約1100年前の9世紀に大きな地震や噴火が頻発したことが『日本三代実録』（901年に成立した史書、日本紀略、類聚国史一七一）に記されています。それぞれの天災との関連性は専門家ではないのではっきりしませんが事実甚大な被害を日本全国に与えています。その一部をご紹介しますと、850年11月出羽地震（M7クラス）、863年7月越中越後地震、864年7月富士山の貞観噴火（2年間）、同年6月阿蘇山噴火、867年3月大分県鶴見岳噴火、同年6月阿蘇山噴火、868年7月播磨・山城地震（M7クラス）、そして陸奥国東方沖の海底を震源域として869年7月発生した貞観地震（M8.3クラス以上）とそれに伴う大津波、871年5月山形・秋田県鳥海山噴火、887年8月仁和地震（南海地震、M8.0ク

ラス以上）等々のように平安時代前期は日本列島の地殻変動が現在のように活動期にあったことは明らかです。

特に東北電力が牡鹿半島に女川原子力発電所建設のために調査した資料や東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター等の研究では、仙台北野に過去の巨大地震とそれに伴う大津波が仙台湾の海岸線から3km侵入したことの痕跡があり、仙台北野には過去3000年間に3回の津波が遡上した証拠が堆積物の年代調査で判明しています。

にもかかわらず、仙台北野に居住し、日常の経済活動を行っていた我々は大地震と大津波を意識の外に置いていたと思います。そのため、災害速報が「仙台北野に10mの大津波が到達します。」と伝えていましたので、仙台北野からおおよそ2kmにある多賀城校舎では念のため生徒たちを3階に避難させることはしたものの、肝心の教職員は自分の自家用車が海水を被らないようにどこに移動しようかなど校庭で悠長に考えていたのが実態でした。つまり、津波は押し寄せてくるだろうがせいぜい1mぐらいだろうと高をくくっていた訳です。そして、仙台湾に面した地域にいた大半の人々の意識が同じように容易であったために、大津波で1万人を超える人々が犠牲となる悲劇が目前に迫っていたにもかかわらず避難行動につながらなかったのです。

それは突然やってきました。仙台北野エリアにある発電所、製油工場、化学プラントが大津波で破壊され次々と爆発炎上し、その火柱と黒煙が夕日に彩られて不気味に輝き、爆音と共に自分たちのいる学校に迫って来るように見えたため、3階に避難していた生徒たちから助けを求める叫びとなったのです。さらに、どす黒い海水が学校東側の水田を舐めるようにして押し寄せてくる状況が目撃され、一同騒然となりました。

幸いにも悪臭漂う海水は多賀城校舎の擁壁が食い止め、校内に浸水してくる様子がなかったため、危機管理室が中心となって次に取るべき行動は何かと対応策と問題点の検討を始めました。

1、 生徒を帰宅させるには余りにも危険ではないか。波状攻撃のようにやってくる津波、通信手段の途絶、激しい揺れが続く余震により帰路となる道路などの損害情報の不足、大津波の被害を受けた地域への帰宅の困難さなどを総合的に判断して学校内で約700人の生徒たちを宿泊させる。

2、 宿泊させるための飲料水、食料、暖をとる

ための毛布や防寒具の確保をする。(防災備品の運搬時に校用車が海水の中を走行したため2台使用不能になりました。)

3、 宮城県沖地震を想定して整備していた井戸水を利用したトイレの使用開始(ウェストウイングの1階トイレは常時水道水と井戸水混合で使用していたため、直ちに対応できました。)と自家発電機(PC、通信機器、照明用)を設置する。

4、 宿泊する生徒の名簿作りと多賀城校舎に避難してくる宮城野校舎の生徒の受け入れ準備をする。

5、 保護者、家族への連絡方法として緊急伝言サービスの活用を促し、同時に明朝帰宅可能とするための交通手段としてシャトルバス(スクールバス)と教職員の自家用車の運行計画の作成を進める。

6、 2つの保健室が中心となり、教職員を含めた体調不良者、精神的ダメージを受けている者への初期ケアマネージメントを確立する。

7、 被害甚大であることを前提として3月21日まで臨時休校(実際には4月7日午後11時32分に発生した震度6強(M7.4)の最大余震により4月15日の暫定授業開始まで休校は続きました。)とする。このことを教職員は生徒・保護者に伝える。また、教職員には特別休暇(当初21日まででしたが、燃料不足、交通機関の運行開始時期、水道・ガス・電気の復旧期間を勘案して3月31日まで各自の判断で休暇を取得できるように変更しました。)を与え、12日全員帰宅させ、家族や家庭の対応を優先させる。

8、 学校再開に向けたプロジェクトチームの編成のための人選(長期間の宿泊可能な者)とその業務を行うことが可能となる施設(仙台市側にある国際交学館と称する男子寮)を運用できるように準備する。

9、 宮城野校舎を緊急修繕するための取引業者(大林組東北支店)への連絡手段を確保する。

10、 入試部が中心となり、入学予定者(最終手続きを終了していない中学生・保護者もいました。)への連絡方法を確保する。

11、 今後、現金支払いが急増すると考えて多賀城事務局でその準備を始める。

12、 翌日に控えた通信制課程の卒業式を延期し、卒業証書の授与方法を検討する。

以上が当時の私の手帳に記録されていた内容のダイジェスト版です。これらの課題と解決に奔走し、事務局に持ち込んだ3枚のホワイトボードがこれらで埋め尽くされたころ、3月12日の朝を迎えました。

停電による暗闇で昨晚から学校周辺の状況が分からなかったわけですが、朝日に照らし出された津波被害による光景を一言で表すならば地獄絵だったと申し上げます。それは大型爆弾が幾重にも投下され、あらゆるものが破壊され、打ちのめされた被災地を生きるものを静かに探す人々の姿と緊急自動車のサイレンと自衛隊の航空機の爆音が混ざり合った非日常の空間でした。

3月25日帰宅困難のため最後まで生徒寮にいた男子生徒(家族は無事でしたが、津波で自宅は大破したケースです。)を東松島市の親戚宅に届け、お母さんと抱き合っている姿に安堵し、バックミラー越しに何度も手を振っている家族の様子にお互い頑張りましょうとつぶやき、学校再開に向けた第一歩がこれから始まるのだと自分に言い聞かせていたことをいまでも忘れません。

【三度目の復興】

学年末考査が終わった昭和40年3月10日夕方に発生した大火は宮城野校舎に新築されたばかりの南冥(RC4階建て)を除く全ての建物を焼失する惨事となりました。被災した校舎は当時の理事長加藤昭校長先生の陣頭指揮の下、12年の歳月をかけて復興工事を見事に成し遂げました。

その歩みは決して平坦なものではなく、さまざまな障害との闘いだったと記憶しています。特に、公的補助を得ることは困難でしたし、同窓生はじめ外部からの寄付も期待できない状態のなか、強く経営努力が求められました。このため、その手法をよしとしない学園内外の関係者から厳しい批判を受け、誹謗中傷の嵐が吹き荒れ、再生の慶びとは裏腹に暗い影を落としました。

もう1つ忘れてはならない大事件は昭和20年7月10日の米国空軍が投下した焼夷弾で仙台市中心部にあった錦町校舎の新品の建物を焼失したことです。その跡地を進駐軍(GHQ)は消防隊の基地として理不尽にも勝手に接収し、さらに仙台市が緑地に指定して公園に整備してしまったために元に戻れなくなってしまいました。

戦後の浮き草のような学園運営を強いられた逆境の時代にあって、やっとの思いで校地の取得に目途がたった昭和23年春、極度の物不足から校舎の建築資材の調達が困難でした。そこにイデオロギー闘争が教育現場を襲い、学園全体が荒廃し、存続が危

ぶまれました。この窮状を救ったのは本学園の創立者である加藤利吉学園長先生でした。

一昨年3月11日に発生した東日本大震災による宮城野校舎の建て替え工事はこれまでの学園の歴史を振り返ってみても比較にならないほど幸運だと考えています。これまでの温かい国内外からのご援助のおかげで復興工事は資材高騰と工事職人不足にもかかわらず順調に進んでおり、本当に有難いことです。

震災当時絶望の淵にいたわれわれの気持ちを前に進めてくれた出来事がありました。それは3月28日昼過ぎ緊急復旧工事で騒然としていた宮城野校舎仮設法人局にヘルメットを被り、文部科学省のネーム入り防災服と作業用靴を着用し、リュックを背負って訪問された私学行政課長勝野頼彦先生と地元出身の係長八木雄一郎先生からの激励でした。

「この震災で中枢となる宮城野校舎が甚大な被害を受け、ご苦労されていることは分かりました。しかしながら、この損害状況を解決するために文科省は支援します。なぜならば創立100年を超える私立学校をこのような震災を理由に失ってしまうことを見過ごすことができないからです。今後文科省から送付されてくる災害復旧に関わる通知文を検討され、不明な点があれば遠慮なく本省に相談に来てください。」という簡潔ながらも、大変心強い言葉でした。そのお言葉どおり、5月の連休中にもかかわらず、本省で私学助成課の真野善雄専門官をご紹介いただき、震災復旧と復興事業に関わるご指導を懇切丁寧を受けられたこと、そして宮城県総務部私学文書課のみなさまが寝食を忘れて本学園が復興モードに切り替わるようにお導きいただいたこと、このおかげで平成24年1月23日に宮城野新校舎地鎮祭、そして本年3月の3棟竣工まで来ることができたと同感しています。

復興に関わる総事業費55億円（多賀城校舎も含まれます。）のうち、約17億円は国から震災復旧・復興事業費として交付される予定です。さらに宮城県からは約7億円の補助金の加算をいただきました。加えて、日本私立学校振興・共済事業団からは震災関係としてすでに25億円の融資を受けました。一方、私的援助としては延べ2万人（法人を含みます。）から東日本大震災寄附金として受領させていただきました。みなさまからの多大なるご援助とご支援のおかげで東北復興の有為な人材を輩出する学校として再出発することができます。本学園にとっては3度

目となる復興事業はあと1年の時間を費やして完成する見通しです。

【祈りと願い】

米国軍の「TOMODACHI 作戦」によるオペレーションと関係者の決死の努力より仙台空港は震災前の姿を取り戻し、国内外の航空路も全て再開できました。私学経営研究会に出席するため、伊丹空港に向かう航空機の窓からは相変わらず津波で飛ばされてしまった防風林や家屋の跡が無残に残り、津波の破壊力を改めて思い知る光景が眼下に広がっています。その先には東京電力福島第1原子力発電所の廃墟を遠望することができます。震災から2年経ちますが、われわれの故郷宮城、そして東北は未だ復興の途上にあり、これからも多くの時間を要して解決しなければならぬ難問に立ち向かっていかなければなりません。

一方、震災当時の本学園同窓会長はじめ卒業生、生徒の保護者、教職員の家族、知人が大勢この大震災の犠牲となりました。宮城県は10,921人(58%)、岩手、福島両県で7,693人(41%)、全国総計では18,684人と宮城県の犠牲者が群を抜いています。犠牲になられた方々が安らかに旅立たれ、郷土の復興と大震災の被害を風化させないための礎となれることを祈念いたします。

最後に、大石久和氏（元建設省道路局長、財団法人国土技術研究センター理事長）が著した『国土と日本人』（2012年2月25日中央公論新書発行）の一文をご紹介します、私の願いといたします。

「山地が7割を占め、地震や台風にはしばしば見舞われる日本。この試練の多い土地に住み着いた日本人は古来、道を通し、川筋を変え、営々と自然に働きかけてきた。われわれが見る風景は、自然と人が共に造り上げたものだ。国土に働きかける努力を先人たちが行ってきてくれたおかげで、われわれは国土から生活の安全性や利便性を得る事ができている。貧乏で空腹を抱えていた過去の人々が、われわれの世代に贈り物をしてくれたにもかかわらず、飽食時代といわれるわれわれが、将来の世代への贈り物をしないとか、少なくともよいなどとはいえないのである。」

東日本大震災からの復興 資料編 -2

2011. 3. 11、あの日、あの時。宮城野、多賀城、それぞれの校舎で勤務していた教職員は“未曾有の大災害発生”のただ中で生徒の命を守るべく、どのように判断し、どのように行動したか。そしてそこからどのような反省と教訓を得たか。2011年12月、当時の教頭先生方にレポートを書いていただいた。ここに紹介するのは、その全文。

(担当コースは2011年12月時点のもの)

■ 2011 3.11 の記録

海外の多くの学校からボランティア ホームステイ受け入れの申し出が

村岡 利信 【2011年度 副校長】

2011年3月11日(金)は誰にとっても忘れがたい日である。午後2時46分に三陸沖を震源地とするM9.0の大地震が発生し、その後、10メートルを超える大津波が岩手、宮城、福島沿岸を飲み込んだ。

仙台育英学園多賀城校舎では、高校3年生及び秀光6年生はすでに卒業して不在であったが、まだ多くの高校1、2年生及び秀光5年生以下の生徒は6校時の授業が進行中であった。地震の揺れが驚くほど大きく、長く続き、生徒だけでなく教職員も校舎の倒壊等の危険を感じた。

授業中の教員の指導のもと、少し揺れが小さくなったところで、午後2時49分ごろから一斉に南区中庭(避難場所)への避難が開始された。校内放送する余裕も無かったので、各教員が状況を見て、避難開始の判断を行ったが、スムーズな避難行動となった。

中庭での点呼確認は順調に進んだが、各クラスの生徒の安全確認(点呼)を行っている間にも、余震で校舎が激しく揺れ、ガラス窓がガシャガシャと大きな音をたてながら揺れていた。生徒は大いに怯え、中には腰が抜け、歩行困難な女子もいた。気温は低く、保健室より毛布を持参し、数名の女子に手渡した。

南区の生徒、教職員全員が中庭に避難し、安全が確認された3時20分頃、菅野事務局長がラジカセを持参し、仙台港に10メートルの津波が押し寄せるとの警報が出されている、ウエスト3階に避難するようにと大きな声で言いながら、中庭に急ぎ足でやって来た。生徒全員を校舎(ウエストウイング)3

階及び2階に上げさせて津波の襲来に備えた。生徒の移動はスムーズに行われ、3時40分ごろには校舎への避難は完了していた。

津波は校地東側の水田やファミリーマートまで到達した。多賀城校舎地周囲の側溝から多量の水が噴出し、西門前の道路が15センチ程度水没したが、水は校地内に侵入しなかった。

生徒、教職員は校舎2階、3階で待機し、津波の襲来を警戒していたが、5時10分過ぎになり、少し落ち着いてきた。家族と連絡がとれ、迎えに来てもらって帰宅する生徒も出てきたが、この頃には三陸沿岸、石巻、多賀城、荒浜、閑上、亘理、岩沼等が巨大津波に飲み込まれて、大変な状況になっている等のラジオニュースが入ってきた。

電車(仙石線)やバスが不通となり、シャトルバス運行の安全が確保できず、運行が中止された。

携帯電話での連絡は午後5時過ぎまで、かろうじて通じる場合もあったが、(特に他地区からの電話は受信可能であった)その後はいっさい通じなくなった。

下校や帰宅の交通手段が無く、多くの生徒及び教職員が学校に泊まり込むことが予想された。多賀城校舎(南区)に泊まり込む男子生徒及び女子生徒の待機場所(教室、大会議室等)を決めて、移動させた。食料と毛布等の調達が必要になったため、多賀城校舎の備蓄倉庫(真勝園グランド脇)に教職員3、4人で行ったが、鍵を保管している職員が不在で解錠することができなかった。そのため、もう1カ所の

備蓄倉庫である伯山交通売店脇の倉庫に行き、毛布及び緊急食を入手した。西側門前の道路は15センチほど冠水しており、ワゴン車で事務局に数回分けて運んだ。この頃には小雪がちらつき、暗くなってきた。

多賀城校舎の南区校舎に泊まり込む生徒の名前を確認をし、待機する場所も指定したので後刻、迎えに来た保護者との面会もスムーズにいった。大震災当日、多賀城校舎に泊まり込んだ生徒は約550名を越え、交通手段がなくて帰宅できない教職員や生徒の世話のために居残った教職員は約100名となった。

緊急食として駄菓子類が生徒に配布された。毛布は女子には各1枚、男子生徒は2人で1枚となった。ウエストウイング校舎1階の男女のトイレが非常時には自家発電による井戸水で利用可能であったので大いに助かった。地上より投光器で執務室の窓を照らしてもらえたのは、執務室内で活動に役立ち、精神的な安心感という点でも大いに役立った。(執務室には可搬式のストーブが1台が配置されて特に女子教員は助かった。また、後日、PTA支部総会などで保護者と会った折、生徒を学校に泊め、緊急食糧等を配布したことなどについて謝意を告げる言葉を多くいただいた。)

20時頃に仙台空港やその他の津波の映像がノートパソコンのインターネットで放送されているのを見て沿岸部の衝撃的な状況を理解した。

3月12日(土)午前10時頃、シャトルバスが9時30分過ぎに順次運行開始された。石巻方面も含め、行けるところまで行くということであった。自宅が倒壊・流失等が予想されていたので、その場合、生徒は学校に戻ってくることも想定しながら、シャトルバスは運行された。

2日目以降、多賀城校舎に残留した生徒は3月13日(日)100名、14日(月)30名、15日(火)10名であった。寮に宿泊し、最後の生徒が帰宅できたのは4月中旬になってからであった。

4月13日、合同職員会議において火災発生時の生徒の心のケアの留意点を全教員で確認した。

授業を3年、2年と段階的に開始し、新入生入学式を4月29日とした。授業は4月15日からとしたが、上水道の供給再開が4月7日の余震等で遅れ、最終的に授業開始は18日(3年生)、21日(2年生)となった。

3月19日(日)より、出勤可能な教職員が出勤をして生徒の安否確認、その他学校再開の準備を始めた。その際、仙台駅東口より、朝晩の通勤バスを出していただいた。3月末までには全体の生徒の安否は確認された。

3月24日(木)在校生の通学方法調査(郵送)を開始、返送締切を4月5日とした。3月31日(木)に合格者説明会を実施し、入学式(4月29日)など今後の予定について新入生及び保護者に説明した。

東日本大震災に際し、ハワイ、カナダ、ニュージーランド、アイルランド、フランス等の姉妹校や文化交流を行ってきた海外の学校から、4週間から長期(1年)のボランティアホームステイの受入の申し出が寄せられた。外国語コース2年生は10月にILHA研修を予定していたが、被災直後の混乱した状況の学校生活が予想されたので、ハワイで4月にボランティアホームステイと併せてILHA研修を実施するため、国際センターと協力して準備に入った。

4月5日(火)、外国語コース2年生のハワイ校(ILHA)研修保護者説明会を開催した。

4月25日(月)、生徒は部活動の大会等の理由で参加できない生徒を除いて25名、渡航手続きの関係で1名が2週間遅れで元気にハワイ校研修に飛び立っていった。

ILHA研修期間中は現地市民の温かいもてなしと、音楽家、著名人等の方々から食事会、音楽会、講演会への招待等数々のもてなしを受けた。日本領事館での若田光一宇宙飛行士の講演会なども忘れがたい思い出となった。

外国語コース2年研修生にとっては大変得難い経験の機会を得た。研修生は7月8日に多くのことを学んで、元気に帰国した。

■ 2011 3.11 の記録

常日頃から「安全教育」「避難訓練」等 年齢を問わず毎年積み重ねていくこと

鈴木 正広 【2011 年度 外国語コース 教頭】

① 3月11日午後2時46分

当時、NCホールにあった外国語コース執務室にて執務中でした。揺れ始めて1分位経過した頃、周囲の安全確認後、副担任のクラス1G1クラスへ走って行きました。

教室に入ると生徒たち全員、国語の授業担当教諭の引地先生の指示を受け机の下に身を隠していました。揺れ始めて3分程経過し、少しおさまりつつあるので、全員に中庭に移動するように声をかけ移動させました。

大津波警報が出たので今度はウェスト3階に生徒達の移動を確認し、生徒の安否確認のサポートをしていました。

その日は学校へ泊まり、軽食、飲み物等を配布しながら校舎内の生徒への声がけを続けていました。

② 3月12日午前

生徒をシャトルバスにて帰宅させることになり、該当コース（多賀城、塩釜、七ヶ浜方面）の説明会と生徒の確認作業を行い、終了後シャトルバスの添

乗をしました。

生徒達は、多賀城、塩釜地区を廻りながら送り届け、最後に七ヶ浜町内で全員の送り届けを確認し、私は七ヶ浜町内の自宅に帰りました。次の日から2週間程、徒歩で約6kmの学校まで通勤しました。

③ 反省点及び提案

未曾有の震災にあたり、学校全体としては反省点を挙げるより、及第点を挙げられるのではと考えています。何より多賀城校舎が丈夫でガラス1枚破れず、生徒への落下物ひとつも無かったことに驚きました。

また、生徒達が思いのほか落ち着いており、教職員の指示にも素直に従っていた。このことは、小学校、中学校、あるいは保育所や幼稚園段階からの長い「避難訓練」が身につけていることにより、体が自然に反応していたと考えられます。

常日頃からの「安全教育」「避難訓練」等、年齢を問わず毎年積み重ねていくことが大事ではと思われます。

■ 2011 3.11 の記録

近くの石油基地から火の手が上がり
時に爆音を響かせながら一晩中…

鈴木 信男 【2011年度 英進進学コース 教頭】

3月11日午後2時46分、宮城県沖を震源とするM9.0という東日本大震災が発生しました。多賀城校舎では、卒業した3学年、秀光の6学年を除く1、2年が授業をしていました。最初は小さな揺れ、そのうち収まるだろうと誰も思った矢先、突然経験したこともないような大きな揺れが起こり、それがしばらくの間続きました。生徒は机の下にもぐりましたが、机の脚をしっかりと握っていても転がりそうな激しさで、一瞬建物が倒壊するのではないかと恐怖を覚えるほどでした。ようやく揺れがひとまず収まったところで、全員中庭に集合させ様子を見ることにしましたが、かなり大きな余震が続いていました。雪が舞う寒さの中、ラジオから突然「仙台湾に10mの津波」という音声が響いてきました。余震による建物被害を心配して中庭に避難させたものの、津波の心配によって今度は生徒全員をウエストウイング3階に避難させることにしました。

夕闇が迫り、生徒を帰宅させたくとも交通機関はマヒ、通信手段も不通で家庭との連絡はとれない、そのうち津波で学校付近の田んぼ、道路が冠水し始めました。いよいよ生徒の帰宅をあきらめざるを得ない状況となり、そのための対策を検討し始めました。校長先生の陣頭指揮の下、発電機による最小限の照明の確保、水や食料（菓子類）、毛布などの配布、十分とは言えないまでもできるだけのことをしました。幸い、ウエストウイング1階のトイレは、このような時のため井戸水使用の設備が整っていたため、何とかここだけトイレを確保することができました。

寒くて長い夜がこうして始まりました。沿岸部の悲惨な情報が次々と伝わると、職員・生徒の中に暗

澹たる気分が伝わっていきました。近くの石油基地から火の手が上がり、時に爆音を響かせながら一晩中燃えていた火災も恐怖をあおりました。生徒は、不平不満を言うこともなく不自由をしのぎ、恐らく一睡もしないで朝を迎えました。共に一夜を過ごした生徒は、秀光を含めて500名を超えました。

翌朝、シャトルバスによる生徒の輸送計画を立て、何とか生徒を送りだしたときにはひとまずほっとした気持ちとともに、どっと疲労感に襲われたのは私一人だけではなかったと思います。しかし、シャトルバスを送りだしたものの、家までたどり着けず戻ってきた生徒は5、60名に上り、寮での避難生活は3月15日まで続きました。

3.11を挟んで、宮城県の風景が一変してしまいました。実はこれからの復興への道のりが大変だったのです。

4月15日に高校の3年、秀光の5、6年の授業が、続いて2年、1年の順で授業が再開されました。その間、安否確認を行い、生徒全員の無事が確認されました。しかし、卒業生、保護者、職員の家族が犠牲になり、また同窓会長も帰らぬ人となってしまったことはとても残念なことです。

本校には、この度の被災に対し韓国のスポーツ用品メーカーはじめ、各方面から義捐金や援助物資が寄せられています。心から感謝すると共に、仙台育英がこれまで多方面にわたって活躍し、貢献してきたことの証であると思います。今こそ「逆転の仙台育英」のモットーどおり、不屈の精神で復興を成し遂げ、今まで以上の学校にしていきたいと職員一同心から願っています。

「10メートルの津波が来る」には、何か単位の間違いだらうと…

遠藤 敬治 【2011年度 T-フレックスコース 教頭】

3月11日（金）2時46分 T-フレックスは欠時超過、欠点保有者、成績不振者の補習、補講を2K3教室（イーストウイング3階）で行っていた。他の生徒は授業が終わっており、学校に残っているのは、補習、補講を受ける生徒と、部活動の生徒たちである。

補習、補講で残っていたのは、20名弱、各々自分のやるべき小論文や教科の課題に取り組んでいた。地震発生、前後のドアを開けさせ、すぐに机の下に避難を促した。皆即座に対応したが、あまりの強い揺れに皆動揺し、机の脚を強く握っている。地震はおさまる気配もなく、さらに強さを増し、生徒が入っていない机がバタバタと倒れ、机の中のものが教室一面に散乱する。一人の生徒が耐えきれず廊下に出て、家に電話をかける。戻るように声をかけながら、更に待つこと数分。

やっと揺れがおさまり、校庭には1階の生徒たちが出てきたの見える。急いで近くの階段から校庭に避難させ、2列になって腰を下ろさせ、指示を待った。

外の階段や、校舎と校舎のつなぎ部分など、亀裂があちこちに見られる。

ほどなく、ラジオと拡声器を持った先生が、「10メートルの津波が来る」と告げた。何か単位の間違いだらうとすぐには信じることができず、それでも、ウエストウイング3階に全員、上がれという指示に即座に従う。

家の心配をして泣き出す女生徒もいたが、ゆっくりとしたペースで生徒たちがウエストウイングの校舎に入っていく。皆、地震の大きさに圧倒されていたが、取り乱すことなく教師の指示に従い移動していた。

3階の廊下は生徒でごった返していて、それでもはじめに上っていた教師から指示があったのか、自然と集まったのか、各教室にコースごと生徒が集まっていた。各担任も自分のクラスの生徒が集まっている場所に向かう。

すぐに生徒の点呼が行われ、担任が、学校に残っている生徒、帰った生徒の人数を把握する。部活動をしていた生徒は、部活動のままの格好であり、寒そうな生徒もいた。その後、生徒の下校手段についての調査が行われ、帰宅可能な生徒、シャトルバス

利用生徒、保護者が迎えに来るという生徒に分かれ、各担任および各コースの教師が人数把握を行った。その後、帰れない生徒のためにシャトルバスが各方面に運行されるということで、その振り分けがなされたが、結果的にシャトルバスは出られなかった。

学校近隣の生徒、保護者が迎えに来た生徒は帰し、その後、津波が来たことで途中、引き返してきた生徒と残留生徒は、男子は大会議室、女子は学習室に集めた。また、人数把握が行われ、今晚はここで過ごさなければならぬことを伝えた。お菓子、飲み物が一つずつ配られ、毛布は2人で1枚が配られた。使用できるトイレの場所を伝え、大会議室、学習室、執務室を予備電源を使ったライトが照らす。

夜は、騒ぐ音もなく、たんと過ぎた。ときおり、教師が大会議室、学習室を見回ったが、特に具合を悪くする生徒も出なかったと記憶している。それ以外の時間は、執務室のそれぞれの机で寒い夜を過ごした。

地震発生時から、校庭への避難、ウエストウイング3階に移動、人員点呼、必要物資の供給など、避難訓練の成果があらわれたと感じられた。

騒いだり、わけの分からないことをいうような生徒も出ず、教師の指示に即座に従っていた。

保護者が迎えに来たときに、生徒がどこにいるか分からず、探す場面も何度かあった。担任が把握していても、ほかの先生では詳しいことが分からなかった。どの部屋にだれがいるかが一目で分かるような簡易的な名簿を書いて貼っておくとよかったとも思われる。

今回、電気が止まってしまい、かなり寒い思いをした生徒がいた。家が近いのでいったんは歩いて帰ろうとした生徒が、途中で水につかり、学校に戻ってきていた。学校においてあったジャージなどに着替えていたが、かなり寒かったろうと思われる。冬季は、カイロも常備しておくの良いのではないかと思う。

毛布や、少量ではあるが食料、飲み物、予備電源の明かりなど、即座な対応がなされ、生徒たちも危機的な状況の中ではあるが、安心感を得られたと思われる。

■ 2011 3.11 の記録

何事も時が経つにつれて風化していくが 風化させないことも大事

瀬戸 信男 【2011年度 英進進学コースⅡ類 教頭】

1 「どのような事態が生じ、どう対処したか」

これは仙台育英学園報第10号に掲載された鈴木信男教頭先生の『3.11 そのとき多賀城校舎では』に掲載されています。

2 「対処・行動に対する反省点」

我々教頭を含む教職員全員が取った行動は、生徒の誘導・点呼、建物の被害確認等であった。この行動はその時点でベストだったと思っています。その後は、加藤雄彦校長先生の陣頭指揮で対処した。

*情報の収集が出来なかったこと（その時点では無理であったが）

3 「対処・行動をより有効にするための提案」

学校・組織として心がけておかなければならないことは当たり前のことですが、日ごろの訓練が一番大事である。何事も時が経つにつれて風化していくが、風化させないことも大事である。

*加藤雄彦校長先生が自ら発電機を用意して執務室周辺を照らしていただいたことは、暗闇の中での希望を灯す照明であった。また、ウエストウィング1階のトイレが非常時に使用できるようにしてあったことは、校長先生の「先見の明」であり「備えあれば憂いなし」を実践するものでありました。

*災害の備え。食糧・水(1,000名3日分)・発電機(出来れば数台)・暖房器具25個(石油ストーブ・オイルヒーター等)・毛布・暖房着等。夏の場合も想定してバスタオル・タオルケット等。

*情報収集(TV・ラジオ等から)と通信手段の確保が重要。

4 「生徒の生命(安全・安心)を守るための留意点」

反省点

徒歩・自転車通学生徒を帰宅させたこと。

生徒は家に帰ることも、学校に戻ることも出来ず近くの避難所に避難していたり、友達の家に避難していたために保護者との連絡が途絶えたことによって、生徒の安否が確認出来ない保護者は学校を非難した。(通信手段が断絶していたことによる)

被害の発生時間帯によって異なるが、生徒が学校にいる場合は全員学校に留めることが重要である。

「私的なこと」

教職員は自宅・家族の安否等が心配だと思うが、勤務中に被害が発生した場合は、生徒の避難誘導等を最優先にして、そのまま学校に留まること。

特に海岸沿いに自宅がある場合、絶対に戻らないこと。

私自身、生徒の誘導・津波警報による校舎への避難・被害確認等が終わった後、自宅が心配になり車に乗りエンジンをかけたが自問して、学校に戻った。もし、あのまま自宅の蒲生に戻っていたら、今の私はこの世に存在していなかった。

約300世帯ある私の町内会では72名の方が亡くなっていますが、その1/3は自宅に戻って亡くなっています。

教訓

津波警報が発令されたならば直ちに指定避難所や高台等に避難すること。

信号機の消えた大渋滞のなかで いつ到着できるかもわからず

澤田 敏明 【2011 年度 高校・秀光中等教育学校入試部担当 教頭】

3月11日（金）は平成23年度第一次入試が終り、合格者ガイダンスも無事に終了し予想していたとおりの入学者を見込める状況に一安心し、二次入試に向けての準備に入っていた。外国語コース入学者確保のための紹介用パンフレット確認作業を午前中多賀城校舎にて行う。昼過ぎに終了し、宮城野校舎に帰校する。入試部に戻ると他のスタッフは入学手続きのことや寮関係のことで電話対応に追われ、慌しく業務を遂行していた。

14時46分、校内放送で非常連絡が流れ、揺れの大きな地震が発生することを知らされる。今までに体験したことのない揺れに体が硬直するも、ストーブの消火を指示し、避難通路の確保に当たった。全員机下に身を潜め、落下物から身を守ることに努め、揺れが収まるのを待った。揺れが収まったのを確認しグラウンドに避難を開始したが、栄光校舎と南冥校舎の接続部分が大きく引き剥がされ、壁のいたるところが崩落し、事の重大さを実感した。なおも余震が続き校舎が崩壊するのではと、恐怖と寒さで体の震えが止まらなかった。生徒諸君も先生方の誘導、指示のもと、整然とグラウンドに集合し整列点呼確認を行い、一人の怪我人もなく無事避難出来た。たびたび襲ってくる余震により防球ネットの支柱が大きく揺らぐ。生徒たちをグラウンド中央に集め、二次被害対策に努める。

雪が舞い日没が近づき、気温も0度近くまで下がり着の身着のままの状態でも避難した生徒の体調不良や帰宅困難な状況を考慮し、帰宅を早めた。後日保護者から連絡が取れない状態でも何故帰宅させたのか？ 学校に待機させても良かったのでは？ といった声が聞かれたが、宮城野校舎の被害状況及び交通網の麻痺等を考えた場合、妥当な判断だったのではなかったのだろうか。携帯ラジオを聴いていた先生が「仙台港に10mの津波が押し寄せている」と発した言葉に耳を疑い沿岸部で起きている事態に皆目検討がつかず、信号機の消えた大渋滞のなかでいつ到着できるかわからない道をひた走り家路を急いだ。途中、携帯電話のワンセグニュース映像を見て、あまりの悲惨さに言葉を失い、今後日本は、東北地方はどうなるのだろうと底知れぬ恐怖が脳裏を過ぎった。

“生徒の安全・安心の確保について” 備えよ常に！

- 1) 帰宅困難者に対する宿泊場所の確保
- 2) 暖をとるために毛布の備蓄
- 3) 非常食の備蓄・確保
- 4) 飲料水の備蓄・確保
- 5) 懐中電灯の備蓄・確保
- 6) 携帯ラジオの備蓄・確保
- 7) 乾電池の備蓄・確保（単1, 2, 3）

■ 2011 3.11 の記録

「生きてますよ」... あの時の両親の顔 は忘れることができません

佐藤 正行 【2011 年度 生活向上本部長 教頭】

【生徒の状況について】

- ・ 立っていることすら出来ない状況で、ただただ床にしゃがみながら地震のおさまるのを待っていた
- ・ 地震がおさまり南区中庭に生徒は避難した
- ・ 秀光中等教育学校・高等学校で700名ぐらいの生徒が避難
- ・ 携帯電話回線がストップし、生徒自身保護者との連絡はまったくとれなくなっていた
- ・ 帰宅できない不安と、保護者との連絡が取れないことがストレスとなりパニック状態になる生徒もいた
- ・ 帰宅困難になった生徒が700名学校に泊まることになる
- ・ 何の情報も得ることも出来ず一夜を過ごすことになる
- ・ 家族の安否確認と生徒の生存がお互いの心を安堵させるはずだが閉ざされている
その為にいち早い情報伝達が必要となる

【学校の対応について】

- ・ 机の下に潜らせる余裕もなく、地震がおさまるまで教室で自分の身を守らせること、窓側に近寄らないことなどの指示
- ・ 多賀城校舎は教室の破損もなく直ぐに移動を開始せずに済み、一人のけが人もなかった
- ・ 各教室へ戻り、徒歩または自転車で下校できる生徒については帰宅させたが、道路が寸断されている場合は無理をせずに学校へ戻るよう指示
- ・ 生徒はウエストウイング2階教室に避難場所として準備（職員室に近い教室）
イーストウイング2階東窓から休耕田を見ると湖になっていたの、3階への誘導も考えなければいけない状況になっていた

- ・ 秀光の生徒もサウスウイングよりウエストウイングへ移動
- ・ 各教室ごとの名簿を作成し生徒把握に努める
- ・ 宿泊教室の準備と食料
- ・ 毛布の確保
- ・ 日が暮れ真っ暗な中に生徒はいなければいけないので、生徒達の心のケアに努める
- ・ トイレはウエストウイング1階西側が使える状態（自家発電照明も準備）
- ・ 周辺環境の実態把握が困難であったが情報収集を行った

【保護者との連携について】

- ・ 保護者へ生徒の無事を知らせる手段は報道関係にお願いするしかない
- ・ 帰宅先が確認され、保護者と連絡が取れた生徒のみを帰宅させる
- ・ 家族の安否確認と生徒の生存がお互いの心を安堵させるはずだが閉ざされている
その為にいち早い情報伝達が必要となる

【国際交学館にて】

数日間連絡が取れず、何とかガソリンが手に入ったので学校まで来ました。
「うちの子供は、生きてますか」
— この言葉は私の脳裏から離れません。
「生きてますよ」
— あの時の両親の顔は忘れることが出来ません。

あまりにも壮絶すぎる、戦場のような真ただ中からようやく学校にたどり着いた両親の姿でした。

2012年(平成24年)1月23日 宮城野校舎地鎮祭 生徒会長挨拶

私が初めて多賀城校舎を見たとき、建物の堂々としてきらびやかな雰囲気、に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えています。震災を乗り越えた今もその風貌は変わることなく、いつも温かく私たちの成長を見守ってくれているようにさえ感じるほどです。震災が起きたとき、かつてない揺れに恐怖感はありませんでしたが、校舎にいるというだけで安心感がありました。

それから授業が再開するまで、学校へ通えない日が数日間続きました。これまで当然のように思っていた「学校へ通う」ということが出来なくなり、そのとき改めて学校というものがいかに大切か気付くことが出来ました。

人それぞれに学校の意義は異なると思いますが、私にとって学校とは人との出会いの場であり、私たちが成長するうえで欠かせない場所であると思います。学校へ行けない数日間の間、いつも友達の事や学校に通っていたら今頃どんなことをしていただろうか、などということばかり考えていました。

学校が始まり、震災前と変わらず友達や先生がいてくれること、日々通える場所が存在し自分の居場所があるということが、これまでの間どれだけの自分の糧となっていたか、改めて感じました。

人々の記憶に、さまざまな形で、心に、刻み込まれた3月11日。東日本大震災は、たくさんの人の命を奪い、私たちにとって大切な多くのものを壊し、心に大きな傷あとを残していきました。

思い起こせば、高校1年の大半を過ごした、旧宮城野校舎。春には、校門のところにあった桜の木が満開に花を咲かせ、風で花びらが散ると、あたり一面、桜の絨毯を敷き詰めてくれました。まだ真新しい制服に身を包みながら、きれいだなあと思ったことを今でも思い出します。

夏には、昭和に建てられた古い校舎ではありましたが、冷房が完備され、汗をかくことなく、勉強できたあの時期。

秋には、育英祭の準備で忙しくなり、仲間とともに作業をしていたあの時。

冬には、学習室や図書館は、受験をひかえた、先輩たちが張り詰めた空気の中、その雰囲気を感しつつ、隣で勉強できてとてもいい刺激になったあの頃。

私たち在校生はもちろん、同窓会のみなさんにもたくさんの思い出を残してくれた宮城野校舎は、大切な、大切なかけがえのないものです。今でも、私たちの胸の中では変わることはありません。

旧宮城野校舎は残念ながら、今回の震災で建て直すことになりました。

その間、旧宮城野校舎で学んでいた生徒たちは多賀城校舎に移動し、両校舎それぞれで学んでいた生徒がともに過ごすことになりました。互いに突然の環境の変化にとっても不安に感じたことと思います。しかし、復興という目標に向かって全員が一つとなり、切磋琢磨し合い、前進しているように思います。

東日本大震災を体験したことにより、私たちは多くのものを失いましたが、同時に今まで忘れてしまっていた本当に大切なことに気付くことが出来たのではないかと思います。そして、このような体験をした私たちだからこそ、世界中の人々へメッセージを伝えることが出来るはずです。

新しく建設される宮城野校舎は、世界と世界をつなぐ架け橋となるようなグローバルな教育を行う拠点となるでしょう。また、復興の象徴として、建物を見上げる人々に力を与える、そんな校舎になるだろうと確信しています。

秀光中等教育学校 生徒会長

星 晴子

震災によって校舎が壊れたときは、そんなにも巨大な地震だったのかと驚きましたが、新しい校舎ができると聞き、本当にうれしく思いました。復興が滞っている地域もある中、幸いにも、この学園は、たくさんの方々を支えられ、多賀城校舎では通常通り授業を再開することができています。私たちを支えてくださった多くの皆様に感謝したいです。本当にありがとうございました。

私たち在校生一同は、あの震災を乗り越え、東北の復興の力になれるよう学業に励み、新たな歴史と伝統を築いていく決意を新たにしています。そして、これからの私の後輩となる生徒のみなさんが、ここでかけがえのない青春時代を新しい校舎と共に、築き上げてほしいと思います。

最後になりましたが、校舎の建設工事の無事と安全を祈念し、生徒会代表の言葉とします。

仙台育英学園高等学校 生徒会長

小野寺 史織



〈第1部〉
東日本大震災からの復興

II

宮城野新校舎での
授業スタート
から

2013/2014

●平成 25 年度

2013/2014 の Key Words

- 4 月 宮城野新校舎開校式
- 8 月 慶長遣欧使節 400 年…書と音楽
- 9 月 広域通信制課程 ILC 沖縄開校認可
- 11 月 復興庁復興副大臣からのご挨拶
- 11 月 駐日キューバ共和国
特命全権大使による講演会

宮城野新校舎 での授業が スタート

3月24日の竣工式に続いて、年度があらたまった4月9日には宮城野校舎開校式及び秀光入学式が宮城野校舎ゼルコバホールで挙行された。また、支倉常長の慶長遣欧使節400年のこの年、本学園とキューバ共和国との絆が再び強まった。翌年の交流の集い、茶道部・獅子太鼓部のハバナ訪問へと繋がっていく。



四月九日宮城野新校舎開校式及び秀光中等教育学校第11回入学式

宮城野新校舎 ゼルコバホールで 新校舎開校式と秀光入学式を挙行

新年度がスタートした4月9日、秀光中等教育学校（この項も以降「秀光」と表記）の2年生から6年生までの200名が参列する中で、宮城野新校舎開校式が、同校舎の『新栄光』内にあるゼルコバホールで挙行された。

開校式に続いて秀光 第11回入学式。鮮やかな座席の朱色が映えるホール内に真新しい制服に身を包んだ新入生31名が姿を見せ、6年生の先輩たちから一人ひとり、胸

にコサージュを付けてもらった。この日の新入生は、秀光中等教育学校の前身である秀光中学校の誕生から数えて18期生となる。

加藤雄彦校長先生は式辞において、この日の開校式および入学式が「新宮城野校舎ゼルコバホールの“使い初め”」であることを紹介。第6学年の先輩たちからコサージュを付けてもらった18期生を見て、「非常に胸が熱くなるのを感じました」と話された。

この日入学式を終えた新1年生に加えて、秀光6年生も5年間学んだ多賀城校舎から宮城野校舎へ。3、4、5

この年もさまざまな 方々・団体が 励ましに



▲ 11月28日、本校宮城野新校舎ゼルコバホールで行われた『サンタ・プロジェクト』（2011年から始まり、この年より復興庁が後援）に谷公一復興副大臣が来校、会場の生徒に向けて、あたたかくも力強い復興に向けてのメッセージをくださった。



▲ 仙台出身・米国ニューヨーク在住のミュージシャン、KI-YO（清貴）さんが前年に引き続き4月11日、多賀城校舎に。



▲ 慶長遣欧使節出帆400年記念・東日本大震災復興祈念としてロドリゴ・ロドリゲス氏（アルゼンチン出身・スペイン在住）による演奏会（11月6日 ゼルコバホール）



▲ 7月5日、『TOMODACHI プロジェクト』の交流生として、多賀城校舎にアメリカから高校生26名が来校、本学園の生徒たちとの交流会が行われた。米国高校生滞在中の4日間は本学園生徒の家でホームステイを体験。互いの交流を深めあった。



▲ 2014年2月5日、前年に多賀城校舎を訪れたオルフェウス管弦楽団（米国）のみなさんが、『セクスイハイム presents 辻井伸行&オルフェウス室内管弦楽団 日本ツアー2014』（東京エレクトロンホール宮城）に秀光オーケストラ部生徒を招待。



5月9日 STAND LIVE MEMORY 2013

7月8日 ゼルコバホール レリーフ除幕式 及び NYSE Joint Concert 2013



年生の一部の授業も宮城野校舎で行われるようになった。

特別進学と英進進学コースⅡ類が 宮城野新校舎で授業をスタート

秀光入学式から4日後の4月13日、多賀城校舎グロリーホールにおいて仙台育英学園高等学校（この項も以降「仙台育英」）の入学式が行われた。この年4月から仙台育英 特別進学コースと英進進学コースⅡ類が宮城野校舎で新年度からの学校生活をスタート。2014年度は特別進学コースと英進進学コースⅡ類、および前年度から引き

続いてM-フレックスコース2、3年が宮城野校舎で学ぶことになる。広域通信制課程「ILC宮城」の新しい執務室も宮城野校舎「北辰」内につくられた。

この年の春から、多賀城校舎「グロリーホール」と並んで、宮城野校舎内の「ゼルコバホール」（収容人数425人）がさまざまな行事の会場として活用されるようになる。6月の秀光および仙台育英の「在卒懇」（在校生と卒業生による大学進学をテーマにした懇談会）はもちろん、5月の駐日ブルガリア共和国特命全権大使による講演（演題は『EUがあなたの学校にやってくる』）や、外務省アジア大

8月20日『慶長遣欧使節 400年...書と音楽』



6月27日 ILC 宮城&青森 沖縄研修



七月
インターハイでヒラム
選手
五千メートル個人優勝

十一月一日駐日キューバ
共和国特命全権大使講演会



2月2日～ 秀光野球部 ハワイ親善訪問

洋局大洋州課総務班長による講話（外務省高校講座『外務省の仕事』）なども。また、第16回目となるニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルとのジョイントコンサートも7月8日、ゼルコパホールを会場に開催され、同日、ステージ奥正面を飾るライオンマーク・レリーフの除幕式も行われた。

慶長遣欧使節出帆 400年、 キューバとのさらなる絆

2013年は、伊達家の家臣、支倉常長が慶長遣欧使節団

として政宗公の親書を携えて月ノ浦から出帆（1613年10月28日）して400年に当たる。キューバ共和国ハバナ市での支倉常長像建立（2001/平成13年）以来、支倉常長の使節団との深い関心と繋がりを持つ本学園は、この年から慶長遣欧使節出帆400年（ならびに東日本大震災復興祈念）を冠とした行事をいくつか行っている。

その第1弾として、8月16日から21日まで「せんだいメディアテーク」を会場に開催された『書禅会創立90周年記念 池田僊雲作品展』の期間中、8月20日に、『慶長遣欧使節400年...書と音楽』の催しが行われた。池田



C-01



C-04



C-02



C-05



C-03



C-06



C-07

- C-01 インドネシア共和国バンドン市
教育訪問団 姉妹校提携式 5月13日
- C-02 駐日ブルガリア共和国特命全権大使がゼルコバ
ホールで講演 5月14日
- C-03 インドネシア共和国姉妹校高校生研修訪問団
修了式 5月21日
- C-04 ニュージーランド共和国国会議長一行が
宮城野校舎を訪問 10月10日
- C-05 フランス姉妹校サンマルタン高等学校サント
ジュヌヴィエヴ校から研修生訪問
10月18～27日
- C-06 インドネシア・ラザルディ G.I.S. との
姉妹校調印 11月12日
- C-07 姉妹校・中国洛陽市東方高級中学校とサッカー
交流試合 8月20、21日

僊雲（本名・友信）氏は本校出身で仙台育英教育振興会理事であり、仙台・キューバ交流協会の会長でもある。当日は“書と音楽”のタイトルにふさわしくキューバ音楽に精通したアントニオ古賀氏による歌・演奏も披露された。

また、11月には宮城野校舎オクルームにおいて、マルコス・F・ロドリゲス・コスタ駐日キューバ共和国特命全権大使による講演会（演題は『今日のキューバ』）も行われた。この記念行事は、翌2014年の『日本・キューバ交流の集い』（7月23日、宮城野校舎ゼルコバホール）、そして茶道部6名と仙台育英獅子太鼓部10名が参加した

日本・キューバ友好議員連盟によるキューバ訪問（10月1～6日）へと繋がっていくことになる。

広域通信制課程の3つめの拠点、ILC 沖縄開設に向けて

2013年度に特記しておきたいこととして、4月23日のILC 沖縄スクーリング会場開所式（沖縄市コザミュージックタウン内）と6月27日のILC 宮城&青森の沖縄研修、7月5日のILC 沖縄開校記念ライブ（コザミュージックタウン内）も挙げておこう。開校は翌2014年4月27日。

2014/2015

●平成 26 年度

2014/2015 の Key Words

- 4月 広域通信制課程 ILC 沖縄開校式
- 4月 山形学習センター開所式
- 6月 茶室「英松庵」披き
- 8月 秀光野球部全中初優勝
- 10月 茶道部・獅子太鼓部、キューバへ
- 11月 硬式野球部神宮大会で優勝
- 2月 国際バカロレア認定校に正式決定

秀光野球部、 高校硬式野球部 共に全国優勝 !!

4月27日、学園旗が飾られた会場にエイサー太鼓が響き渡った。広域通信制課程 ILC 沖縄の開校式。山形市中心部には山形学習センターも開かれた。8月、秀光野球部がついに“全国制覇”の夢実現。11月には仙台育英硬式野球部が神宮大会で優勝。翌2月、国際バカロレアの正式な認定校になった。

四月二十七日平成二六年度
広域通信制課程 ILC 沖縄
開校式および第一回前期入学式



沖縄に本学園の新しい教育拠点、 ILC 沖縄が開校

4月、宮城県から約1,800km離れた沖縄に、本学園の新しい教育拠点が誕生した。ILC 沖縄。仙台育英学園高等学校広域通信制課程「ILC 宮城」(宮城野校舎内)、「ILC 青森」(青森県八戸市 学校法人光星学院 美保野キャンパス内)に続く3つめの“Ikuei Gakuen Learning Center”である。

4月27日、ILC 沖縄 第1回前期入学式が、スクーリング会場がある沖縄市の「コザミュージックタウン」内の

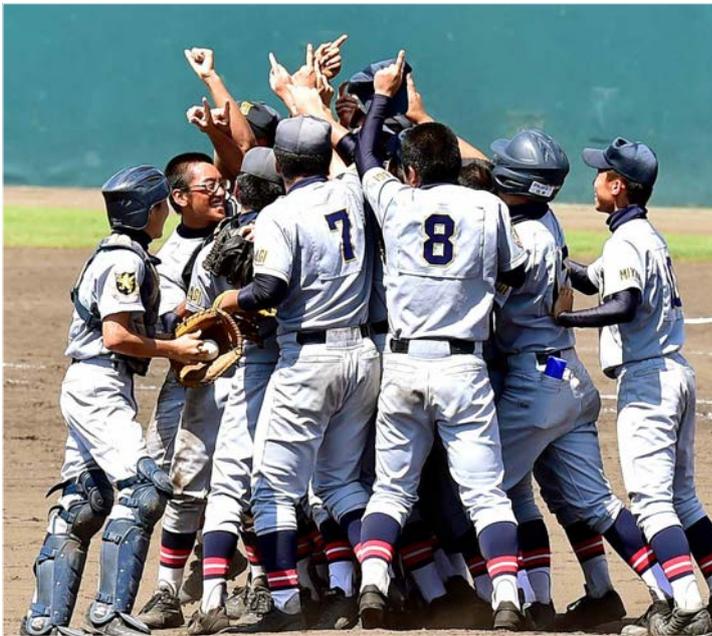
ホールで挙行された。会場には沖縄市長をはじめ、現地教育関係機関等から大勢の方々が駆けつけてくださり、また、沖縄市中の町青年会メンバーによる沖縄の伝統芸能「エイサー」の太鼓の音も会場内に力強く響き渡った。

この日、男子38名、女子34名が第1期生徒として入学し、新しい通信制生徒としてのスタートを切った。

多賀城校舎 NC ホールに新しい茶室 裏千家宗匠を招いて茶室披き

6月、多賀城校舎のお茶室『英松庵』が北辰館2階から

8月20日 秀光野球部 第36回 全国中学校軟式野球大会 で優勝



六月三日 英松庵
お茶室披き並びに
御家元講演会

7月23日 慶長遣欧使節団キューバ共和国 ハバナ寄港 400周年記念行事 『日本・キューバ交流の集い』



10月1～6日 茶道部、仙台育英獅子太鼓部、 キューバ共和国へ

NC ホール1階に移築され、新たに生まれ変わった。これを記念して、6月3日、京都から裏千家第16代家元である坐忘斎千宗室宗匠をはじめ多くのご来賓の方々をお招きして、お茶室披きおよび御家元による講演会（講演会の演題は『私の国際交流』）が行われた。

キューバとの絆にさらなる展開、 交流の集い、そしてキューバ訪問

NC ホールのお茶室披きは『東日本復興事業』の一環として実施されたが、昨年度（平成25年度）実施された『慶

長遣欧使節出帆400年』事業は、この年『慶長遣欧使節団キューバ共和国ハバナ寄港400周年記念行事』と展開し、7月23日には、『慶長遣欧使節団キューバ共和国ハバナ寄港400周年記念』を冠とした『日本・キューバ交流の集い』が、宮城野校舎ゼルコバホールを会場に開催された。

さらに10月、本校獅子太鼓部10名と茶道部6名が日本・キューバ友好議員連盟による『日本・キューバ友好400周年交流事業』でのキューバ訪問への交流団の一員としての参加。同国首都ハバナで開催された記念式典や記念

11月18日 仙台育英 硬式野球部 第45回記念明治神宮野球大会高校の部で優勝



10月「e-ラーニング」スタート



2月17日 東北で唯一の国際バカロレア (IB) 認定校に



2月18、19日 ILC 宮城、青森、沖縄 合同スキー研修 (蔵王)

レセプション等で和太鼓の演奏、およびお茶をふるまい、日本とキューバとの親善のための活動を行った。

秀光野球部、仙台育英硬式野球部、ともに全国大会で栄えある優勝！

この年は、運動部の活躍でも大きな成果を残した。秀光野球部、仙台育英硬式野球部、両部の“全国制覇”である。

2005年（平成17年）に創設された秀光野球部（軟式野球）は、創部6年目の2010年（平成22年）、全国大会（全中）に初出場を果たし、ベスト8に。その後2度

全国大会に出場し、この年2014年、第36回全国中学校軟式野球大会において、ついに全国の頂点に立った。全国大会優勝は、宮城県の中学校では初の快挙である。

仙台育英硬式野球部は、第45回記念明治神宮野球大会高校の部で、一昨年（2012）の初優勝に続いて、2年ぶり2度目の優勝を果たした。

11月18日に行われた決勝では浦和学院高校（埼玉）と対戦し、4対1で勝利。佐藤世那、郡司裕也、平沢大河など、翌年（2015）夏の甲子園大会で同部を準優勝に導く2年生の選手たちが大活躍した。



D-01



D-02



D-03



D-04

震災を乗り越え、復興へ...さまざまなかた方々、国々からの励まし 二〇一四



E-01



E-02



E-03



E-04

国際バカロレア ディプロマ プログラム 東北初の認定校に

教育課程の面でも、大きな出来事があった。仙台育英学園高等学校が、スイス・ジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構の審査を通り、2015年2月に国際バカロレアディプロマプログラム (IBDP) の認定校になったことである。これは東北で初。世界の“IB ワールドスクール (IB 認定校)” に仲間入りした。2015年4月からは本格的なプログラムがスタートすることになる。

D-01 ニュージーランド姉妹校クライストチャーチ

男子高等学校訪問団来校 4月20～23日

D-02 駐仙台大韓民国総領事館 梁桂和副総領事による特別講演会 7月18日

D-03 韓国からの短期語学研修生 修了式 7月24日

D-04 中国長春市民訪問団 来校 9月16日

E-01 『千年希望の丘植樹祭 2014』(宮城県岩沼市主催)に本校生徒がボランティア参加 5月31日

E-02 あしながインターシップ『東北プログラム』インターン生によるワークショップ(宮城野校舎) 8月11 & 20日

E-03 多賀城校舎での東日本大震災復興支援イベント『ぼくらのワールドカップ in 多賀城』に参加 11月3日

E-04 陸上競技部・チャリディング部が『ホノルルマラソン 2014』に参加(ハワイ・ホノルル) 12月12～17日

2015/2016

●平成 27 年度

2015/2016 の Key Words

- 4月 秀光 開校 20 年目に
- 4月 秀光 全学年が宮城野新校舎に
- 4月 国際バカロレアディプロマプログラムスタート
- 8月 硬式野球部 夏の甲子園で準優勝
- 8月 秀光野球部 全中準優勝
- 10月 学園創立 110 周年記念式典

学園創立 110 周年式典を 盛大に開催 !!

秀光が開校 20 年目を迎えた 4 月、秀光生徒全員が宮城野校舎での授業をスタートさせた。認定校となった国際バカロレアのディプロマプログラムがスタート。そして 8 月、仙台育英硬式野球部が夏の甲子園で全国準優勝、続く秀光野球部も全国準優勝に輝いた。10 月 1 日、学園創立 110 周年記念式典挙行。

四月七日 秀光中等教育学校
第十三回入学式



五月十六日 仙台フィル
ハーモニー管弦楽団との
ジョイントコンサート

秀光中等教育学校生徒全員が 宮城野の新しい校舎に移転

4 月 7 日、宮城野校舎ゼルコバホールにおいて秀光中等教育学校の第 13 回入学式が挙行された。新入生 46 名は、前身である秀光中学校から数えて 20 期生となる。あわせて、この 4 月からは前年度まで多賀城校舎で学んでいた秀光生徒全学年が宮城野校舎へと移転した。

4 月 7 日の入学式の式辞において、加藤雄彦校長先生は、1956 年（昭和 31 年）に戦後の教育改革や激変する社会

状況によってやむなく閉校となった『仙台育英中学校』について触れ、そのことを踏まえて「今春、秀光は多賀城校舎から宮城野校舎に移ってきましたが、これは“移転”というよりも“復活”したのだと考えています」と話された。多賀城校舎から完全移転して、新入生を含めた 212 名の秀光生徒が、宮城野校舎で新しいスタートを切った。

国際バカロレアのプログラム (IBDP) 本格的にスタート

2015 年春は、秀光の宮城野校舎完全移転に加えて、も



四月 国際バカロレア
ディプロマプログラム
(IBDP) スタート

五月二三日～五日
スウェーデン・剣道ナショナル
チームとの合宿・交流試合



四月二八日 駐日ミクロネシア
連邦大使講演会



六月二日 ウガンダ
共和国学生との交流

五月二〇～三〇日
キューバ共和国 キューバ
国立芸術学校の学生来日



九月一二日 本校吹奏楽部
東北大会に出場

うひとつの“新しいこと”がスタートした。同年2月に東北で初の認定校となった『国際バカロレア ディプロマ プログラム (IBDP)』の本格スタートである。

『国際バカロレア』とは、文部科学省のホームページによれば—

国際バカロレア機構(本部ジュネーブ)が提供する国際的な教育プログラム。国際バカロレア (IB: International Baccalaureate) は、1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせる

とともに、国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置。現在、認定校に対する共通カリキュラムの作成や、世界共通の国際バカロレア試験、国際バカロレア資格の授与等を実施。

という内容の教育プログラム。“Global Education” “Globalistの育成”を柱として国際理解教育に積極的に取り組んできた本学園にとっては、まさに最適な教育プログラムといえよう。このプログラムが、多賀城校舎の外国語コースを拠点に4月からスタートした。(詳細は、第2部 P.100,101を参照)



八月二〇日硬式野球部
第九七回全国高校野球
選手権大会で準優勝！

八月二二日秀光野球部
第三七回全国中学校軟式
野球大会で準優勝



仙台育英硬式野球部、秀光野球部、ダブルでの全国準優勝！！

まもなく学園創立110周年を迎えようとする2015年8月、本学園は“暑い夏”に熱狂の日々を過ごした。仙台育英学園高等学校硬式野球部の第97回全国高校野球選手権大会（8月6日～20日）での準優勝、そして秀光中等教育学校野球部の第37回全国中学校軟式野球大会（8月19～22日）での同じく準優勝である。

“夏の甲子園”は、高校野球100年の記念すべき年にお

いて仙台育英硬式野球部26年ぶり2回目の準優勝。秀光は前年、2014年の第36回大会で宮城県の中学校では初となる“全国大会優勝”を果たしたが、この年2015年は準優勝となった。

大会後、仙台育英硬式野球部は多賀城市から同市として第1号となる『栄誉の盾』が贈呈された。また、10月22日のプロ野球ドラフト会議では活躍した平沢大河くんが東北楽天ゴールデンイーグルスと千葉ロッテマリーンズから1位指名をされ、ロッテへ。佐藤世那くんがオリックス・バッファローズへ。2人はともに“プロ選手”の世



11月10日 学園創立110周年記念祝賀会

11月22日 硬式野球部
平沢大河くん、佐藤世那くん
ドラフト会議で指名



11月17日、23日
フランス・レンヌの姉妹校
から研修生来校

界でのさらなる飛躍に向けて大きな一歩を踏み出した。

110周年式典は Global Education にふさわしい国際的なものに

10月1日、本学園は記念すべき創立110周年を迎えた。この日、勝山館（仙台市青葉区上杉）を会場に創立110周年式典が行われた。

式典のスタートは、『国際人育成のための提言 ～ILHAの実践を通して～』と題されたILHA (I-Lion Hawaii School) 校長、アール大川先生による記念講演。続く感

謝状贈呈式では、加藤雄彦理事長・校長先生が、日頃本学園を支援してくださっている企業一社一社に感謝状を手渡した。続いて記念祝賀会。マルコス・F・ロドリゲス・コスタ駐日キューバ共和国特命全権大使、梁桂和駐仙台大韓民国総領事ほか、学園に関わりの深い企業の方々や学園教職員が一堂に会し、アントニオ古賀氏とご子息による演奏会、韓国舞踊と農楽演奏、キューバ音楽サルサの演奏などがアトラクションとして催され、“Global Education”を教育テーマに掲げる仙台育英学園の110周年の祝賀にふさわしい国際性豊かな式典となった。

2016

●平成 28 年度

2016のKey Words

- 4月 グローバルルーム完成
- 4月 秀光 MYP トライアルスタート
- 4月 ILC 青森校舎 完成
- 5月 仙台育英孔子課堂銘板除幕式
- 9月 山形学習センター竣工

大学入試改革に向けて、秀光 MYP_{トライアル}スタート

4月から秀光において、昨年春から本格スタートした仙台育英でのIBDPの前段階であるMYPトライアルがスタート。学園の国際バカロレアへの取り組みの密度がさらに増す。宮城野・多賀城校舎図書室、NCホールに生徒が自由に使えるパソコンを配置。ICT教育環境の整備も進む。

グローバルルーム多賀城校舎
NCホール二階に完成



多賀城校舎に硬式野球部の
H&Sトレーニングルーム



宮城野校舎・多賀城校舎の
図書室にパソコンを配置

IBDPの前段階にあたるMYPの トライアルが秀光でスタート

4月から、秀光中等教育学校においてMYPのトライアルがスタートした。MYPとはMiddle Years Programmeの略。昨年度からスタートしたIB（国際バカロレア）ディプロマプログラム（16～19歳対象）の前段階に位置するもので11～16歳を対象とし、“国際的な視野を持つ能動的な探究者を育成する”ことを目的としたもの。高校でのIBDPへと繋がっていくことになる。

IBDPについてはプログラムが実施される外国語コースがある多賀城校舎に『IBルーム』『スタディールーム』『コモンスペース』からなる『グローバルルーム』が完成。同じく4月からプログラムに沿った授業が展開されている。

ソフト面にとどまらずハード面においても学園創立125年に向けての教育環境整備が進む。ICT教育の面では情報教室（WIN教室）はもちろん、宮城野・多賀城両キャンパスの図書室、そして多賀城校舎NCホールにパソコンを配置。生徒がより主体的に情報にアクセスできる環境が整備された。

5月12日 仙台育英孔子課堂銘板除幕式



秀光MYPTライアルの一環のロボティクス



九月四日 山形学習センター竣工式



四月二三日 ILC青森校舎竣工及び入学式



七月九日アイ・ライオンフックシヨップ職場見学「護衛艦こんごう」



8月2日 山形文化教育研修会

九月二日 職員研修「学園のリスクマネジメント」



講演「教育機関のリスクマネジメント」 震災から5年半を経た9月12日に

宮城野校舎、多賀城校舎内だけでなく広域通信制課程の授業が行われている青森、沖縄でも“学び舎”の整備が進む。4月には青森県八戸市湊高台地区に新校舎『ILC 青森校舎』が完成。ILC 沖縄においても、沖縄市高原に ILC 沖縄校の建設を予定している。山形学習センターについても同市旅籠町に新しい建物がつくられた。

中国語教育の推進と文化交流の拠点として、中国政府が

海外に開設する『孔子課堂』が東北で初めて本校に設置され、5月12日に関係各位が見守る中で本校とパートナー提携校となる中国北京航空航天大学実験学校と協定書に調印、贈られた孔子課堂の銘板が披露された。

9月12日には、本記念誌のために『教育機関のリスクマネジメント』の表題による論文を寄稿して下さった慶應義塾大学大学院経営管理研究科の大林厚臣教授が来校。職員研修として宮城野校舎ゼルコバホールにおいて講演を行って下さった。そして10月1日、仙台育英学園は創立111周年を迎えた。

2017 Hot News

IBDP 第1期生から 3人の国際バカロレア 資格取得者が誕生!!

日本初導入の
デュアルランゲージ・プログラムで
3名がIB資格を取得しました!

本校は、2015年2月に国際バカロレア ディプロマ プログラム (IBDP) の認定校となり、世界のIB ワールドスクール (IB 認定校) に仲間入りしました。その年 (2015年) の4月から外国語コースでIBDP (2、3学年の2年間) がスタート。当時2学年の希望生徒がIB クラスに所属して学んできました。

本校は英語だけでなく日本語も活用した“デュアルランゲージ・プログラム”でのDP (ディプロマ プログラム) を導入しています。これは日本初のこと。そのデュアルランゲージ・プログラムで難関である卒業試験に挑戦し、3人がIB資格を取得しました。

**3 students received
the IB Diploma at one
of the first schools in Japan
to implement
the Dual Language Program.**

In February 2015, Sendai Ikuei Gakuen received official authorization as an International Baccalaureate Diploma Program (IBDP) school; joining the prestigious IB World School family. From April that year (2015) the IBDP was implemented in the Foreign Language Course (2nd and 3rd year of high school). At the time, aspiring 2nd year students began their IB classes.

Sendai Ikuei Gakuen implemented the Diploma Program Dual Language program, utilizing both English and Japanese. One of only 2 schools in Japan to do so.

3 students passed the rigorous external exams, and received their IB Diploma.

* 本学園ホームページ掲載 (2017.1.20 up) トピックスより



▲ IB資格を取得した3人。左から、柳 佳琪さん (上智大学法学部と法政大学文学部に合格)、笹森 絵子さん (お茶の水女子大学文学教育部に合格)、鈴木 純麗さん (立教大学異文化コミュニケーション学部) に合格)。

海外大学入学資格「バカロレア」合格

全国初の日本語履修でディプロマを取得した (左から) 鈴木さん、柳さん、笹森さん

**高校課程のプログラム
一部日本語で履修 全国初**

東北唯一のIB認定校の国際バカロレア資格 (IBDP) が提供される教育プログラム。16年12月現在の約100名のIBDP履修生が、467校が指す。高校課程のプログラムは、英語や日本語を併用して履修する。世界の主要な大学や資格機関が定める国際教育法に規定された国内の認定校

IBDPは、米、英、仏、独、中、日、西の7つの言語で履修できる。国内でも導入している大学が増えている。英語やフランス語などで履修するが、文部科学省は、グローバル人材育成の観点から取得を推奨。2015年以降は、科学や芸術科目など、日本語履修も可能になった。

東北唯一のIB認定校の国際バカロレア資格 (IBDP) が提供される教育プログラム。16年12月現在の約100名のIBDP履修生が、467校が指す。高校課程のプログラムは、英語や日本語を併用して履修する。世界の主要な大学や資格機関が定める国際教育法に規定された国内の認定校

仙台育英高では、沖縄尚学とともに全国に先駆けてこの制度を採用。外国語コースの希望者が、知識だけでなく、論理的思考や討論力を養う探求型の授業を受けてきた。昨年11月に世界共通の試験があり、今月初めに、鈴木純麗さん (18)、柳佳琪さん (18)、笹森絵子さん (19) の3人に合格通知が届いた。

鈴木さんは「課題が多く苦しかったが、達成感を得られた。将来は国際的な仕事に関わりたい」と笑顔を寄せた。

3人は既に大学進学が決まっており、中国出身の柳さんは「国際的に活躍できる記憶」、笹森さんは「東南アジアの歴史研究者を目指す」と将来の夢を語る。

指導した石田真理子教諭は「大学院にも指す高難度な授業が求められた。学校側も手探りだったが、生徒と先生で結果を出せた」と採挙を喜んだ。

▲ 平成 29 年 (2017 年) 1 月 22 日 (日曜日) 河北新報 朝刊より

特別寄稿

教育機関の リスクマネジメント

慶應義塾大学大学院経営管理研究科
教授 大林 厚臣

「教育機関のリスクマネジメント」寄稿にあたって

慶應義塾大学大学院経営管理研究科
教授 大林 厚臣

仙台育英学園の創立 111 周年おめでとうございます。縁ありまして記念の年に、学園からリスクマネジメントの研究を委託されました。その研究成果の初版となるものが、今回寄稿する論文です。学園からは調査への協力と資料や資金の支援を頂きました。事例も学園のものを引いているので、題名は「仙台育英学園のリスクマネジメント」としても良いくらいです。しかし仙台育英学園のリスクマネジメントは、一校だけでなく教育機関一般に共有されるべきものと考え、より広い題名の「教育機関のリスクマネジメント」にしました。全国の教育機関はかなり共通したリスクを抱えていますが、一校でできる対策と経験には限界があります。そのなかで仙台育英学園が、東日本大震災での被災と復興、そしてリスクマネジメントの体制について、研究し発信する意義は大きいと考えます。

論文では、まず一般的なリスクマネジメントの基本とされる考え方を、教育機関の特性にあてはめ、教育機関のリスクマネジメントのモデルを提案します。あわせてモデルの視点から、仙台育英学園の東日本大震災における経験とリスクマネジメントの体制を評価します。仙台育英学園のリスクマネジメントは、リスクマネジメントの基本をおさえ、地震をはじめさまざまなリスクに体系的に対応しようとするものです。体系的な取り組みによるリスクマップを論文で紹介します。筆者の知る限り教育機関が公開した初めてのリスクマップです。また、全職員に協力いただいたアンケートの分析から、企業における調査より、リスクに関する認識の職員間のばらつきが少ないことが分かりました。極端な専門分化をしない教育活動の特徴かもしれませんが、組織的なリスクマネジメントを進めやすいことを期待させる結果です。

仙台育英学園の歴史を学びますと、創立以来たびたびの難局を乗り越えて発展されてきたことが分かります。その中でもっとも厳しい出来事の一つが、東日本大震災であったかと思えます。ただし各国の歴史を見ますと、長く続く文明や組織は、リスクがないから続くのではなく、リスクを乗り越えるから続くようです。仙台育英学園のリスクマネジメントが、創立 200 周年そしてさらに将来への発展につながりますよう。また仙台育英学園をはじめ多くの関係者による知見が共有されることで、教育界全体のリスクマネジメントが発展することを願ってやみません。

教育機関のリスクマネジメント

全国には5万を超える教育機関がある。教育機関の活動は、各校ごとの校風や地域特性の影響を受ける一方で、かなりの共通性があるとも言える。もちろん授業の内容はクラスごとに異なり、課外活動にも各校の特色がある。しかし、就学者の年齢、カリキュラム、施設、組織体制などは、学校間で共通または類似することも事実である。それら共通性のため、発生するリスクにも学校間で共通する部分がある。したがって教育機関の間で、リスクマネジメントに関する情報を共有し参考にするものの効果は大きい。

教育機関の規模は、大企業などに比べると小さい。そのため各校でリスク管理の専門家を雇い、独自のリスクマネジメント体制を整備することは難しい。また、さまざまなリスクの知識や対策を、各校ですべて調査することも難しい。そのため教育機関としてのリスクマネジメントのモデルや、多くの関係者にとって未経験のリスクについては、情報を共有する効果がとくに高いといえる。全国の教育機関と関係者がもつ、リスクマネジメントの経験とノウハウは膨大なものであり、その潜在的価値はきわめて高い。しかし共有しなければノウハウは分散したままで、各教育機関で同じような試行錯誤やトラブルが繰り返されやすい。そのような状況のなかで仙台育英学園が、東日本大震災での被災と復興、そして震災を経てさらに強化したリスクマネジメントの情報を発信していることの意義は大きい。

本論文は、一般的な組織のリスクマネジメントの基本とされる考え方を、教育機関の特性にあてはめたモデルを提案する。あわせてそのモデルの視点から、仙台育英学園の東日本大震災における経験とリスクマネジメントの体制を評価する。

仙台育英学園のリスクマネジメントは、組織経営の基本とされるPDCAサイクル（計画、実行、点検、見直し、を繰り返すこと）を、リスクマネジメントに応用するものである。また、火災など特定のリスクに限定するのではなくあらゆるリスクを対象に、非常時の対応だけでなく普段の備えを含めている。したがって一般的に応用可能なモデルとして、多くの教育機関の参考になるであろう。事例にあげる仙台育英学園の経験と体制は、震災リスクへの対策を多く含んでいる。仙台は周期的に宮城県沖などを震源にする地震に見舞われる地域であり、震災対策は今後も重要であり続ける。しかし仙台に限らず地震列島と呼ばれる日本の国土で、震災のリスクを無視できる地域はないであろう。未曾有の震災を経験した仙台育英学園の取り組みは、一般的なモデルとあわせて、多くの教育関係者の参考になると思われる。

リスクマネジメントの基本形

教育機関のリスクマネジメントを考える前提として、一般的なリスクマネジメントの、考え方、活動、組織体制に関する概念を通観する。ここで挙げる内容だけがリスクマネジメントの要点

ではないが、直感的に想像されるリスクマネジメントの活動や体制に欠けがちな内容を補うであろう。

<考え方>

リスクマネジメントの考え方の基本は、広い意味での費用対効果の最適化である。単にリスク対策の費用と効果にとどまらず、教育活動へのメリットとデメリットなど、特定のリスクの範囲を超えた広さの視点で考える。リスクを最小にする対策だけを追求すると、極論すれば何もしないことになる。教育の使命が、人づくりを通して未来の社会を作ることであるならば、教育機関は必ずしも活動のリスクをゼロにすることが使命ではない。科学の実験も、スポーツも、課外活動も、リスクはあるが学びは多い。したがってリスクを慎重に管理して、挑戦できることを増やすことが、教育機関としてすぐれたリスクマネジメントになるだろう。

<活動>

リスクマネジメントの活動面の基本概念としては、リスクマネジメント・サイクルがある。それは経営管理の一般的な概念である、PDCA（Plan：計画、Do：実行、Check：点検、Act：見直し）サイクルを、リスクマネジメントに適用するもので、次の一連の活動を、一回限りではなく繰り返して継続することである。

- ・リスクの洗い出しと評価
- ・リスクへの対応計画
- ・対策の実行と訓練
- ・対策の見直しと改良

<組織体制>

リスクマネジメントの組織体制は、教育機関の組織体制と不可分になるため、必ずしも決められた形はない。ただし次のような機能をもつ必要があるだろう。

- ・リスクごとの縦割りだけでなく、横断的にリスクと対策を評価し管理する。
- ・現場対応、管理、監査の役割分担とトップマネジメントの関与。
- ・情報開示をはじめとした、利害関係者とのコミュニケーション。

上に挙げた点のうちいくつかを、もう少し詳しく述べる。

リスクの洗い出しと評価

組織がもつリスクを洗い出し、それぞれのリスクの性質、原因、影響などを分析する。それによって管理すべきリスクの全体像が把握しやすくなり、対策の優先順位や計画を立てやすくなる。リスクの洗い出しは、組織の経営層やリスク管理担当者、現場のキーマンなどから聞き取りで行うことが多い。たとえばリスクマネジメントの概説書などにある各種リスクの一覧表などを参考に、リスクや望ましくない状況を、思いつくままに挙げてもらうような方法がある。

リスクを洗い出す際に、リスクの程度や粒度をそろえる必要を感じるかも知れない。たとえば地震リスクの対象は震度 6 弱以上か 5 弱以上か、あるいは疾病リスクの水準か感染症や慢性疾患などに細分化するか等である。大雨と水害のような異なるリスクの因果関係による同時発生もある。ただしそれらは聴き取りのあとで整理できるので、聞き取りの段階ではあまり限定せずに、思いつくものをできるだけ多く挙げてもらうことが良いだろう。リスクの種類はさまざまであり、事故や災害など突発的なもの、生徒の生活や組織のモラルなど持続的なもの、場所も校内と校外、さらには経営上のリスクや法的リスクなど、細かいものまで挙げていくと数百の単位になるであろう。

洗い出したリスクは、対象範囲の広狭をある程度そろえ、重複がないように整理する。しかし因果関係は複雑に影響しあうことが多く、完全に独立したリスク項目に分けることはできない。重なりのあるリスク項目でも、管理の方法や対策が異なるなどの理由で、それぞれ別に挙げて良い。整理のしかたに決まった標準はないが、20～100 程度の数に整理すると、まとまりが良いであろう。

例として紹介すると、仙台育英学園は表 1 のような 50 項目のリスクにまとめている。私立の学校法人なので、公立学校と比べて、大分類でいう財務リスクや戦略リスクに属する項目が多いかも知れない。リスク番号 45 の「地震」のほか、震度 7 クラスの「大規模地震とそれに伴う津波」（リスク番号 44）を別項目にしている。健康を損なうリスクや問題行動のリスクは、生徒によるものと職員によるものを区別している。事故やケガは、学校の管理下にある場合（リスク番号 1）と校外活動（リスク番号 43）に分けている。また、「学園イメージの毀損」（リスク番号 42）は、他のリスク項目と随伴して発生することが多いが、別項目にしている。これらの項目の分け方は、リスクへの対策の違いや、影響度の違いを反映するものと考えられる。

表 1 仙台育英学園を取り巻くリスクについて

番号	大分類	小分類	リスク名	具体例等
1	オペレーショナル	安全管理	学校管理下での事故・ケガ	当学園で発生しやすい体育・クラス内・校内活動中の事故・ケガ
2	オペレーショナル	安全管理	施設・設備・備品管理の不備及びそれに伴う事故	フェンス等の穴、理科室等の薬品管理の不備、備え付きすりのネジ緩み
3	オペレーショナル	安全管理	食中毒の発覚	食中毒が発生し、それが食堂利用・学校が用意した弁当等によるものと判明
4	オペレーショナル	安全管理	不審者の侵入	ストーカー等の校内侵入
5	オペレーショナル	安全管理	危機対応の初動不備	危機発生時使用品の設置場所・使用方法不明（AED、備蓄品の設置場所・使用方法が不明等）による危機発生時初動対応のトラブル
6	オペレーショナル	安全管理	病気	風邪等の病気（大規模感染の可能性を持つ感染症以外）の校内発生
7	オペレーショナル	安全管理	感染症流行	校内及び研修中での伝染病やインフルエンザの流行（複数名の感染）
8	オペレーショナル	学校運営	職員の業務ミス・準備不足	職員による入学・卒業手続き上でのミス、誤った情報の提供、保護者対応への準備不足及び失敗
9	オペレーショナル	学校運営	個人・機密情報に関する問題	データベース等の勝手な持ち出しやデータの拡散（情報漏洩）
10	オペレーショナル	学校運営	緊急時における管理職の不在	緊急時における理事長・理事・校長・教頭等の管理者の出張等による不在
11	オペレーショナル	学校運営	教育課程の問題	時間割等での未履修問題
12	オペレーショナル	学校運営	施設・設備・備品の配置問題	職員室の配置や各室内の配置状況による問題、動線上での問題（物による通りにくさ、移動時間等）、グラウンドの砂、騒音
13	オペレーショナル	生徒指導	生徒の問題・迷惑行為	国内・海外研修中や通学・帰宅中の生徒の問題（犯罪未済）・迷惑行為（道路占拠、騒音）、寮での問題（犯罪未済）、いじめ、文化の違いによる問題（犯罪未済）・迷惑行為
14	オペレーショナル	生徒指導	生徒の犯罪行為	生徒や留学生の飲酒・喫煙・飲酒運転・窃盗・暴行等
15	オペレーショナル	生徒指導	生徒の状態・状況	生徒や留学生の不登校、精神的不安定、生徒や留学生の家庭内での暴力行為や扶養者からの暴力等の家庭内での問題
16	オペレーショナル	生徒指導	職員による所有物管理	職員による生徒や留学生の携帯電話・精密機器・貴重品等の紛失
17	オペレーショナル	生徒指導	職員による生徒対応の問題	障害児への対応、特待生の扱い、生徒や留学生への罰則処分や除籍処分
18	オペレーショナル	生徒指導	職員の問題行為	職員の生徒への言葉遣いの問題、SNS等による職員の生徒との過度な交流、生徒へのストーカー・ハラスメント（パワハラ・セクハラ）行為、体罰
19	オペレーショナル	法務・倫理	管理職・教職員による不正・犯罪行為	飲酒運転、窃盗、破壊行為、横領、問題情報等の隠蔽、贈収賄
20	オペレーショナル	法務・倫理	不当請求問題	保護者・職員・卒業生からの不当請求（出席日数不足生徒の進級請求、卒業生等からの髄液漏れに関する不当な要求）
21	オペレーショナル	法務・倫理	著作権・盗作・肖像権問題	試験問題作成での著作権・盗作問題、学園祭での著作権問題、パンフレットの肖像権問題
22	オペレーショナル	法務・倫理	契約書の不備	企業・個人・教職員との取引・契約に用いる契約内容の問題等
23	オペレーショナル	労務人事	労基問題	職員の時間外労働、有給休暇の扱い
24	オペレーショナル	労務人事	職員の精神的問題・労働災害	うつ病等の精神的問題や業務中での労働災害
25	オペレーショナル	労務人事	職員の間関係問題	職員間でのハラスメント行為（パワハラ・セクハラ・マタハラ）、いじめ

番号	大分類	小分類	リスク名	具体例等
26	財務リスク	資産運用	他人資本・費用の問題	借入金の資産規模に対する割合増加、多額の支払利息と金利上昇に伴う借入金借り換え費用の増加、質の高い教育活動のための人件費・設備補修費
27	財務リスク	資産運用	土地利用制限	学校用地等での土地利用制限（教育活動以外に使用不可）
28	財務リスク	資産運用	基本金運用の失敗	奨学金充当分の基本金運用の失敗
29	財務リスク	取引関係	取引業者に関すること	企業等との取引上での問題（教材・事務用品・建物・土地・旅行予約等）、取引先の不祥事（倫理・法律的違反）による取引停止
30	戦略リスク	経済	景気・為替変動	景気悪化による家庭内の教育費への支出減少と私立学校受験者の減少、円安による留学ニーズの停滞・減少
31	戦略リスク	社会	少子高齢化	必要生徒数の確保困難
32	戦略リスク	社会	風評被害	学園立地状況での原発事故等による風評被害
33	戦略リスク	社会	競合校や他校	他校によるマネ、私立・公立の他校での特化型教育の進展（高進学率集中型）
34	戦略リスク	政治	法令・政策の変更	ハラメント（セクハラ・パワハラ・マタハラ）やいじめ問題に関する法律の改正、労働契約法の改正、教育施策方針の転換
35	戦略リスク	人事制度	離職・採用難	職員の急な退職、業務遂行上必要な教職員の採用困難
36	戦略リスク	人事制度	業務負担の格差	職員の年齢構造の問題（30代～40代の働き盛り世代の少なさ）、正規職員及び嘱託職員間での仕事のバランス
37	戦略リスク	人事制度	若手教育・引き継ぎの不十分	新人教育・研修の欠如・不十分
38	戦略リスク	人事制度	外国人教職員の雇用に関わる問題	出入国問題、労働契約上の問題
39	戦略リスク	人事制度	資格不所持	教員免許不所持、カウンセラーの資格不所持
40	戦略リスク	進路指導	進路選択・進路先での問題	卒業生・卒業予定者による推薦・内定辞退や推薦校での留年、職員・生徒の学力不足
41	戦略リスク	生徒募集	募集施策の失敗	新規事業・設備投資の失敗（投資額に見合う生徒数増加に繋がっていない）、授業料未納者の増加
42	戦略リスク	メディア	学園イメージの棄損	偏向報道、マスメディアによる不祥事追及への対応の準備不足及び失敗
43	ハザードリスク	校外活動での事故・問題	生徒・職員の事故・事件巻き込まれ	生徒・職員の通学・帰宅中、国内・海外研修中及び課外活動中における誘拐・人質事件、交通・運転事故、伯山交通の事故
44	ハザードリスク	自然災害	大規模地震とそれに伴う津波	東日本大震災等の震度7以上で広域に影響を及ぼすもの
45	ハザードリスク	自然災害	地震	宮城県沖地震以下の地震規模のもので、局地的なもの
46	ハザードリスク	自然災害	火災	放火、近隣施設・住宅からの延焼、学校内での出火
47	ハザードリスク	自然災害	天候不良・異常気象 冷夏猛暑・台風等	猛暑による熱中症患者の増加、台風による休校、台風による洪水
48	ハザードリスク	自然災害	落雷	体育授業・部活動中での落雷
49	ハザードリスク	近隣災害	学園施設・設備・校舎の一時的使用不可	悪質な悪戯行為、停電、近隣の危険物による一時的避難指示命令
50	ハザードリスク	情報システム	情報管理での被害・故障	情報システム誤作動・情報設備故障（サーバー故障）の発生、外部からのデータベース等への不正アクセス発覚

出所：加藤聖一（2016）、「私立学校法人のリスクマネジメント」、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士論文、p.146～147

洗い出したリスクを項目に整理したうえで、それぞれの原因、発生頻度、発生時の影響などを評価する。そのようなリスクの分析と評価をもとに、リスクに対する対応の優先順位を検討する。

リスクマップ

リスクの洗い出しと項目整理をすると、それぞれのリスク項目の発生頻度と影響度を基準にして、リスクマップを作ることができる。リスクマップは縦軸に被害が発生した場合の影響度、横軸に被害が発生する頻度をとって、リスクを一覧表示するものである。公表されているリスクマップの例として、図1に英国内閣府が作った国民向けのリスクマップを載せる。英国内閣府はほぼ2年ごとに、このリスクマップを改訂して公表している。図1は2010年版で最新版ではないが、最新のものはマップが複数に分かれているので、シンプルな旧版を紹介する。

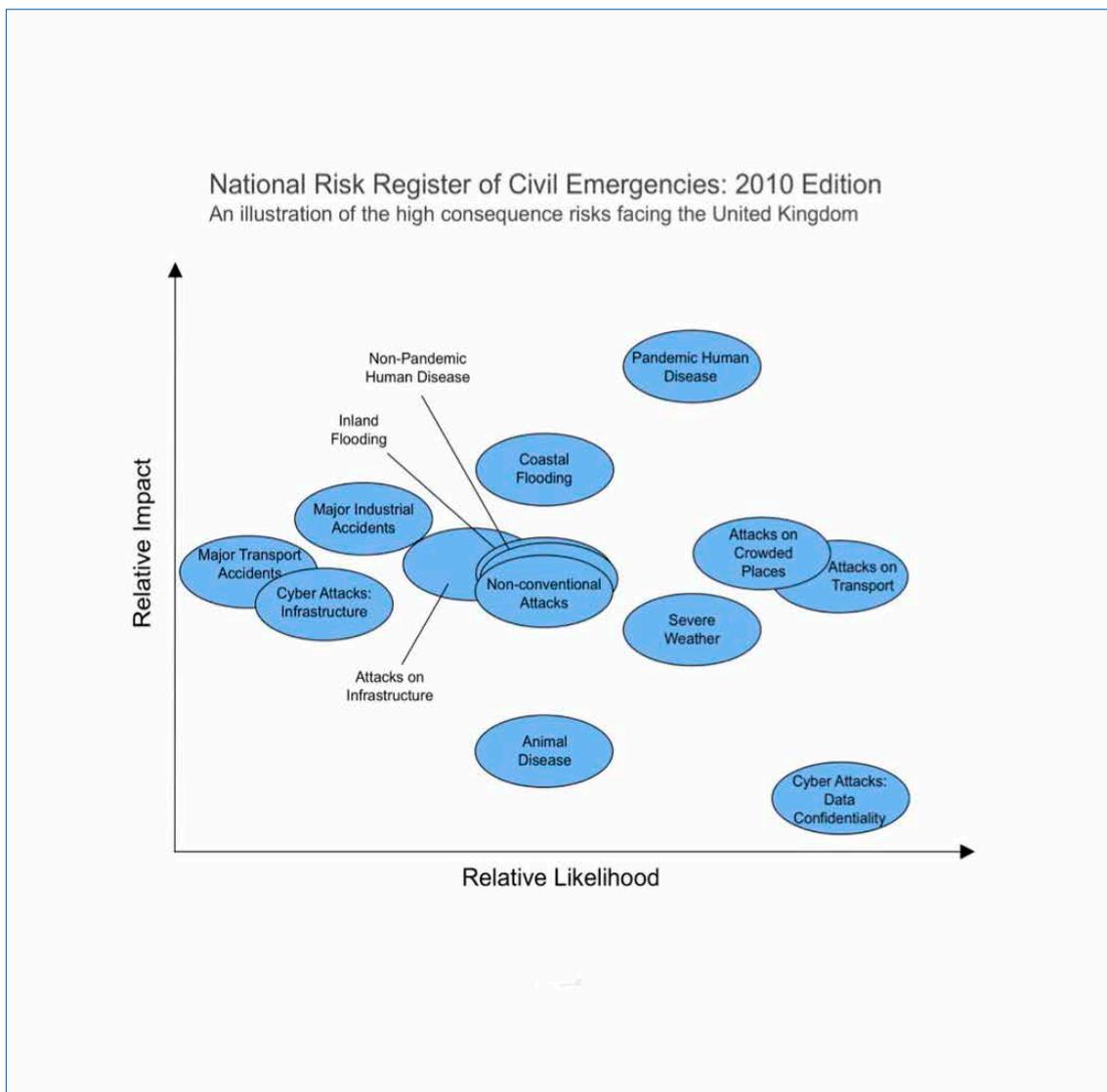


図1：英国内閣府による英国のリスクマップ (Cabinet Office, 2010)
(https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/21118) p.5

リスクマップの上方に位置するリスクほど、被害が現れた場合の影響度が大きく、右方に位置するほど、被害が現れる頻度が高い。つまり左下の原点から離れて、右上に位置するほど重大なリスクと言える。図1で最も上方にあるリスク、つまり英国国民にとって最も影響度の大きいリスクは、“Pandemic Human Disease”、すなわち強毒性の新型インフルエンザのような感染症の大流行である。その場合には英国だけで数万人あるいはそれ以上の死者が出ると予想されている。次に影響度が大きいのは、“Coastal Flooding”、すなわちテムズ川下流域の洪水である。頻度が高いものとしては、“Attacks on Transport”（交通への意図的攻撃）、たとえば2005年に起きたロンドン地下鉄テロのようなリスクである。“Cyber Attacks”（サイバー攻撃）は現在ではさらに頻度が高くなり、医療機器や核施設へのサイバー攻撃も可能になっているので、影響度もより高くなっているだろう。

リスクマップは、集団が直面するリスクの全体像を視覚的に表し、対策の優先順位や計画を決めるために便利である。頻度は過去のデータなどから比較的客観的な値を得やすい。しかし影響度は、生命や安全への影響、財務的な影響、組織の評判など、異なる次元の影響を合わせたものになる。各次元への影響の予想にも個人差が生まれやすいが、それらをどのように加重して合計するかの評価にも個人差が生まれやすい。リスクの洗い出しと同様に、リスクマップの作製にも、組織のトップやリスク管理担当者など複数の意見を参考にする方が良い。ただし最終的にリスクマップを確定する際には、組織の最終的な責任者である、トップあるいは最高決定機関の承認を得る必要がある。そしてリスクとその影響はつねに変化するので、リスクマップは年1回程度の頻度で見直す必要がある。英国は国民向けのリスクマップをほぼ2年ごとに改訂している。米国では国家安全保障に関するリスクマップを半年に1度改訂して、大統領の承認を得ているそうである。ただし機微に触れる情報なので公開はされていない。企業においても、リスクマップを毎年改訂して経営者の承認を得ている例は多い。企業のリスクでは、事故や災害のほか、業務の中断やブランドの毀損、経営戦略の失敗、売上の急減などが大きなリスクになりうる。

リスクマップに関して異なる意見があることは、リスクの評価や重大性の認識に関して個人差があることを意味する。したがってリスクマップを作る過程で、個人や部署による認識の違いを知る効果がある。個人や部署ごとに、特定の種類のリスクに過小評価や過大評価があることもある。そしてリスクマップを共有することで、組織内の共通認識が得られる効果がある。

仙台育英学園は表1にあげた50個リスク項目について、図2のリスクマップを作っている。筆者が知る範囲では、教育機関として公開された最初のリスクマップである。最も影響度の大きいリスクは、他を大きく離して「大規模な地震とそれに伴う津波」である。そして「地震」、「事故・事件」、「火災」などのハザードリスクが続く。「職員の不正・犯罪行為」も影響の大きなリスクである。影響度は、生命や安全への影響、財務的な影響、組織の評判への影響、を加重して合わせたもので、私立の学校法人なので公立学校より、財務的な影響の加重がやや大きくなっていると考えられる。それを含めても、生命や安全に大きな影響があるハザードリスクが、全体としても影響が高いリスクと評価されている。頻度については、「管理下の事故・ケガ」が最も高い。同学園が授業や部活動でスポーツに力を入れていることと関係があるかも知れない。そのほか、「生徒の状態・状況」、「病気」、「生徒の犯罪行為」、「生徒の問題、迷惑行為」などの生徒指導に関する項目や、「若手教育・引き継ぎ」、「業務負担格差」などの人事に関する項目の頻度も高い。影響度と頻度がともに比較的高い項目は、「少子高齢化」と「職員の労働状態・労働災害」である。少子高齢化は、私立学校としての経営への影響が大きいリスクであろう。

学園の リスク



オペレーショナル
リスク



財務リスク



戦略リスク



ハザードリスク

影響度

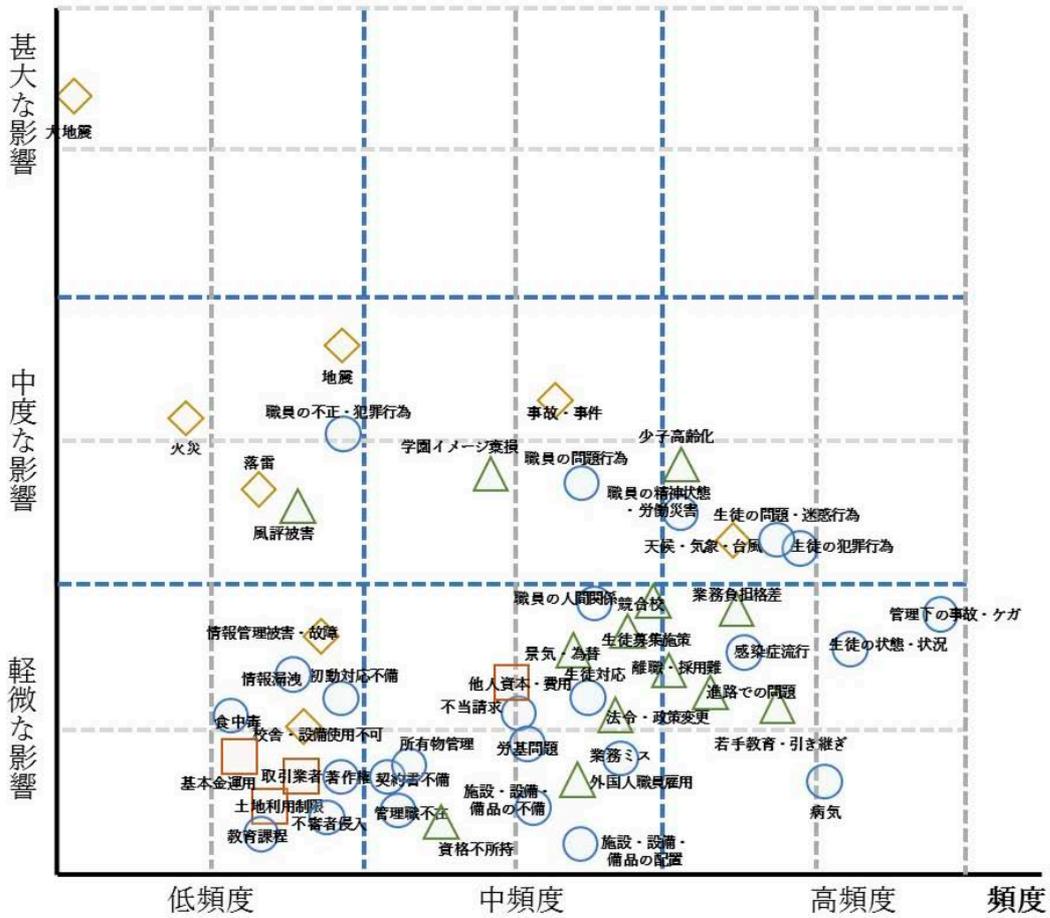


図2：仙台育英学園のリスクマップ

出所：加藤聖一（2016）、「私立学校法人のリスクマネジメント」、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士論文、p.119

リスクへの対応計画

洗い出して整理した個々のリスク項目について対策を検討する。対策を大別すると、回避、移転、保有、に分けられる。回避はリスクを伴う活動を行わないことで、たとえば怪我のリスクが大きいスポーツ種目を行わないことなどが挙げられる。移転は、たとえば保険をかけて財務リスクを保険会社に移転する、あるいは免責契約を結んで法的リスクを持たないようにするなど、リスクの一部または全部を他者に持たせることである。保有は自らリスクをとることである。上に挙げた対策は組み合わせることがある。たとえば事故の財務リスクを保険で移転しても、管理責任のリスクは保有することになる。

リスクを保有する場合の対策は大別して、予防、予備・代替、対応力、に分けられる。予備・代替は、人員、設備、交通・通信手段などに余裕や代替がある状態で、物資の備蓄も含まれる。それらはさらに事前の対策と事後の対応に分けられる。予防はすべて事前の対策だが、予備・代替は事前の備蓄や準備と、事後の交代に分けられる。対応力は事前の訓練や防災教育と、事後の対応力に分けられる。1つのリスク項目に対して、多くの具体的な対策をとることが多い。その一方で、1つの対策が、複数のリスクに有効なこともある。対策には費用がかかる投資になるものもあるので、設備更新とあわせて行う、リスク対策だけでなく他の用途と共用にする、他の組織と共用にするなどの方法もある。

組織の規模が小さいほど、自組織が単独でできる対策は限られる。その意味では、同業異業の連携による対策は現実的な方法である。連携は同じ地域内で行うことが多いが、災害対策などでは、同時に被災しない距離にあるやや離れたパートナーとの連携が有効になることもある。

個々のリスク項目への対応計画にあわせて、リスク横断的な管理も行う。リスクマップを参考に、組織にとって重大なリスクの特定、対策の優先順位づけ、年度ごとの対応と目標などを決めると、対応計画にメリハリがつくであろう。対策の優先順位に影響を与える要因は、リスクの重大さとともに、対策によってリスクを軽減できる程度である。最も重大なリスクではなくても、対策によって大幅にリスクを軽減できるならば、その対策の優先度を高めて良い。また、対策の実施に順序をつける場合には、被害の可能性が差し迫っているものを先に実施する考え方もある。

想定外の事態への備え

被害を予防することは事後対応にまさるが、人間の限られた想像力と技術力では、全ての被害を予防することはできない。何らかの理由で想定を超える事態が起きたり、予防に失敗して、被害が発生する事態に備える必要がある。

従来の体系的なリスクマネジメントは、想定外の事態への備えが弱いものになりやすい。このことを図で説明する。図3はFault Tree Analysis (FTA) と呼ばれる分析で、特定の事故や被害の原因を分析する手法である。結果から原因をさかのぼって想定する視点である。FTAからは、事故の原因を一つずつ潰して事故を予防するような対策が検討される。FTAは工業製品など人工物のリスクマネジメントによく用いられる。とくに、航空機や原子力発電所の事故など、大きな被害を生む事故の予防によく使われる。人工物は構造や用途を人間が意図して作るものなので、リスクやその原因を人間が想像しやすい。FTAの図自体も設計図に似た形になりやすい。

図4は Event Tree Analysis (ETA) と呼ばれる分析で、特定の事故や被害から波及する被害を分析する手法である。FTA とは逆に、原因から結果を想定する視点である。ETA からは、事故が起こりうる被害に対して一つずつ対策が検討される。ETA は自然災害や広域被害など、波及する影響が多岐にわたり、事故の予防が難しい種類のリスクによく用いられる。予防が可能であっても、発生してしまう事態に備えて用いられることもある。大規模な災害の被害総額の推定などにも用いられる。

ただし図3と図4は、いずれも単一の事象を中心にした因果関係の分析である。特定のリスクに限定せずに、組織がもつあらゆるリスクを統合して対象にするならば、因果関係はたとえば図5のようになる。「人身事故」や「教育の質低下」など、最終的な被害と考えられる事態は複数あり、それに至る因果関係は単線的なものではない。「職員の疲弊」は人身事故にも教育の質低下の原因にもなりうる。「組織のモラル低下」は教育の質低下の原因になるほか、地震と複合すると人身事故の原因にもなりうる。逆方向の因果として、教育の質低下が組織のモラル低下を生む可能性もある。因果関係が両方向に働くときは、改善の好循環とともに、悪化の悪循環の可能性もある。そして個別に明記した原因のほか、想定外の事象が原因となって、さまざまな被害が発生しうる。

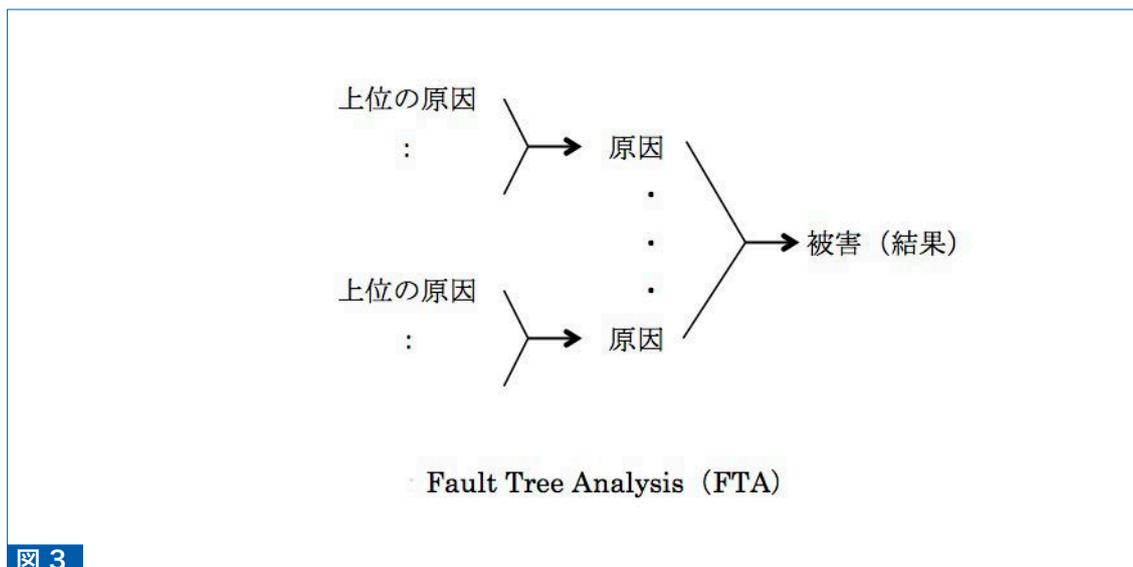


図 3

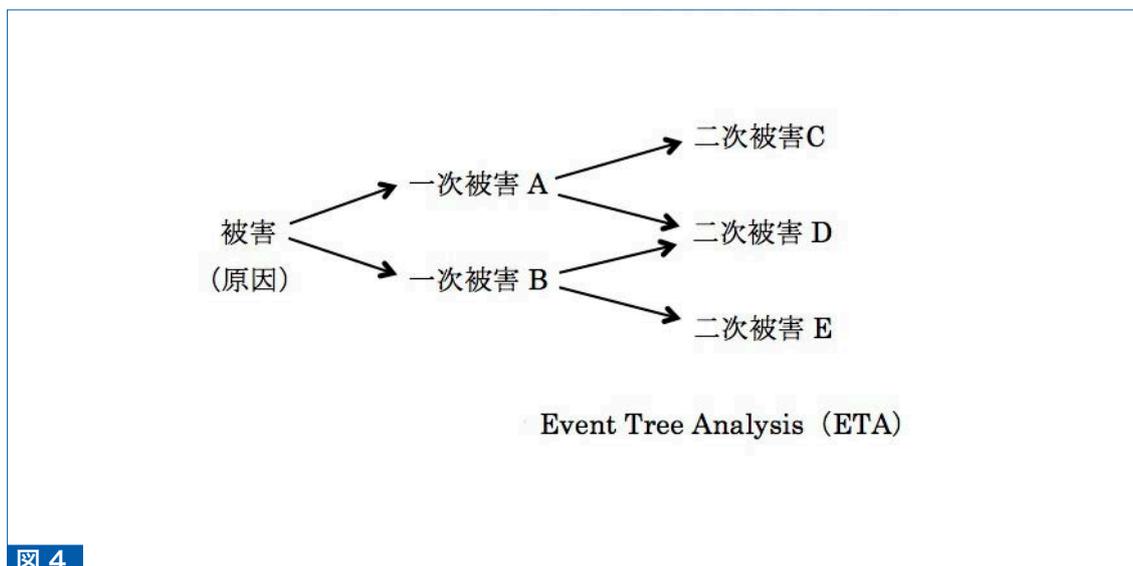


図 4

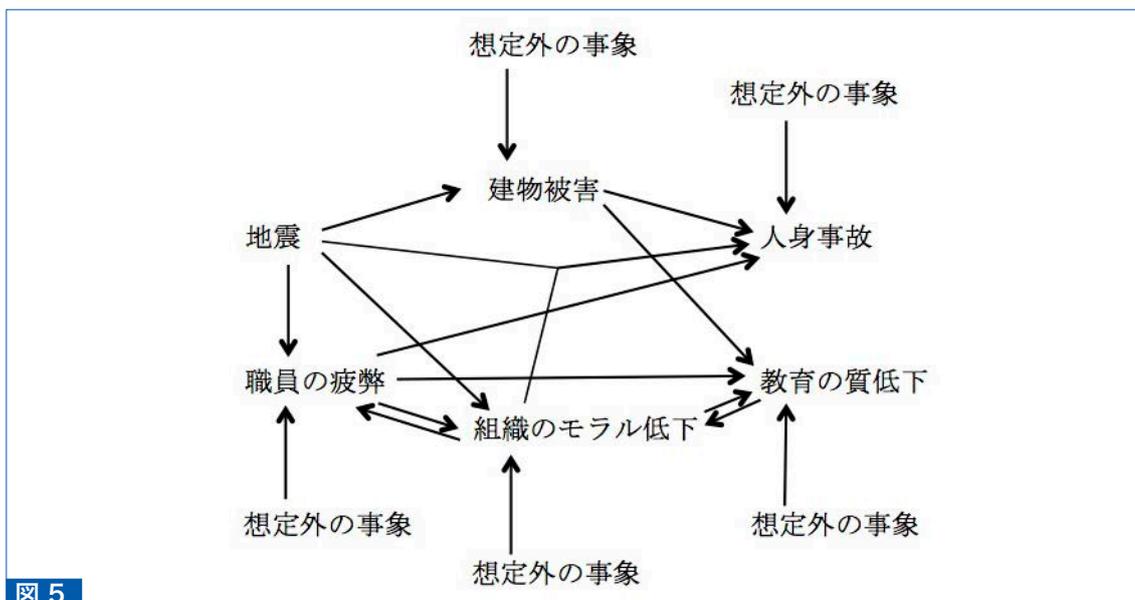


図 5

包括的なリスクマネジメントは、想定外の事態も含めて、図5のような関係にあるさまざまなリスクへの対策を検討する必要がある。すべてを一括して対処するのは難しいので、現実的にはリスクマップに挙げたようなリスク項目ごとに対策を検討することになるだろう。リスクごとに管理を分担すると、想定するリスクに漏れが生じる可能性がある。ただし次のような考慮をすることで、そのような問題を軽減できる。まず、教育機関として何としても回避したい被害を考える。たとえば図5に挙げた「人身事故」や「教育の質低下」などが考えられるだろう。これらの事態について、図3のように原因を分析して、各原因への対策を実行する。実はリスク項目に挙げたリスクの多くが、何としても回避したい、人身事故や教育の質低下などの原因になっているであろう。リスク項目ごとの対策は、この原因ごとの対策になる。特定の被害が生じるまでには、何段階かの対応の余地があり、どこかで対策をとれば防げることが多い。したがってリスク項目の対策のいずれか、または複数の対策の効果によって、何としても回避したい事態を防ぐ可能性を増やすことができる。この構造をごく簡単に図式化すると、図5を図6のようにとらえ直すことにあたる。図6の右にある「最終的な被害」の「人身事故」や「教育の質低下」の原因として、中央の「原因となる被害」や、左の「より上流の原因」に、各リスク項目が含まれる構造になる。実際には「原因となる被害」や「より上流の原因」に含まれるリスク同士に因果関係があるなど、図6のように単線的な関係ではない。しかし想定外の事象を含めた全体の構造を、かりに図6の略図のイメージで大要としてつかんで頂きたい。図6のようにとらえることで、「想定外の事象」への対応が分かりやすくなる。

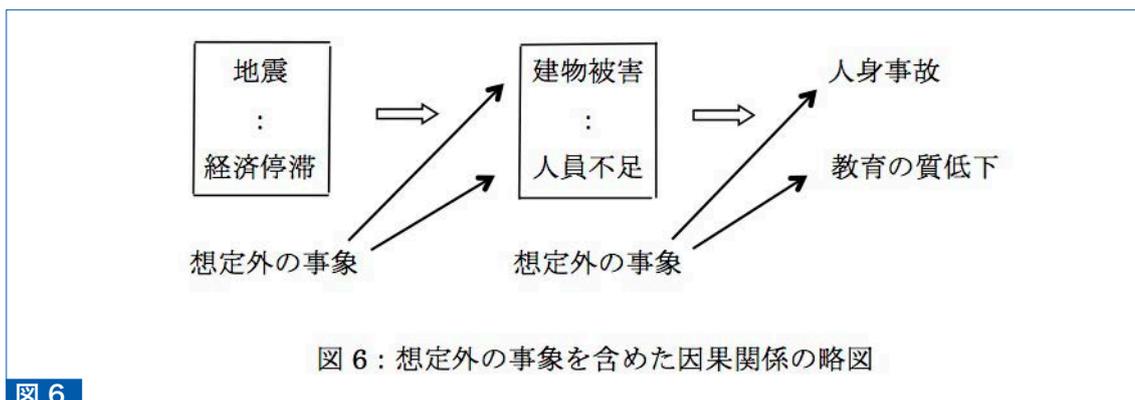


図 6 : 想定外の事象を含めた因果関係の略図

図 6

一般に、〈より上流の原因〉にさかのぼって対策をとり、被害を予防できれば効果は大きい。たとえば地震対策によって地震の被害を防ぐなどである。しかしさまざまな原因で、予防に失敗したり、随伴する想定外の事象によって、被害が発生することがある。被害が大きければ、建物などの〈原因となる被害〉や、人身事故や教育の質低下などの〈最終的な被害〉に及ぶ。したがって、何らかの理由で被害が発生した場合を想定して、中流や下流の対策を準備する必要がある。たとえば何らかの理由で、建物が使用不能（あるいは立入禁止）になる、多数の職員が稼働不能（あるいは連絡不能）になる、などである。自らの教育機関で活動できなくなる事態でも、代替の場所に移動する、あるいは他の機関に委託するなどの対策がある。

〈より上流の原因〉だけでなく、さまざまなく原因となる被害〉や〈最終的な被害〉に対しても、対策を検討する。上流の原因にさかのぼる対策は、地震、火災など、リスクの種類ごとにかなり異なるであろう。しかし中流や下流は、原因が異なっても共通する部分が多い。より最終的な被害に近い事態への対策ほど、さまざまな上流の原因を受けて、より多くの想定外のリスクをカバーすることになる。上流指向の予防と、さまざまな段階の事後対応を組み合わせ、ふところの深い対策にすることが重要である。

個別のリスク項目への対策は、一般的な傾向として、物的事故、人身事故、教育の質などの多くのリスク項目に対しては、図3のような原因の分析とそれへの対策が基本になる。すると図6のイメージで上に述べたような、原因の分析とそれへの対策、想定外の原因に対する段階的な事後対応の備えが対策の基本になる。地震などの自然災害や予防が難しいリスクに対しては、図4のような被害の想像と事後対応の備えが中心になる。人の心理や組織のモラルなどのリスクは、個人差や関連要因が多く、因果関係の分析が難しい。したがって、普段の観察やデータのなかから、異変を早期に検知することが重要で、具体的な対策はケースにより異なる部分が多いだろう。

非常時の対応

リスクが現実になった場合の対応も、リスクの事前対策に劣らず重要である。非常時になすべきことを事前に想定して訓練しておくことは有効だが、必ずしも想定した通りのことが起きるとは限らない。非常時の初動は、比較的事前に想定しやすいが、その後は事態の展開にあわせた柔軟な対応が必要になる。その意味では、判断の参考になる情報が適切な人に伝わるのが重要である。突発的な災害など時間的な余裕がない状況では、意思決定すべき人が適切な場所にいること、あるいは通信手段が確保されていることが極めて重要になる。

非常時には普段と違うことが起きているので、誰もが情報不足になる。したがって基本的に、現場に関する意思決定は、現場にいる者がもっとも情報を持っているのですべきである。責任者がいなければ、そこにいるのが新人だとしても、できる範囲で最善の判断をする。あとから責任者が到着すれば、その時点でリーダー役を引き継げば良い。いざという時に一歩踏み出で行動する者が多い組織ほど、危機に強いと言える。現場から離れた対策本部などは、情報を十分にとれない現場での対応については、現場にいる者の行動を管理しようとするのではなく、彼らの判断を尊重して支援するように対応する方が良いであろう。

非常時には、現場に限らず少ない人員と時間での対応を迫られるため、普段より下位の者が意思決定をすることが多い。そのように非常時の判断と行動は困難なものだが、教育関係者は

他産業の従事者に比べると、非常時の対応能力が高いのではないかと思う。その理由の一つは、教育関係者は普段から未成年の生徒の生活を預かる活動をしていることである。したがって非常時でも、普段から行っている危機管理をより積極的に行うことである程度対応できる。その意味で、非常時には普段と違うことをしなければならない他産業より、従事者の対応能力は概して高いと言える。しかし視点を変えると、教育機関は現場の従事者の努力に依存しすぎる傾向があるかも知れない。非定型の危機対応は、人間の柔軟な対応能力に依存せざるをえない部分がある。それでも情報システムや機械力を活用できる余地は、まだかなりあると思われる。

重要でありながら、非常時に忘れられやすいこととして、非常時の記録をとることがある。発生したことや被害の状況、発信・入信した情報の記録である。できる限り時間をあけずに記録をとることで、人員の引き継ぎ交替がしやすくなり、事後にリスクマネジメントの見直しをする際にも役立つ。場合によっては、法的リスクを下げることにもつながる。記録をとる者を、リスク項目ごとに決めておくのと良いが、担当者がいないときには責任者がとる、あるいは責任者が指名した者に記録をとらせる。

対策の見直しと訓練

職員は異動し、業務のしかたや設備も変化するので、リスクマネジメントの水準を維持するだけでも、定期的な見直しは必須である。対策を実行した後で、その効果を検証して記録する。リスクが現実のものになったか否かに関わらず、リスクマネジメントの効果を定期的に記録し、見直しの資料とする。とくに災害など重大なリスクについては、もし発生した場合には、すみやかに対策やリスクマネジメント体制を点検し必要な修正をする。自らの教育機関ではなく他機関に起きた場合にも、それが自らに起きた場合を想定してリスクマネジメントを点検すべきであろう。

頻繁に発生しないリスクへの対策では、不足する経験を訓練で補うことが有効である。訓練は対応力を高めることが目的だが、対応力を測定することでリスクマネジメントの効果を測ることもできる。訓練は必ず目的や課題を定めて行うべきであり、目的や課題にあわせた訓練の評価基準を作る。たとえば、訓練の目的が特定の行動の習熟であれば、評価基準は行動の質と要した時間などが考えられる。また、目的が非常時における判断力を養成することであれば、評価基準はシナリオが与えられてから対応計画を作るために要した時間と対応計画の質、発信する情報の質とタイミングなどが考えられる。

訓練は、さまざまな目的と規模のものを使い分ける。小規模でも開催しやすければ、訓練の回数を増やせる利点がある。記録は非常時における引き継ぎ交替や、事後の調査研究をしやすくするものなので、訓練のときから、運営側だけでなく参加者も、自らの行動の記録をとる習慣をつけておく。

組織体制

リスクマネジメントの活動面の基本概念は、ここまでに述べたリスクマネジメント・サイクルである。それを運用する組織体制についての基本概念としては、次のようなものがある。

- ・リスクごとの縦割りだけでなく、横断的にリスクと対策を評価し管理する。
- ・現場対応、管理、監査の役割分担とトップマネジメントの関与。
- ・情報開示をはじめとした、利害関係者とのコミュニケーション。

以下に順に説明する。

リスクごとの管理と横断管理

リスクマネジメントのためには、さまざまなリスクに関する知識と経験が必要になる。そのためリスクマネジメントは、ある程度リスクの分野ごとに詳しい者に分担されることになる。分担は、必然的に業務の分担と不可分であろう。たとえば財務的なリスクは主に財務部門が管理することになる。しかし火災リスクの管理のように、ほぼすべての構成員が行うものもある。リスクの分担に決まった境界はなく、リスクの発生頻度や影響度は組織によって異なるので、分担のしかたは組織ごとに異なって構わない。先に述べた、リスクの洗い出しと整理によるリスク項目は、分担の単位の目安になるだろう。

リスク項目ごとに縦割りに管理することは、専門知識や経験を活かすうえでは有利だが、横断的なリスクマネジメントを難しくする。たとえば複数分野にまたがるリスクに対して、どの分野も積極的に対策をとらなかったり、各分野の範囲を狭くとらえて、分野の間で見落とされるリスクが生まれたりする。また、あるリスク項目では高い水準の対策がなされる一方で、他のリスク項目では対策がおろそかになることもある。事故や災害は、対策が弱いところを探したかのように発生する傾向がある。それらの弊害をなくすために、そして組織の限られた資源を有効に配分するために、リスク項目ごとの縦割りの管理だけでなく、リスクを横断的に管理することが欠かせない。

横断的な管理は、組織がもつさまざまなリスクを俯瞰して、対応の優先順位づけをすることが含まれる。優先順位に影響を与える要因は、リスクの重大さとともに、対策によってリスクを軽減できる程度である。最も重大なリスクではなくても、対策によって大幅にリスクを軽減できるならば、その対策の優先度を高めて良い。また、対策の実施に順序をつける場合には、被害の可能性が差し迫っているものを先に実施しても良い。組織がもつリスクと資源を俯瞰して、年度ごとの対応計画と目標などを決めることも重要である。

現場対応、管理、監査の役割分担

組織におけるリスクマネジメントの役割を大別すると、現場対応、管理、監査、の3つに分けられる。

現場対応は、リスクが発生する現場に近い者による対応である。具体的には各現場レベルの担当者や管理者による、担当業務の中でのリスクの予防や事後対応である。現場対応をする者は一般的に、リスクが発生した状況や発生しうる状況に関して、最も多くの情報をもつことになる。そしてもっとも早く事態に対処できる。したがって現場対応ができる範囲であれば、基

本的に現場の判断で対応することが望ましい。

管理は、現場対応を支援・管理することである。現場対応が適切になされているか評価し、必要な指示や助言を行うほか、現場で対応しきれない事態に対して支援を行い、担当するリスクに関する包括的な責任を負う。リスクマネジメントの課題を発見したり、必要な資源を配分したり、必要な専門知識を調査することなども管理の役割である。管理者は、現場対応と同じ部署にいることもあるが、スタッフ職や上級職として違う部署にいることもある。管理者は知識や経験に応じてリスク項目ごとに分担することになるだろう。しかし全リスクを横断的に管理する者も必要である。組織のトップマネジメントは組織の全リスクに最終的な責任を負うので、全リスク対象の管理責任者である。

監査は、組織のリスクマネジメントが全体として適切に機能しているかを評価し、必要な助言を行う。監査は組織の内部者による場合と、外部者による場合があり、両者を併用することもある。内部監査は、たとえば監査部門や最高決定機関あるいはトップマネジメントなどによって行われる。一般に内部監査は、組織や業務に関する知識が多い者による利点がある。外部監査は、外部の委員や監査の専門家により行われ、内部者にはない専門性や視点から監査がなされる利点がある。また、厳しい評価を与える際に、内部者より心情的な抵抗感が少ないかも知れない。管理責任者は監査を行う者に、定期的にはリスク管理の状況を報告する。しかし適宜に、監査者が管理者や現場の者に質問や調査をしたり、管理者や現場の者から監査者に報告や相談をして良い。いずれにしても監査者は監査結果をフィードバックする。監査は専門知識が必要であれば特定分野に限定して行われて良いが、組織全体としてのリスクマネジメントを評価するために、全リスクを対象にして行う監査も必要である。

現場対応、管理、監査、の役割は、相互に牽制する部分があるので、それぞれ別の者が担当することが望ましい。しかし適任者の人数が限られる場合や、組織をあまり複雑にしたくない場合には、複数の役割を同じ人物が兼ねることもある。ただしその際には、兼任者は意識的に視点を変えて、自分の仕事を役割ごとに批判的に見る必要がある。

トップマネジメントは組織の全リスクの管理責任者であるが、自分の他にも全リスクを管理する者をおいて良い。むしろ複数者で全体のリスクを管理する体制の方が、知識や経験を補い、トップマネジメントが不在のときでもリスクマネジメントの水準を維持できる。トップマネジメントは、特定のリスクの管理責任者になって良い。また、監査の役割を一部兼ねることがあっても良いだろう。それでも、トップマネジメントとしての仕事を監査してもらう体制をもつことは重要である。

非常時対応の体制は、普段の組織体制や担当と異なるものになる場合がある。「非常時の対応」の項で述べたことが参考になるであろう。非常時における全体管理の責任者は、現場対応に関しては、現場の行動や判断を、管理するのではなく支援するように対応すべきであろう。

役割分担とリスクマネジメント・サイクル

リスク項目ごとに、現場の対応者と組織全体での管理者を定めると良い。そのとき1人が複数のリスク項目を担当したり、あるリスク項目をさらに細分化して担当者を分けても構わない。教育機関の場合、とくに教員は業務があまり専門分化しないので、誰もが多くのリスクの現場対応をする可能性がある。

リスク項目ごとに、リスクマネジメント・サイクルを回すことが可能である。典型的には、まず年度の目標を定める。目標は事故の数など定量的なものでも、定性的なものでも良い。定量的な目標ならば、被害の程度や、被害に至らなくても注意すべきいわゆる「ヒヤリ・ハット」などに分類して、それぞれの発生件数などで目標をたてる。重大な事故は発生ゼロを目指したいが、軽微なものなら、必ずしもゼロを目標にしないで、たとえば年間10～20件に収めるような目標もありうる。ゼロ件を目標にすると、事故を隠そうとしたり、事故の可能性のある行事などを必要以上に回避するかも知れない。目標を具体的に定めると、課題も具体的に見えてきて、具体的な対策を立てやすくなる。

現場から管理者に、事故や被害が発生するごとに報告するものと、期間でまとめて報告するものに、緊急性や重要性で案件の程度を分けて決める。報告に対して管理者は必ずフィードバックをする。緊急性のある報告には当面の指示、期間の定期報告に対しては評価や助言などが、フィードバックになるであろう。そして管理者は、報告をもとに対策の見直しをして、必要な修正をする。

組織のリスクを横断的に管理することも必要である。横断的な管理は、組織がもつさまざまなリスクを俯瞰して、対応の優先順位づけをしたり、資源を配分する。横断的な管理をするためには、すべてのリスク項目の定期的な報告が、少なくとも年1回の頻度でなされる必要があるだろう。それによって組織全体でのリスクマネジメント・サイクルが同期する。リスク項目ごとのサイクルは、より速く回すものがあって良い。また重要な報告は、定期的でなく即座にトップマネジメントに伝えなくてはならない。トップマネジメントは各リスク項目の重要度や対策の過不足を考慮に入れて、組織全体のリスクマネジメントの方針と目標、対応の優先順位付けを行う。

情報開示

情報の共有は、一般にリスクを軽減する。一部の個人情報など、流布することがリスクになる例外はある。しかし、リスクの種類と実現する条件、実現する頻度または蓋然性、リスクが実現した場合にもたらしうる被害、適切な対策などの情報は、知らされないこと自体がリスクになりうる。

教育機関の活動は共通するものが多い一方で、リスクやリスクマネジメントに関する情報は発信されることが少ない。情報発信はその学校の現在の関係者にとどまらず、これから就学しようとする者、他の教育機関にとっても参考になるものである。リスクマネジメントに関する情報発信も、教育機関の社会的責任の一つと言えるであろう。

仙台育英学園のリスクマネジメント

ここまでに述べたリスクマネジメントの要点に照らして、仙台育英学園の東日本大震災における対応と、リスクマネジメントの取り組みおよび体制を評価する。地震は教育機関がもつさまざまなリスクの一つにすぎないが、大規模な被害を生じうるリスクであり、その経験を共有する価値は大きい。仙台育英学園のリスクマップでも、最も影響度が大きいリスクである。

東日本大震災における対応

地震の発生は2011年3月11日金曜日の14時46分であった。そのとき仙台育英学園では、仙台市内の宮城野キャンパスに生徒約500人と職員約100人、仙台市に隣接する多賀城市内の多賀城キャンパスに生徒約700人と職員約140人がいた。生徒は中学生と高校生で、それぞれ3年生はすでに卒業してキャンパスにはいなかった。6校時の授業中で、生徒は机の下に身を隠したが、激しい揺れのため机ごと動いていた。揺れが落ち着いてから全員校舎の外に出た。校内放送による指示はなかったが、避難訓練通りに行動できた。

宮城野キャンパスでは3つの校舎で大きな損傷が生じた。そのため生徒は一旦校庭に出たまま校舎内に戻れず、間もなく雪が降り始めた。気温はその後17時頃から氷点下になる。地震によって電気、ガス、水道が止まり、やがて通信も途絶した。生徒にはグループ単位で校舎に防寒具や貴重品などを取りに戻らせたうえで、17時頃に帰宅の指示をした。帰宅が困難と思われた者は、被害が少ない多賀城キャンパスにシャトルバスで避難した。多賀城キャンパスとは緊急防災電話で通信が可能だった。

多賀城キャンパスでは校舎に目立った損傷はなく、生徒は校庭に一時避難した後で、津波の警告を受けて校舎3階に避難した。多賀城キャンパスの校舎はすべて新耐震基準を満たしていて、十分な耐震性があることが周知されていた。ただし多賀城キャンパスでも、電気、ガス、水道が止まり、やがて通信も途絶した。自家発電機で最小限の電力は確保できたが、校内放送はバッテリーが使えず機能しなかった。同キャンパスは仙台港から約2kmしか離れておらず、海拔3mの地点にある。ワンセグ放送やラジオ放送、通信途絶直前に届いた職員からの警告などで、津波の危険を察知して最上階に避難した。津波は校舎の近くまで来たが、敷地には至らなかった。しかし水道管の破裂で校舎の外側が10cm冠水した。学校法人のトップである理事長が発災30分後に多賀城キャンパスに着いて、法人全体の対応の中心になった。生徒・職員ともに全員無事であった。生徒には帰宅させたが、シャトルバスによる帰宅は翌日明るくなるまで行わず、帰宅が困難と思われた者は宿泊させた。夕方には宮城野キャンパスから避難した生徒や職員が着き始めた。毛布、井戸水、食糧などの備蓄品を出して、この日は合わせて生徒約700人と職員約120人が校舎3階で宿泊した。井戸水を使って1階のトイレが使用可能で、近くの寮では水道が通っておりプロパンガスを使って調理が可能だった。ただし寒さのため生徒はほとんど寝ていない。石油コンビナートが爆発し炎が見えた。100km強しか離れていない原子力発電所の非常事態に関するニュースが入ってくる。

発災対応の課題と評価

発災直後の対応は、校舎外への避難と安否確認などが適切になされたように思われる。多賀城キャンパスにおいて、津波の危険を察知して高い階にあらためて避難したことも適切と思われる。ただし津波の高さと時期は、同じ場所においても、震源の位置や方向によって異なる。もし今回より高い津波が早い時期に来た場合に、適切な対応がとれたかは未確認である。将来、津波の危険がある地震に襲われた場合、耐震性が十分ある建物であれば、次のような行動が選択肢の一つになりうる。建物に大きな損傷が見られず、火災や危険物の漏出などのおそれがない場合には、建物内で待機して様子を見ることである。

トップマネジメントが早い時期から対応の中心になり、各方面と情報交換をして必要な指示をしている点も良い対応と思われる。職員へのアンケートからは、勤続年数が10年を超えると、発災時の状況把握と初期対応を迅速に行えた傾向があった。トップマネジメントである理事長は、勤続年数が当時20数年に及び、現場と管理部門の両方を経験し、両方の定例会議に出席して組織のリスクを全体管理していた。そのような立場からの確かな判断と指示ができており、発災後の行動計画や復興の道筋を早期に示すことができている。職員が復興の計画を共有できたので、何か問題が発生しても、悲観的にならずに解決の方向性を共有し協力できたという。

課題としては、生徒の帰宅に関する安全確保が挙げられる。帰宅した生徒の中には、途中の仙台駅などで足止めになった者や、学校に引き返した者がかなりいた。学校近くの避難所はほぼ満杯になっていた。避難所以外でも、建物の非常灯など明かりのある所に人が集まっているような状況だった。災害時の安全確保の一般論としては、当事者が、その場の滞在、帰宅、他の場所への避難、の中から安全なものを選択できることが望ましい。そのために普段から、滞行者（帰宅困難者）用の資材を備蓄したり、避難の訓練をする。そして非常時には、避難経路や帰宅経路の安全を確認しなければならない。今回は帰宅経路で足止めされた生徒が多かった。宮城野キャンパスに戻ったら誰もいなかったという生徒の例もあった。幸い大事には至っていないが、場合によっては帰宅が危険な選択になったかも知れない。通信の途絶や降雪のため、滞在することにもデメリットがあり、判断が難しい状況だった。それでも帰宅の指示の前に、もう少し安全確認ができた可能性がある。さらに欲を言えば、校舎が使えなくても安全に滞在できる対策があれば良かった。

また将来、生徒が登下校中の時間に大地震が発災した場合の安全確保には、課題を残しているように思われる。

滞在、帰宅、避難の選択肢は、生徒と職員だけでなく、来訪者や地域の住民などにも提供できれば、なお良いことになる。その意味で、仙台育英学園は避難所に指定されていないが、多賀城キャンパスで地元住民の避難を受け入れたことは大変良い。また、利用可能だった寮の調理施設を使って、宿泊した生徒職員だけでなく、避難所などへの炊き出しを行ったことも良い判断であった。近くに避難所があったため多賀城キャンパスへの地域住民の避難は3人だったが、場合によっては多くの人を受け入れ可能にすることは、地域貢献の一つと言って良い。受け入れの準備は、生徒職員の家族を収容する場合にも活かされる。ただし外部者を受け入れることにはそれなりの課題がある。外部者が意図してもしなくても、校内の人や設備に損害を与える可能性がある。逆に、校内の危険に不案内な外部者にとって特有のリスクもある。外部者でも安全に滞在できるような、受け入れの場所や方法を、普段から検討しておく必要がある。宮城野キャンパスでは、地域の住民から校舎内に避難させてほしいとの依頼があったが、校舎

の損壊状況から危険と判断して断っている。その後の建物の調査から、これは適切な判断だったと考えられる。ただし新校舎になった現在は、より地域に貢献することが可能になるだろう。

発災後の課題と評価

発災の2日後には、3月末まで学校を休校にするとともに、一部の職員を除いて職員に特別休暇を出すことを決めている。これは早くなされた良い判断である。当時は余震などが続いていて今後の情勢が不確実であり、学校の都合だけを考えれば、多くの職員を動員できる体制にしておきたいかも知れない。しかし学校の社会的使命を考えた場合に、大災害に被災した状況では、人や設備などの資源を、より緊急な要請に振り向ける方が良い。職員が学校の義務から開放され、生徒が登校しないが良いのなら、彼らは家族や社会が必要とするそれぞれの役割を果たすことができる。設備は開放して、必要なら避難所などの救援施設として使うのも良い。ただしその際は避難所としての運営のため、職員や生徒は貴重な担い手になるであろう。授業などの教育は社会にとって重要な活動であるが、災害時には一時中断しても取り戻しは可能である。安全の確保が第一であるが、その他の学校の活動は、社会の緊急の要請に比べれば優先順位が低くなる。可能であれば人や施設を開放する判断は、教育機関に限らず重要である。あまり目立たない貢献かも知れないが、それが間接的に人命を救う場合もある。

インフラが復旧するまでの日数は、電力が2日（宮城野）と4日（多賀城）、電話は1週間、水道は当日（宮城野）と21日（多賀城）であった。都市ガスは1カ月近く停止したが、多賀城の寮でプロパンガスを使って代用した。また東日本大震災においては、被災地が広域であったため、自動車用燃料の不足が深刻になった。被災地内の移動にも、燃料の輸送にも多くの燃料を要したからである。通信や交通が途絶えたため、遠くから通学していた生徒の中には、一週間程度連絡がとれない者もいた。休校中の生徒との連絡は、ホームページと郵送が有効な方法だった。

なお被災地全体としては、能島（2011）から推定すると、インフラ供給が中断した戸数の90%が回復するまでの日数が、電力で10日（宮城・岩手県）、電話で14～20日、水道で24日、都市ガスで34日になる。阪神・淡路大震災のデータや、首都直下地震の被害想定でも、インフラ回復には同程度の日数がかかっている。避難所になっている施設には、一般にインフラ供給を優先させるが、避難所になっていても大災害ではインフラが途絶するなどの非常時が長引く可能性がある。早期の事態改善が見込めない状況では、職員生徒はじめ関係者の健康維持が重要な課題になる。

4月7日にあった最大余震で、宮城野キャンパスの3つの校舎が明らかに修復不能になった。震災後1年くらい余震は続いた。そのため避難訓練も頻繁に行わなければならなかった。生徒には、無理はさせないが、励ますように、一緒に前に進むように職員から話しかけた。生徒は意外とあっけらかんとした態度で過ごすことが多かったそうだ。毎日の生活が大変だったこともあろう。しかし高校生は、大人の前ではあまり気持ちを出さないの、内心のストレスが見えないのかも知れないという。むしろ大人の職員のほうが疲れは見えたとのことである。短期的には5～6日目に疲れがピークに達した。長期的な課題として、関係者の心身のストレスがあげられる。仙台育英学園における聴き取りでは、被災後しばらくは緊張感が心身を支えていたが、1～3年ほど経つと蓄積した疲れが出てくる印象があるとのことである。

仙台育英学園では、個人情報など機微な情報の扱いで大きなトラブルはなかった。また、教育機関としての信用が毀損することもなかった。信用に毀損がなかったことは、人身被害がごく軽微なもので済んだこととも関係しているだろう。

財務的な課題と評価

財務的な課題としては、仙台育英学園は損壊した校舎の建て替えに約 55 億円を要した。その半分程度を、国や県からの補助、多くの方の寄付金で補うことができた。しかし年間収入が 30 億円規模の同学園にとって、多額の支出であり、負債を増やすことになった。震災によって、従来の資金計画にない多額の支出が発生する一方で、教育機関は定員などの制限があるため収入を増やすことは容易ではない。むしろ災害があると、生徒の減少や授業料の減免などで収入が減少する傾向がある。不測の支出に備えるためには、普段から財務体質を強化するとともに、校舎などの資産を事故や災害に強いものにする必要がある。

負債の増加にはなったが、校舎の再建をはじめとした復興計画を早期に各方面に提出したことは、復興の時間と費用を節約したと思われる。他の教育機関から多くの復興計画が提出されてからでは、補助の審査に時間がかかったほか、建設ラッシュによる資材の高騰や人の不足のため、より多くの時間と費用がかかったと思われる。従来から、建て替えのデザインなどを構想していたことが、早い計画づくりにつながった。

手元の現金に関しては、発災当時は通常の運転資金の約 1.5 週間分があった。当日のうちに理事長が銀行と交渉して緊急の運転資金を得たことは良い判断であった。発災後、地元の金融機関の機能が低下し、電子的な決済も行いにくくなったため、結局通常の運転資金の 3 週間分の現金が必要になった。必要な現金の額は、学校や取引先の被災の程度によって変わるが、学校に現金が十分にあることで、取引先が安心して売掛に応じる効果もある。

事前対策の課題と評価

仙台は周期的に宮城県沖などを震源にする M7 クラス以上の地震を経験してきた。そのため地震に対する備えや防災意識は、他の地域より一般に高いものがあった。仙台育英学園においても、リスク管理規定や対応マニュアルが作られていたほか、避難訓練や物資の備蓄なども行われていた。それでも発災時には、津波、帰宅困難、地域住民の受け入れなど、想定しきれていない事態があった。

想定外の事態に有効なのは、人や施設など経営資源の代替や提携である。仙台育英学園の場合は、宮城野キャンパスの校舎が損壊して、多賀城キャンパスの校舎が代替になった。キャンパス内の調理施設の代わりに、寮の調理施設が代替になった。これらは仙台育英学園のなかでの代替であるが、より小規模な教育機関でも、提携によって同じような代替手段を持つことが可能である。仙台育英学園でも、長期避難になった生徒が疎開した山形の施設は、学園外に依頼したものである。そのほか、緊急防災電話を準備していたことも通信手段の代替になった。緊急メールのサーバーは東京にあった。

対策に完全はないので、代替や提携をさらに行えた部分もある。たとえば、宮城野キャンパ

スで校舎に入れなくても安全に待機できる準備などである。財務的な備えとして、金融機関に災害時の融資枠を設定してもらっておく可能性もあった。また、東日本大震災には問題にならなかった点だが、もしトップが不在だったなら、彼に代わって早く適切な判断と指示をする人がいたかは不明である。

内閣府防災担当（2011）による被災地の企業への一般的な聞き取りでは、対策が不足していたと考える項目として、施設や物資の予備・代替、複数の通信手段の確保、他社との連携、訓練などをあげる声が多かった。これらの点は、教育機関にも当てはまるのではないだろうか。仙台育英学園でも、さまざまな備蓄品や防災用品の不足が課題になった。

現在のリスクマネジメント体制

震災を経て、仙台育英学園の地震リスクへの対策は強化された。現在は、あらゆるリスクを対象にした包括的なリスクマネジメントの体制づくりに取り組み始めたところである。そのような体制づくりを積極的に進めるトップマネジメントがいることは、同学園のリスクマネジメントの強みの一つである。東日本大震災の非常時対応においても、トップマネジメントのリーダーシップがよく発揮された。しかし一方で、トップマネジメントの代わりとなりうる人がいない点がリスクでもある。リスクを横断的に把握し、必要なリーダーシップを発揮できる人が増えることが、今後の体制に求められるであろう。

同学園の職員へのアンケートで注目すべき点は、さまざまなリスクに関する認識が職員の間で高く共通していることである。つまり各種リスクの発生頻度や影響度について、職務や年齢によって大きな認識の差がない。企業を対象にリスク認識を調査すると、同じ企業内でも部署によってかなりリスク認識に差が出る。つまり仙台育英学園においては、組織内でリスク認識がよく共有されていると言える。筆者が知る限りで、個人間の認識の差が最も少ない結果になった。教育機関でリスク認識の調査をしたのは初めてだが、教育機関における仕事自体が、職員間で共通する部分が多いことによるのかも知れない。また同学園では震災後の多くの転入や新人の職員を含めて、防災に関する意識や行動が、震災以前より改善している回答になっている。つまり震災の経験が、個人だけでなく組織のレベルでも教訓になっていると思われる。リスク認識が共通して、組織として学習する能力が高いならば、組織的なリスクマネジメントが効果をあげやすい可能性がある。

避難訓練など基本的な訓練はよくなされているが、さらに一步発展した訓練や防災学習も効果をあげるだろう。たとえば、臨機応変な行動をとれるように、地震のメカニズムなどリスクそのものの性質に関する防災学習、防災マップなどいざというときに役立つ予備知識の学習、シナリオから適切な行動を判断する訓練などである。

おわりに

仙台育英学園の、リスクマネジメントに関する情報を積極的に開示しようとする姿勢は特筆に値する。教育界は、リスクマネジメントの情報を共有する効果がとくに大きいと思われる。今回の研究調査で筆者が感じることは、仙台育英学園や被災地域のかたがたの、東日本大震災の経験を、将来に生かさなければ済まされないという思いである。より多くの関係者に知見が共有されることで、教育界全体のリスクマネジメントが発展することを願ってやまない。

参考文献

- 加藤聖一（2016）、「私立学校法人のリスクマネジメント」、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士論文。
- 仙台育英学園（2011）、「仙台育英学園報」、第10号。
- 仙台育英学園（2013）、「仙台育英学園報」、第12号。
- 仙台育英学園（2014）、「仙台育英学園報」、第13号。
- 仙台育英学園（2015）、「仙台育英学園報」、第14号。
- 仙台育英学園（2015）、「平成27年度 学校法人仙台育英学園 防災対応マニュアル」。
- 仙台育英学園多賀城校舎事務局（2015）、「東日本大震災におけるライフライン復旧等を見据え、関係機関への積極的な働きかけによる仙台育英学園復興の取組み」。
- 内閣府防災担当（2011）、「東日本大震災に関する企業活動への影響」、事業継続計画策定・運用促進方法に関する検討会第11回検討会資料。
- 能島暢呂（2011）、「東日本大震災におけるライフライン復旧概況（時系列編）」、土木学会東日本大震災情報共有サイト、
(<http://committees.jsce.or.jp/2011quake/system/files/110603-ver3.pdf>)。
- Cabinet Office (2010), "National Risk Register of Civil Emergencies 2010 Edition",
(https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/211853/nationalriskregister-2010.pdf) .

そのほか、仙台育英学園職員10人への聞き取りを参考にしている。



大林 厚臣 先生 プロフィール

OBAYASHI, Atsuomi

慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授 / 松下幸之助チェアシップ基金教授

1983年京都大学法学部卒業。日本郵船（株）勤務を経て、1996年Ph.D.（行政学）（シカゴ大学）取得。同年慶應義塾大学大学院経営管理研究科専任講師、1998年助教授、2006年教授。この間2000～2001年スタンフォード大学客員助教授、2001～2006年社会技術研究システム研究員、2007～2011年慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所上席研究員を兼任。

専攻分野

経済学 産業組織論 リスク・マネジメント

担当授業

経営科学 マネジリアル・エコノミクス 意思決定特論

自主研究

危機管理と事業継続 安全・安心のための社会技術 技術開発と経営戦略
情報共有と情報セキュリティ 感染症対策とバイオセキュリティ

〈第 2 部〉

学園創立 110 周年記念事業



I-Challenge 125



グローバルルーム (IB ルーム)



H&S トレーニングルーム



茶室『英松庵』



生徒寮 The House of Ikuei 111

■多賀城校舎の整備 学びと環境のリニューアル

(1) 施設・設備の更新

多賀城校舎においても宮城野校舎同様の快適な学習空間を提供すべく、照明をLEDに切り替えるとともに、黒板をホワイトボードに塗り替えました。また、生徒用ロッカーを全て更新し、空いたスペースに学習用テーブル・椅子・電気スタンドを配置しました。今では、この空間を活用して休憩時間や放課後に、自学自習や学び合う様子が見られます。加えて、全てのトイレを温水シャワー付き便座に更新し、照明を人感知型に換えたことで、一層の省エネ効果が出ています。

(2) 情報教育・探究型学習の推進

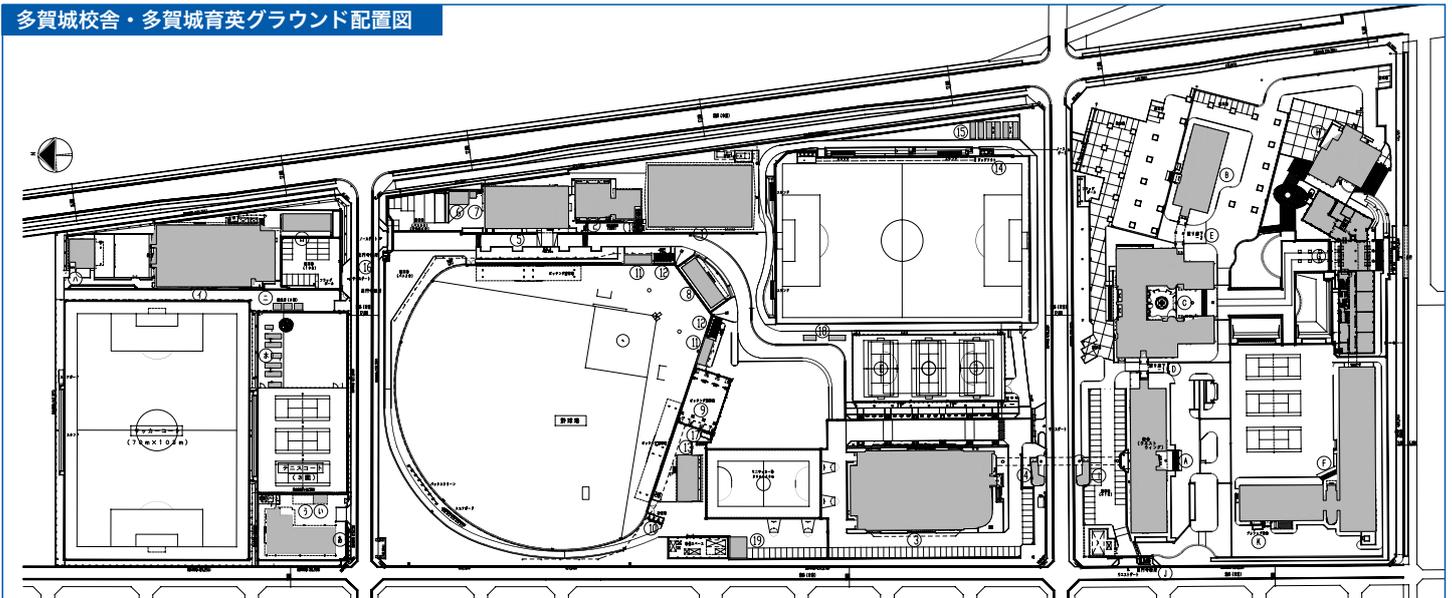
少人数・対話形式学習を推進するため、ゼミ室を13室

に増設しました。またノート型PC 40台を大会議室に配備し、充電庫で保管して活用するとともに、図書室にもPC 40台を備え、情報教室2教室を含めた情報教育環境の整備を進めています。

(3) グローバル教育の展開

東北初のIB認定校として、IBディプロマ・プログラムの充実・深化を図っています。NCホール2階にグローバルルームを新設し、IB教育機能を集約するとともに、外国人指導者を増員しています。また、自国の文化を深く知り、外国人留学生にも日本文化を理解してもらうため、茶室「英松庵」を移設し、裏千家お家元をお招きして、お茶室披きを実施しました。また、東北初となる「仙台育英孔子課堂」を設立し、異文化交流をさらに力強く発展させていきます。

多賀城校舎・多賀城育英グラウンド配置図



多目的グラウンド（サッカー場）



野球グラウンド『真勝園』

広々とした開放感を満喫できる多賀城校舎が、未来に向けて変化しました。創立110周年を迎え、知的で課題解決力を備えた文武両道の人材育成を志向する学び舎として、豊かな環境の下で快適な学習環境づくりを目指し、ハード・ソフト両面のリノベーションを様々な施策を施しました。

（4）スポーツ施設・生徒寮の整備・充実

硬式野球部の真勝園グラウンドと、サッカー部等が利用する多目的グラウンドを人工芝に換えました。また、北辰館2階に「H&S（平沢&世那）トレーニングルーム」を開設し、運動部員の体幹トレーニングに活用しています。平成28年秋には、北区に生徒寮（The House of Ikuei 111）が完成しています。

（5）安心・安全な環境づくり

自家用車等が校内に入る場合、各通用門で一旦停止や減速をしてもらう目的で、スピードウォールを取り付けました。また、熱中症対策の一環として、省エネ・災害対応型自動販売機を増設しています。

非常災害に向けての対策としては、飲料水や保存食を大

量に準備し、各校舎の廊下設置の保管庫に分散保管して、備えています。

【法人局次長 眞山 晴夫】



多賀城校舎図書室（PC）



■ ILC 青森、ILC 沖縄の開設 通信制課程の広域化

平成 10 年度から宮城野校舎に開設した仙台育英学園高等学校通信制課程は、教育拠点を青森、沖縄に拡充しながら、生徒数も 73 名からスタートし、15 年度 416 名、20 年度 431 名、25 年度 482 名、そして平成 28 年度には 684 名と着実に生徒数を伸ばし、名実ともに「広域通信制課程」と進化を遂げています。

1 教育拠点の広域化と課程名の変更 （「通信制課程」→「広域通信制課程」）

仙台育英学園高等学校通信制課程は、学校法人仙台育英学園の建学精神である「至誠」「質実剛健」「自治進取」を機軸とし、教育基本法及び学校教育法に基づき、中学校における教育の基礎のうえに、生徒の心身の発達に応じて、通信制による高等普通科教育を施すことを目的とし、平成 9 年 12 月 25 日に宮城県私立高等学校の中では唯一の通信制課程として宮城県から設置が認可されました。

その後、平成 13 年 12 月には広域通信制の認可を受け、平成 14 年 4 月に I L C 青森校開校、平成 17 年 4 月には ILC 東京校開校（平成 24 年度閉校）と広域化を進め、平成 26 年度から、宮城県・青森県・秋田県・岩手県・山形県・福島県・東京都・埼玉県・栃木県・沖縄県に在住している人が入学できるように学則を変更しました。

このように、設置当初は「通信制課程」という課程名ではありましたが、平成 13 年 12 月の広域通信制の認可以降、

広域通信制課程として歴史や実績を積み重ねてきて、さらには平成 26 年 4 月から開設した I L C 沖縄も軌道に乗り、名実ともに「広域通信制課程」として、宮城県はもとより青森県や沖縄県にも広く認知されるようになったものと認識し、平成 28 年 4 月 1 日付で、学則上の名称も「通信制課程」から「広域通信制課程」へと変更をしたところです。

なお、平成 26 年 4 月に、山形県内の広域通信制課程及び高校・秀光に在籍する生徒の学習を支援する拠点として、また、山形県内の小中学生及び保護者への本学園の広報活動の拠点として、山形市霞城公園向かいの大手門パルズ 1 階の一部を借りて仙台育英学園山形学習センターを開校し、その機能の充実を図ってきました。

2 通信制課程の特色を生かした教育の推進

中学校を卒業した新卒者をはじめ、他の高等学校からの転学を希望する生徒や中途退学者などで、学ぼうとする意欲のある人は 15 歳以上であれば誰でも出願でき、前籍校

【参考①】 広域通信制課程の入学生徒数の推移（入学生徒数は、春入学者数と秋入学者数の合計）

	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	
収容定員	320（普通科・総合学科：各160）				400（普：240・総：160）		700（普：620・総：80）			
入学者数	ILC 宮城	95	146	149	183	158	123	115	121	103
	ILC 青森	-	-	-	-	33	43	38	42	54
	ILC 東京	-	-	-	-	-	-	-	2	2
	合計	95	146	149	183	191	166	153	165	159
備考	ILC 宮城 開設			広域通信制 の認可		ILC 青森 開設		ILC 東京 開設		

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	
収容定員	700（普：620・総：80）				700（普通科のみ）					
入学者数	ILC 宮城	116	117	112	110	100	98	90	84	80
	ILC 青森	63	63	69	83	95	91	62	72	61
	ILC 東京	2	3	0	1	0	-	-	-	-
	ILC 沖縄	-	-	-	-	-	-	-	83	113
	合計	181	183	181	194	195	189	152	238	254
備考							ILC 東京 閉校		ILC 沖縄 開設	

【参考②】 広域通信制課程の在籍生徒数の推移（5月1日現在）

	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	
収容定員	320（普通科・総合学科：各160）				400（普：240・総：160）		700（普：620・総：80）			
生徒数	合計	73	181	252	341	398	416	365	370	371

（注：平成14年度～平成18年度の各ILCの在籍者数は、学校基本調査の調査項目ではなかったため不明）

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
収容定員	700（普：620・総：80）				700（普通科のみ）					
ILC 宮城	130	148	175	190	273	268	256	244	222	225
ILC 青森	258	278	326	301	213	256	226	219	187	191
ILC 東京	3	5	4	6	2	-	-	-	-	-
ILC 沖縄	-	-	-	-	-	-	-	72	161	268
合計	391	431	505	487	488	524	482	535	570	684

を含め3年間以上在学し、74単位以上の単位を取得すれば卒業できるという特色を生かし、進路指導も積極的に進め、専門学校進学はもとより大学進学も視野に入れて進路選択の拡大を図っています。

さらに、平成28年度から、通信制の課程における教育課程の特例に基づき、報告課題の添削指導や面接指導については、インターネット等を活用して行うことができるようにしました。

3 教育環境の整備

宮城野校舎内に教室等を設置しているILC宮城以外のスクーリング会場（ILC青森＝「光星学院」美保野キャンパス）、ILC沖縄＝「コザ・ミュージックタウン」「パレットくもじ」と山形学習センターは、全て賃貸借物件で、その建物も含めた施設・設備にも制限があり、恵まれた教育環境であるとは言えない状況でした。

この課題を解決すべく、平成28年度から、ILC青森

においては、週末は八戸学院短期大学の施設は借用しながらも、八戸市湊高台に取得した土地に本学園独自の建物（ILC青森校）を建築し、平日のスクーリング等を実施することにしました。ILC沖縄においても、平成28年度から、「コザ・ミュージックタウン」は継続して使用する一方、「パレットくもじ」については契約を解除して、新たに沖縄市高原に土地を取得し、そこに建物（ILC沖縄校）を建設する計画で準備を始めたところです。なお、ILC沖縄校の完成までは、那覇市泉崎にある建物の一室（那覇学習センター）を借用し、スクーリング会場として使用する計画です。さらに、山形学習センターについても、山形市旅籠町に取得した土地に、本学園の独自の教育施設を建築し、平成28年10月から使用を始めています。

（注）ILC：Ikuei Gakuen Learning Centerの略称

【法人局長 高橋 泰】



■石巻教育連絡事務所の開設 通学と学習の拠点が誕生

震災発生から1年半後、「石巻教育連絡事務所」が開設。石巻地区にシャトルバス運行の拠点が誕生し、通学生のかげがえのない足となりました。毎週土曜日には学習室がオープンし、自学自習のための学びの場を提供してきました。

石巻シャトルバスのステーション 自学自習のための学習室がオープン

東日本大震災により、石巻地域を走行する「仙石線」「石巻線」は甚大な被害を受け、通学のための足の確保が震災直後の大問題でした。シャトルバスの臨時運行、JR代行バスの利用、保護者による送迎等、震災発生から1年半後に「石巻教育連絡事務所」が開設され3台の大型シャトルバスが常駐するまでは、大変な不便を強いられました。シャトルバスは、仙石線や石巻線が全線復旧されるまでの約4年間、通学のためのかけがえのない足となりました。

また、石巻教育連絡事務所は、シャトルバスのステーションとして機能するだけでなく、シャトルバスを利用する生徒に対し自学自習のための学びの場を提供してきました。毎週土曜日の午後2時30分から6時30分までの4時間、事務所2階に学習室がオープンし、生徒たちの自学自習を支援するという役割を担ってきました。

石巻教育連絡事務所の今 そして、これから・・・

仙石線・石巻線が全線復旧し、シャトルバス利用者は減少傾向にあります。本年度より、常駐するシャトルバスは2台に。しかし、通学する生徒にとって、シャトルバスは依然としてかけがえのない足であり、学校での生活スタイルに応じ、生徒それぞれが有効利用しています。

学習室については、昨年度から対象をシャトルバス利用者に限定することなく、広く石巻地区から通学している生徒であれば、個人でもグループでもだれでも自由に利用できるようにしました。学習室は、学習用図書や進学情報誌などを閲覧できるほか、インターネット利用可能なパソコンを設置し、冷暖房も完備しているなど、自学自習の場としての積極的な利用を呼びかけています。

石巻教育連絡事務所は、「シャトルバスのステーション」「自学自習のための学びの場の提供」というねらいとともに、石巻地区保護者との教育相談の場として、また石巻地区小・中学校への情報発信、小・中学生との進路相談の場としても有効に機能しています。

今後とも仙台育英学園と石巻地区とを結ぶ教育の拠点として、存在感をしっかりと維持していきたいと思えます。

【石巻教育連絡事務所 川名 宏志】



■山形学習センターの建設 教育拠点の充実及び広域化

教育拠点の充実及び広域化という観点から、宮城野校舎及び多賀城校舎の整備・充実を中心にして平成26年度にはILC沖繩の開校と山形学習センターの開設を果たしました。そして、平成28年度9月には、本学園独自の教育施設として、山形学習センターを建築しました。

1 山形学習センターの開設

平成26年4月14日、山形県内の広域通信制課程及び高校・秀光に在籍する生徒の学習を支援する拠点として、また、山形県内の小学生及び保護者への本学園の広報活動の拠点として、山形市霞城公園向かいの大手門バルズ（山形市木の実町12番37号）の1階の一部を借りて仙台育英学園山形学習センターを開設しました。

開設の主たる趣旨等は以下のとおりです。

- ①宮城野校舎に設置している広域通信制課程に通学している山形県内在住の生徒たちが気楽に通える学習拠点（毎週土曜日に、レポート作成等に利用できる施設）とする。
- ②秀光中等教育学校や仙台育英学園高等学校への進学を目指す山形県内の小中学生やその保護者の方々が気軽に利用できる相談窓口とする。
- ③秀光中等教育学校や仙台育英学園高等学校の様子（入試制度や教育内容の特色、卒業生の大学進学状況等）を山形県内の小中学校の先生方に紹介する情報発信基地の機能を果たす。

④山形学習センターには、山形市内の公立中学校での勤務経験のあるベテラン教師を常駐させる。

2 父母教師会山形支部の設立

本学園父母教師会は、秀光中等教育学校部と高等学校部の二部制になっており、さらに、宮城県内の地区ごとに支部を組織して活動しています。

平成27年7月4日、それまで県外には父母教師会の支部組織はありませんでしたが、山形学習センターにおいて、山形支部の発足総会を開催しました。総会には、山形地区の保護者17名、本学園から理事長・校長先生と父母教師会長をはじめ教職員12名、そして、秀光オーケストラ部員5名が参加して、盛大に発足総会を開催しました。

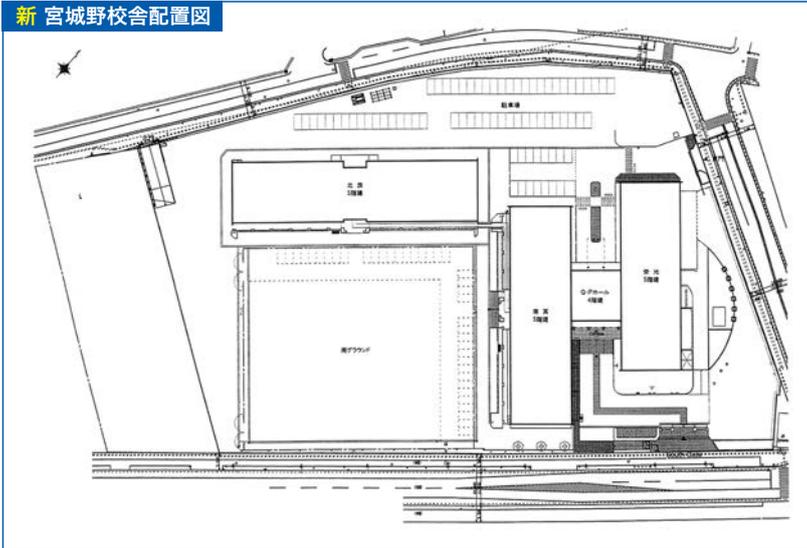
今後、山形学習センターが父母教師会山形支部の活動拠点として大きな役割を果たしていくことが期待されています。

3 山形学習センターの建設

平成28年6月1日、山形市旅籠町1丁目205番に新しく本学園独自の教育施設を建設すべく地鎮祭を挙行了しました。平成28年9月までには完成・移転完了し、同年10月から新たな山形学習センターを開所しました。なお、新しい住所は、山形市旅籠町1丁目1-1となりました。

【法人局長 高橋 泰】

新 宮城野校舎配置図



旧 宮城野校舎配置図



■宮城野新校舎完成 学園復興の象徴、宮城野に

仙台育英学園東日本大震災復興計画が進行する中、平成25年3月24日、宮城野新校舎の竣工式を迎えることとなりました。大震災の被災から2年での驚異的な早さでの完成は、まさに学園復興の象徴。奇しくも、この日は学祖加藤利吉先生の52回忌に当たります。利吉先生の精神が本学園に生きていることの証でもあり、「逆転の仙台育英」を旗頭にした不撓不屈の歩みが新たにこの日から力強く始まりました。

本学園は、平成23年3月11日（金）発生の東日本大震災及びその後の度重なる余震、特に4月7日の最大余震により宮城野校舎5棟に甚大な被害を受けました。本震災後、直ちに専門家に診断を受けたところ、被害状況の大きさに加えて経過年数による劣化も進んでいたため、今後の使用は困難と指導・助言を受け、使用中止としました。その後、更に建築士等の専門家の分析結果を踏まえて、5棟（栄光・記念1号館・南冥・第一・二北辰）全てを改築対象としました。

被災した宮城野校舎の原状復旧に係る改築・多賀城校舎の大規模修繕を一日でも早く現状復帰させるため、国・県を始め多くの関係各位のご指導・ご援助を賜り、建築資材の不足・人件費の高騰等の中、本学園の復興事業に全力で取り組みました。その結果、翌年の平成24年1月23日（月）には宮城野校舎地鎮祭が行われ、続く平成25年3月24日（日）に宮城野校舎の竣工式を迎えることができ、被災後2年という早い期間で生徒の学舎となる新校舎完成

となりました。

【法人局次長 菅原文男】

復興への歩み

- 2011.3.28 文部科学省高等教育局私学部行政課が宮城野校舎視察
- 2011.4.5 宮城野校舎・多賀城校舎の被害状況調査
- 2011.5.9 文部科学省請願（東日本大震災の被害に関する要望書）
- 2011.5.30 仙台育英学園東日本大震災復興計画作成（第1次）
- 2011.6.8 仙台育英学園東日本大震災復興計画提出（文部科学大臣宛て）
- 2011.8.2 仙台育英学園東日本大震災復興計画作成（第2次）
- 2012.1.23 宮城野校舎地鎮祭
- 2012.9.19 宮城野校舎上棟式
- 2013.3.24 宮城野校舎竣工式

《宮城野校舎（旧）名称・面積》		《宮城野校舎（新）名称・面積》	
栄光	5,246㎡	栄光	5,007㎡
記念1号館	2,338㎡	南冥	6,611㎡
南冥	2,793㎡	北辰	5,614㎡
第一北辰	2,804㎡	GPホール	548㎡
第二北辰	2,220㎡		
その他	567㎡		
計	15,968㎡	計	17,780㎡



ICT 教育環境の整備 125周年に向けた教育の挑戦

情報教室（WIN 教室）、図書室、多賀城校舎 NC ホールを中心とした PC 配備が完了しました。ハードウェアの整備に留まらず多様な教育アプリケーションを積極的に導入し、学園創立 125 周年に向けた ICT 教育環境の整備が進みます。また生徒の健全な ICT リテラシー育成のため「ソーシャルメディアを利用したいじめ防止に向けた活動」が学園と父母教師会で締結されました。

高度 ICT 化に伴う利便性向上の一方で、コミュニケーションツールの複雑化とその弊害が見受けられるようになってきました。2016 年 3 月には囲碁 AI「AlphaGo」がプロ棋士イ・セドル氏に勝利し、学園創立 110 周年を迎えた現在は新しい時代への過渡期といえます。

学園ではこのような時代の激しい流れの中で、私学の雄として国内のみならず海外でも通用するような ICT 教育環境整備・拡充や健全な ICT リテラシー育成を創立 125 周年に向け目下進められています。

ハードウェアの面では、情報教室（WIN 教室）のみならず、両キャンパス図書館や多賀城校舎 NC ホールへの PC 配備を行い、生徒がより主体的に情報へアクセスが出来る環境を整備しました。創立 125 周年に向け一部コー

スや秀光では進められていますが、今後も寮を含めた PC 配備、WiFi 環境の整備・拡充、そしてタブレット配備による教育支援を推進していきます。

ソフトウェアの面では、様々なアプリケーション（特進コース・情報科学コース・秀光では Classi、外国語コース・秀光では Managebac）を試験的に活用し、課題提出・連絡手段・成績状況確認・学習サポート等の一人ひとりにあった教育を提供可能な体制構築が整えられつつあります。そして法人では諸手続きの ICT 化が現在進められ、安心かつ簡便な手続きサービスを保護者に提供できる環境構築を進めています。また学園生活をより多くの人々に知って頂く一環で、学園 HP の変更、様々な動画・画像の掲載やソーシャルメディア（Facebook、Twitter、YouTube）の活用が進んでいます。

健全な IT リテラシー育成の面では、各コース及び秀光のそれぞれでソーシャルメディアの使い方に関する講座が年に一度実施されています。2016 年 5 月には父母教師会と「ソーシャルメディアを利用したいじめ防止に向けた活動」に関する共同宣言が締結され、学園、教職員、保護者が共に生徒の健全な ICT リテラシー育成に努力していくことが確認されました。

【常務理事（学園情報電子化担当責任者） 加藤 聖一】



■秀光の宮城野校舎への位置変更 創立者の夢、実現に向けて

(1) 中高一貫教育の成果の継続と きめ細かな教育の充実のために

本学園は、戦前・戦後を通じて、仙台育英学校（T2）、東北高等予備校（T3）、仙台育英中学校（T11）、仙台育英高等学校（S23）、仙台育英中学校（S23）、仙台育英商業高等学校（S30）、仙台育英学園高等学校（S37）、仙台育英学園秀光中学校（H8）等の変遷を経て、7万人を超える卒業生を輩出するなどして、一貫して本県はもとより東北・関東地区を中心に中等教育の振興・発展に寄与してきました。

特に、平成14年度に秀光中等教育学校（以下、秀光）の設置申請をした際に提出した設置趣意書の中には、「生徒の将来や保護者の要請を踏まえ、6年間の計画的・継続的な質の高い教育指導の中で、一人ひとりの個性を伸ばす建学精神に基づく人格の養成とあらゆる分野で国際的に活躍できる能力と技能を培い、知・情・意を兼ね備えたリーダーの育成を目標とする」と記しています。

秀光設立後、この目標の達成を目指し、Language, Music & Scienceをテーマとし、6年間の見通しを立てた教育課程を編成するなどして、計画的・継続的に質の高い教育指導を進めてきた結果、関東・東北地方の難関国公立大学に大量の合格者を輩出するなど進路指導を中心に大きな実績を挙げ、県内外の人々・保護者・同窓生等からの

信頼を積み重ねてきました。

一方、2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城野校舎の復興（新校舎の建設完成）と併せ、創立110周年を迎えるこの時期に、さらなる学校改革を推進し、一人ひとりの生徒たちにきめ細かな教育を実施するために、設立当時から継続してきた収容定員を減員（1学年120人合計720人から1学年80人合計480人に減員）することが必要ではないかという結論に至り、平成26年4月23日付で、「収容定員に係る学則変更申請書」を提出しました。

そして、さらなる学校改革を推進し、中高一貫教育を通して、一人ひとりの生徒たちにきめ細かな教育を一層充実するために、平成27年4月1日をもって、多賀城校舎から宮城野校舎への全面移転を実施するという秀光の「位置変更届」を宮城県私学文書課に平成26年7月18日付で提出しました。

(2) 仙台育英学園高等学校特別進学コース （以下、特進）とのコラボ学習の一層の 充実による進路実現の達成のために

本学園では、従来から難関国公立大学への進学という共通の進路目標を持つ秀光と特進とのコラボレーションによる課外活動（コラボ学習）を取り入れてきており、この



平成24年度、中等教育学校の存廃を含め今後の学園の在り方を模索する中で、平成27年度に宮城野校舎が整備完了（東日本大震災からの復興完了）することに伴い、新たな仙台育英学園の再出発の契機とすべく、秀光をそれまでの多賀城校舎から宮城野新校舎に移転するという基本的な理念を設定し、そこから移転準備が始まりました。

コラボ学習から大きな成果を得てきています。具体的には、「サイエンス・コ・ラボ」（放課後に実施する東北大学及び大学院の先生方による秀光後期課程と特進の生徒に対する理科の共同実験講座）などが挙げられます。秀光が位置変更した後も、コラボ学習を継続・充実させ、より多くの生徒の進路実現の達成を目指しています。

(3) 通学区域の変更による秀光の活性化のために

学校の位置を多賀城市から仙台市に位置変更することは、主たる通学区域を石巻・塩釜・多賀城地区から仙台市に変更することを意味します。

これは、近年の少子化傾向や東日本大震災後の経済状況や交通事情等により、従来の石巻・塩釜・多賀城地区では秀光への入学者数の減少傾向に歯止めがかからないと判断し、通学手段のより便利な仙台市に位置変更することにより通学区域を拡大し、入学者数の増加による活性化を目指したいと考えました。

【法人局長 高橋 泰】

《仙台育英学園 秀光中等教育学校の変遷》

（戦前）

- M 38 私塾「英育会」
- M 39 「育英塾」
- T 2 「仙台育英学校」
- T 3 「東北高等予備校」
- T 8 （財団法人東北高等予備校）
- T 11 「仙台育英中学校」開校（財団法人東北育英義会）

（戦後）【学制改革】・私立学校法の施行

- S 23 仙台育英高等学校の開校
- S 23 仙台育英中学校の併設
- S 26 （学校法人仙台育英学園）
- ↓
- S 31 仙台育英中学校の閉校
- H 8 仙台育英学園秀光中学校の開校
- ↓
- H 14 仙台育英学園秀光中学校の閉校（設置期間7年間）
- H 15 秀光中等教育学校の開校
- ↓
- H 27 秀光中等教育学校の宮城野校舎への位置変更
（設置13年目、秀光中開校から20年目、学園創立110周年）



■各コースの教育課程等の改編 コースの改編・新設

開校以来、これまで、教育課程等の変遷をみると、総合コース化、男女共学化、通信制課程の開設、中等教育学校の開校など、時代の変化に即応しながら改編・新設を経てきました。特に、東日本大震災後の5年間は、コースの特色をさらにブラッシュアップしながら、創意工夫のある教育課程の編成となっています。

東日本大震災で宮城野校舎は壊滅的な被害を受け、臨時休校・疎開学習・暫定授業で対応してきましたが、仮設校舎が暫時整うに伴い、最終的に宮城野校舎に設置された仮設校舎は、Mフレックスコースが使用し、特別進学と英進進学コースⅡ類の2コースは多賀城校舎への移転措置を取りました。一方、多賀城校舎は、授業で使用することが可能であったものの、宮城野校舎の2コースが移転となったため教室が不足し、仮設校舎の設置や他施設の借用等に対応しました。その後、平成25年2月、新校舎完成及び仮設校舎解体と校地の更地整理に伴い、宮城野校舎で学ぶMフレックスコースの生徒は多賀城校舎での授業となりました。

そして、平成25年3月24日、宮城野新校舎の竣工式が行われ、同年4月9日には宮城野新校舎で開校式を迎えました。

施設等の教育環境整備と並行して、コースの新設等教育

課程の改編を行い、平成25年4月1日、Mフレックス（専門学校も視野に入れた進学型の単位制：宮城野校舎）とTフレックス（部活動に集中できる総合選択型の単位制：多賀城校舎）の2コースの生徒募集を停止し、多賀城校舎に新たにフレックスコースⅠ類（Tフレックスを継承）・Ⅱ類（Mフレックスを継承）の2コースを設置しました。さらに、平成26年4月1日には、フレックスコースⅠ類をフレックスコースに、同じくⅡ類を専門的職業教育に重点化した技能開発コースに改称しました。

また、平成26年4月1日には、英進進学コースⅠ類・Ⅱ類の名称を改めました。英語力に力点を置いた英進進学コースⅠ類を英進進学コースとし、情報教育に重点化した英進進学コースⅡ類を情報科学コースとしました。なお、それ以前の英進進学コースの変遷を辿ると、平成3年4月1日に英進コース（男子）として設置され、その後平成4年4月1日には男女共学となり、平成15年4月1日に英進進学コースとなっています。そして、平成22年4月1日には、新たに英進進学コースⅡ類を開設し、従来の英進進学コースを英進進学コースⅠ類と改称しています。

現在の各コースは、平成26年4月1日に改編されたコースを継承し、各コースの特色をさらに創意工夫しながら教育課程を編成しています。

【多賀城校舎事務局長 阿部 英伸】



I-Lion Hawaii School ILHA が教えてくれたこと

2010年（平成22年）にスタートしたI-Lion Hawaii School（通称ILHA）研修は、東日本大震災に左右されながら、唯一無二の“特別な学校”として進化して来ました。グローバル化による教育制度の大きな変革の渦中にある今、ILHAの教えはハワイを超えて、学園のキャンパスで大きく花開こうとしています。

2010年10月1日、ハワイの慣習に従い、伝統的祈祷師であるカフナの祈りによりILHAは誕生しました。ILHAは、学園の教育理念である“グローバリゼーション”の集大成として、ハワイに学校を創るという壮大な試みでした。そのミッションは、未来を生きる“グローバル・シチズン”を育てると言うシンプルなものです。その為、特定の知識や技能では無く、ある“心がまえ”が必須と考え、身につけるべき5つの資質として（1）Open Mind、（2）Curiosity Seeking、（3）Risk Taking、（4）Communication Skill、（5）Non Judgmentalを定めました。生徒は2～4週間にわたりホストファミリーと過ごし、ハワイの風光明媚な自然とマルチ・カルチャーな街で、アクティブ・ラーニングを通して5つの資質を身に付けて行きます。生徒が、明るく、逞しく、劇的に変わっていくのは、“アロハ・スピリット”などと言う漠然とした中では無く、ILHAが磨き上げた硬質な教育哲学と方法論の賜物なのです。

この原稿はオバマ大統領の歴史的な広島訪問の翌日に

書いていますが、真珠湾研修はILHAのハイライトの一つです。生徒は、立場が違えば認識や意見が違う事、相手の立場に立てば物事は違った姿に見える事、そして人にはそれぞれの正義があり互いに譲れない時もある事を学び、それでも平和を築く方法を徹底的に考えさせられることとなります。そして、頭で理解していても、日本人として真珠湾を訪れる「いづい」感じを直に体験します。“グローバル・シチズン”とは、相互連結性と文化、文明間の軋轢が増える未来で、異なる倫理観や価値観を受け入れる賢さと寛容さを持ち、平和でより良い世界を築くため、互いに共有できる価値を勇敢に探究する人の事です。オバマ大統領が広島訪問で見せたハワイ出身者らしい「したたかなしなやかさ」を生徒に身に付けさせるのがILHAの最終目標なのです。

ILHAは諸般の事情により、現在は規模を縮小して実施されています。ILHAの今後に関し聞かれますが、それほど重要な事ではないでしょう。ILHAの教えは、体験した先生方により、国際バカロレアや留学生受け入れを通して、日々の学習環境の中に既に取り入れられています。昨今の急激な教育のグローバル化には、これまでに無い強い逼迫感を感じます。グローバル教育に懐疑的な人は、多賀城校舎のグローバル・ルームの様子を見に来て頂きたいと思います。好き嫌いに関わらず、未来はきっとこうなると感じるはずです。

【国際センター所長 尾形 淳】



サイエンス・コ・ラボの展開 科学への探究心を深める

創立110周年を迎えるに当たり、加藤理事長校長先生が掲げられた宮城野校舎のスローガンは、「Language, Music & Science」。この「Science」の部分を実現化しているのが、サイエンス・コ・ラボです。

この企画は、東日本大震災の翌年、宮城野新校舎が完成する前年に、他校に類を見ないコンセプトのもとに東北大学のご協力を得て実現しました。当時、この企画の立案・実施に尽力された千田芳文副校長先生の文を下記に引用させていただきます。

「そのねらいは、東北大学理系学部の教授・准教授を中心とした外部専門家の指導を受けながら、高校の学習指導要領を超えたレベルの理科実験・実習等の活動を行うことで、理科系の専門職（研究者・技術者・教育者等）を志している生徒の科学への視野を広げ、探究心を深めていこうとするものである。

実験テーマは、現在最も身近な問題である放射線を取り上げたものからノーベル賞受賞分野の研究まで、極めて幅広いジャンルとなっており、指導に当たられた大学の先生方にはかなりのご苦心をいただいて、高校生が興味を持って取り組めるような企画を練っていただいた。

通常の出前授業や課題研究講座とも異なる、こうしたスタイルの講座は他にあまり事例もなく、試行錯誤のスター

トとなったが、加藤校長先生の先進的発想と学園当局の全面的支援に支えられて半年の間に7講座のべ8回も実施することができ、また参考モデルがないだけにかえって創造的な取り組みができたともいえる。」

このようにしてスタートしたこの企画も、年々工夫を重ねられたものになっています。そこで、2015年(平成27年)度に実施した概要を以下に簡単に紹介します。

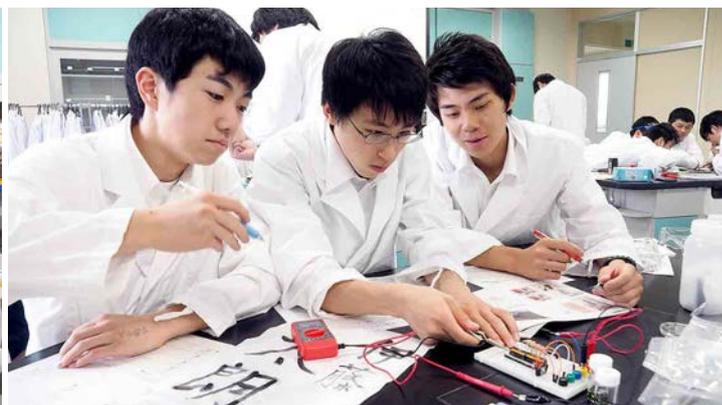
* * * * *

第1回 「天然ビタミンEの分離回収実験」 東北大学大学院 工学研究科化学バイオ系 准教授 北川 尚美 先生

北川先生が開発された吸着剤として作用する個体粒子を用いて、天然には非常に低い濃度(0.1%程度)でしか存在しないビタミンEの分離・回収を行う。

第2回 「酵素でバイオ発電」 東北大学大学院 工学研究科機械知能系 教授 西澤 松彦 先生

ナノサイズの墨汁を使った導電性インクを制作し、それを吸着させた導電性和紙をつくる。さらに、それに自然界か



■サイエンス・コ・ラボ 2016年度の予定

開催日	講師ご氏名	講座名
6月25日(土)	教授 西澤 松彦 先生	酵素でバイオ発電
7月2日(土)	准教授 北川 尚美 先生	最先端技術を使ってバイオ燃料を作ってみよう
9月24日(土)	助教 小俣 乾二 先生	分子のキラリティと旋光性の実験
10月15日(土)	助教 横山 俊 先生	プリントドエレクトロニクス用の導電性ナノインクの合成と分析
10月29日(土)		
11月5日(土)	教授 珠玖 仁 先生	三次元培養法
12月10日(土)	教授 関根 勉 先生	霧箱を用いた自然放射の観察

「科学の実験とは、自然との対話である」(寺田寅彦) この“対話”のしかたを実際に体験し、その面白さを一流の先生から学ぶことができる。これが、「サイエンス・コ・ラボ」各講座の醍醐味といえます。高校理科の先にある専門領域の広がりや垣間見るきっかけにもなっています。

ら抽出した2種類の酵素を吸着させ、正極と負極として機能する和紙電極を作成する。その電極を使い、いろいろな溶液に含まれるグルコース量を測定する。

第3回 「分子のキラリティと旋光の実験」 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 助教 小俣 乾二 先生

分子模型を使い不斉炭素を持つ乳酸などの化合物を組み立て“対掌性”について理解する。その2タイプの物質が光を右または左に旋光させる性質を持つことから、自作の旋光計を作り、2タイプのリモンネンについて旋光度を計測する。逆に、旋光度からその物質が溶液中に存在する割合を推測する。

第4・5回 「燃料電池用ナノ触媒の合成と機器分析」 東北大学大学院 環境科学研究科 助教 横山 俊 先生

先生が開発されたナノサイズの銅粒子を自分で合成し、正・負に帯電した電極を作成する。それを使い基板上に微小な配線を作成し、5回目は東北大に伺って電子顕微鏡を用い確認する。

第6回 「霧箱の制作と自然放射線の観察」 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授 関根 勉 先生

放射線の航跡を観察できる霧箱を自作し、いろいろな自然界の物質が出す放射線を観察する。モデルを用いて放射性元素の半減期について理解する。

第7回 「酵素反応で幹細胞を染色する」 東北大学大学院 工学研究科 准教授 珠玖 仁 先生

細胞を殺すことなく染色しかつ分化の程度を示すアルカリフォスファターゼという酵素を用い、ES細胞・がん細胞・心筋細胞を染色し、逆に染色の程度の違いからこの3種類の細胞の分化の程度の違いを観察する。

そして2016年(平成28年)も、先生方の全面的なご協力のもと上に示す日程と内容で、サイエンス・コ・ラボが開催される予定です。前年とは違った切り口からの講座になっており、ますます、生徒の好奇心と探究心を喚起していただけるものと思います。

【特別進学コース(教科コンダクター) 須藤 亨】



■ MOS 資格、情報処理検定への取り組み 情報ライセンス取得への挑戦

情報科学コースでは、充実した施設設備が整ったWIN 教室でのパソコン授業において、グローバルライセンス（国際的認定資格）であるMOS（マイクロソフト オフィス スペシャリスト）、情報処理検定を中心に展開しています。MOS 世界学生大会日本代表一次選考入賞や資格合格者の年々増加など、内容が充実してきています。

情報科学コース情報科目の授業では、WIN 教室でのデスクトップパソコン実習授業において、グローバルライセンス（国際的認定資格）であるMOS（マイクロソフト オフィス スペシャリスト）、情報処理検定、メディア系ソフト分野としてのホームページ制作等を3本柱にして展開しています。MOS とは、世界中のビジネス分野で最も使われているマイクロソフト社の「Office」（ワード、エクセル、パワーポイント等）をどれだけ使いこなせて、機能を知っているかという能力を証明する資格認定制度で、本校は東北地方の普通科高校で唯一の受験認定校であります。情報処理検定は、全国商業高等学校主催の検定

試験であり、コンピュータ知識や表計算・データベースソフトウェアの知識・技術について筆記と実技から出題されている試験です。

WIN 教室は、校長先生のご配慮で施設設備を充実させて頂き、快適な授業展開ができております。MOS 資格、情報処理検定資格の授業では、昨年からはまった情報科 Brush Up 研修をはじめ、合格者も年々増加し、徐々に内容が確立してきております。授業はクラス単位の他に、学習習熟度別に編成したユニット式学習を導入し、実習アシスタント教員と共に指導しています。昨年は、MOS 世界学生大会において、延べ4万7千人の中から日本代表一次選考1名、今年は二次選考対象の2位1名と一次選考1名が入賞しました。資格は一生の財産であり、取得は自信につながると思います。

今後も生徒一人一人のポテンシャルを引き出せるよう教科指導に努め、また、コンピュータを通してバランス良く考える力を授業の中で育めるよう研鑽を積み、日々励んでいきたいと思ひます。

【情報科学コース教諭 日野 彰】

MOS ・ 情報処理検定 合格者数

年 度	MOS	情報処理検定
平成 25 年度	Excel 2010 35 名 Power Point 2010 12 名	第 1 級 (ビジネス情報部門) 5 名 第 2 級 (ビジネス情報部門) 19 名 第 3 級 53 名
平成 26 年度	Excel 2010 55 名 Excel 2010 Expert 4 名 Word 2010 9 名 Power Point 2010 15 名	第 1 級 (ビジネス情報部門) 9 名 第 2 級 (ビジネス情報部門) 59 名 第 3 級 68 名
平成 27 年度	Excel 2010 27 名 Excel 2010 Expert 7 名 Word 2010 Expert 3 名 Power Point 2010 17 名	第 1 級 (ビジネス情報部門) 14 名 第 2 級 (ビジネス情報部門) 79 名 第 3 級 65 名



12 ■情報科学コースでのICT教育の取り組み グローバルライセンスの取得

最新の設備が整った宮城野校舎で、専門的なIT関連の知識や技術を学び、マイクロソフト オフィス スペシャリストなどの情報処理のグローバルライセンスに挑戦！ 情報以外の授業でも、ノートパソコンを利用した授業を展開します。

平成26年4月から「情報科学コース」が宮城野校舎でスタートしました。実際には、平成25年4月入学生から先行実施を行ってきていました。

コースの主なねらいと特徴は

- 1 グローバルライセンス（マイクロソフトオフィス スペシャリスト）（MOS）の資格取得
- 2 生徒一人一台のノートパソコンの普通教科での活用
- 3 高大連携、高専連携による模擬講義と体験学習の実施
- 4 科目「卒業制作」（学校設定科目）の設定
- 5 フェイスブックの立ち上げ
などがあげられます。

1については、科目「グローバルライセンス」（学校設定科目）を1年生から3年間毎年2単位を学習することとしました。24年度までの入学生は、2年生からしかMOS試験を受けられませんでした。これにより平成25年度入学生は1学年から受験できるようになり、すでに在籍の半数以上の生徒がExcel 2010の資格を取得しています。

2については、各教室で情報の科目以外の授業で使用しています。教員はノートパソコンを有効活用できるよう研修や工夫、ソフトの入手に努力しています。また、生徒は総合的な学習の時間や体験学習の発表をパワーポイントを利用して行っています。なお、情報の授業は情報処理室（Win1、Win2）のデスクトップパソコンを使用しています。

3は、会津大学（コンピュータ理工学部）、東北文化学園大学（知能情報システム学科）、東北芸術工科大学（デザイン工学部）、デジタルアーツ仙台専門学校と連携し、大学教授による模擬講義や大学施設を利用した体験学習、専門学校講師による3Dゲーム制作の出前講座受講を実施しています。

4は、2年間資格取得などに力点を置いた授業でしたが、ホームページ制作とホームページビルダー応用を学ぶことにより、コミュニケーションツールとして自在に活用できるコンピュータ技術の習得を目指しました。

5については、コースの生徒の活動の様子を多くの方に知っていただきたく始めました。コメントやアップはパソコン部の生徒たちが行っています。また、昨年度は写真を掲載していましたが、今年度からは動画も載せています。「仙台育英情報科学コースフェイスブック」または記載しています「QRコード」で検索していただき、是非一度アクセスしてください。また、ご意見がありましたらコメントを頂きたいと思っております。

このように、「情報科学コース」では情報科学に特化した取り組みができるよう、施設設備の充実を校長先生にいただいたおかげで、情報やコンピュータに興味関心を持った生徒が多く入学してくれるようになってきました。この3年間は毎年20名ずつの増になりました。

また卒業後は3年間で学んだ情報科学のスキルを、より専門的で高度な大学や専門学校に進学し、さらなるスキルアップを目指しています。

今後、仙台育英学園高等学校の最も特色のあるコースとさせていただけるように生徒・先生が一丸となって頑張っていきたいと思っています。



情報科学コースフェイスブック 【情報科学コース教頭 佐藤 正行】



国際バカロレア IBDP 導入について IBDP 授業開始

1 IBと仙台育英学園

平成27年4月から仙台育英学園高等学校は外国語コースに東北地方で初めて国際バカロレアディプロマプログラム（IBDP）をデュアルプログラム（注）で導入いたしました。現在、（平成28年4月）IB生は時代を先取りした近未来的な真新しいオープンスペースで、2期生がIBDPの学習を開始しており、1期生は今年度の卒業試験に向けて寝る間も惜しみ勉強に励んでおります。

思えばIBを導入する環境が仙台育英学園には整っていたということです。IBの理念のひとつに“International-mindedness”がありますが、本校の教育方針と共通しております。本学園初代校長である加藤利吉先生は仙台育英学園の前身である育英塾を創設する際、「戦争のない世界を作らなければならない。そのためには一民族の繁栄だけを願うのではなく、もっとグローバルな目をもって世界を見て活躍できる人材をたくさん育てるべきだ（「ほえろ！ライオン先生」より）」と考えられました。以来、本校はグローバル・シチズンを育成することを教育方針のひとつにしてきました。何十もの姉妹校を世界中に持ち、たくさんの留学生を受け入れ、そして海外に多くの生徒を送り出しております。また、本校のハワイ校であるILHAの特性はIBの使命、学習者像のそれと共通のものがああります。そして本校の建学の精神や生活信条とも共有している部分がたくさんあります。

（注）IBDPは本来英語だけで学ぶ教育プログラムですが、日本で普及させるために一部科目を日本語で教授することが認めら

れました。本校ではEgnlish A、Bと芸術以外の教科目を日本語で受講できます。

2 協働作業

IBは教員、生徒の協働作業を重視します。IBは6つのグループの教科群とコア科目（TOK、CAS、EE）から構成されたプログラムです。コア科目はいわば教科横断的科目です。それぞれのグループの教科担任は自分の教科とコア科目の接点を考えながら授業を計画することが求められます。IBの使命や学習者像、そしてTOK（知の理論）やCAS（創造性、活動、奉仕）の精神をいかに教科横断的に各教科の授業の中に取り込み、発展させていくかということも考えていかなければなりません。必然、教員間の話し合いが必要になり、授業の計画段階、実施段階、見直しの部分で教科の枠にとらわれずどのように教科同士が連携していくべきか考えなければなりません。IB担当教員は週1回ずつ会議を持ち話し合いを進めてきました。お陰様でベリフィケーションビジットではIBから派遣された点検担当のスタッフから、教科担任同士の話し合いのもとでIBのプログラムの導入計画が立てられたことが評価されました。

3 学習者中心の授業

IB授業のもう一方の大きな特徴は生徒中心であるということです。講義形式ではなく生徒自身が考え、探究し、発表しながら授業を進めていくことが求められます。生



21世紀型教育プログラムIBDPを仙台育英学園が東北で初めて導入しました。世界市民の育成を教育方針に掲げて来た本校ならではの英断でした。仙台育英出身のグローバル人材が世界で活躍する日が遠からずやって来ましょう。

徒が個人で、グループで、そしてクラス全体で様々な形態をとりながら授業を行います。従来の講義形式とは異なった形で授業を計画しなければならないので、当初アクティブラーニングについてIB担当教員のミーティングでは多くの時間を割きました。日本人教員にとってはコペルニクス的転回といってもいいほどの大きな変化で、その考え方に慣れるのにも時間を要しました。ジム先生やテッド先生などOC（Oral Communication）の先生方に指導してもらいました。

4 形成的評価

評価も大きな課題です。IBの試験はIA（内部評価）とEA（外部評価）があります。EAはIBが実施し、IAは校内の教科担任とIBが評価をします。それらに加えて形成的評価があります。これは授業の中で生徒の理解度や、やる気などを評価するもので成績には反映されず生徒の学習や教員の指導方法のフィードバックに用います。様々な形成的評価方法や実施方法があります。学習者中心の授業と同じように日本人の教科担当者にとって新しい考え方なので、これから授業を実施するにあたり、IB授業担当者全員で実践研究を進めていかなければならない分野です。

5 課題と可能性

仙台育英学園は東北・北海道で唯一のIBDP校として認可を受け、現在（平成28年度）2期生もプログラム

を学び始めました。この世界標準の先駆的プログラムの導入を決断された加藤雄彦校長先生のご慧眼に驚嘆を禁じえません。またIBの基準に合わせるために施設設備を整えていただいたり、参考書をはじめ物品の購入に予算を割いていただいたりしていることに深く感謝いたします。

本校のIBのディプロマプログラム（IBDP）は小規模でスタートしました。2期生の特徴は16名全員がfullでプログラムを選択し、半分以上を留学生が占めているということです。全国でも類を見ないほど多数の中国、韓国、インドネシアからの留学生がいることから留学生もプログラムを学べるようにしていきたいと考えています。さらに、秀光中等教育学校でMYPを導入することから、仙台育英学園のDPも新たな可能性が出てまいりました。ハイアーレベル理系科目の導入や、選択できる科目数を増やしたり、日本語で行う科目を英語でも提供できるようにしたり、さらにオプションを増やすようにしたりしたいと考えております。また、DPを高校入試時や高校1年時にどのように生徒たちに志願させたいのかということも課題です。イメージ授業を継続発展もさせます。現在、受講希望者にIBトライアルレッスンを行っています。高校2年時から始まるプログラムに向け、いかにスムーズに生徒たちを導いていったらいいのか、さらに検討が必要です。まだまだ様々な課題を抱えています。IBDP導入が外国語コースの発展に寄与できるよう努力してまいります。

【外国語コース教頭（IB担当） 高橋 郁夫】



14 ■ e-learning Program の e-Spire 導入 パソコン使い、英語技能習得

国際的な汎用性が高いことで知られる民間英語能力試験の TOEFL への対策プログラムとして開発された e-Spire を導入。今後改訂・改革が推進される英語教育や大学入試制度への対応策としてだけでなく、学園全体での取り組みである真のグローバル人材育成に大きく寄与するものとして期待されています。

日本の大学の国際競争力強化をめざし、「スーパーグローバル大学」37校などを筆頭に、大学入試英語での民間英語能力試験の活用が急速に進展しています。また2020年度に導入予定の大学入試新テスト（仮称）大学入学希望者学力評価テストの英語では、「読む・聞く・書く・話す」の4技能が問われるようになり、ここでも民間英語能力試験との連携が検討されています。

こうした試験には、実用英語技能検定（英検）、TEAP、GTEC、TOEIC など様々ありますが、国際的な汎用性が高いとされているのが TOEFL であり、そのインターネットベースの TOEFL iBT への対策プログラムとして開発されたのが「e-Spire」という e-learning プログラムです。

4技能のレベルアップに加え、単語力向上効果が期待でき、自宅でも PC とネット環境があれば個々人のレベルとスピードで自学自習できる教材となっています。

まずは Vocabulary、Reading、Listening の3技能向

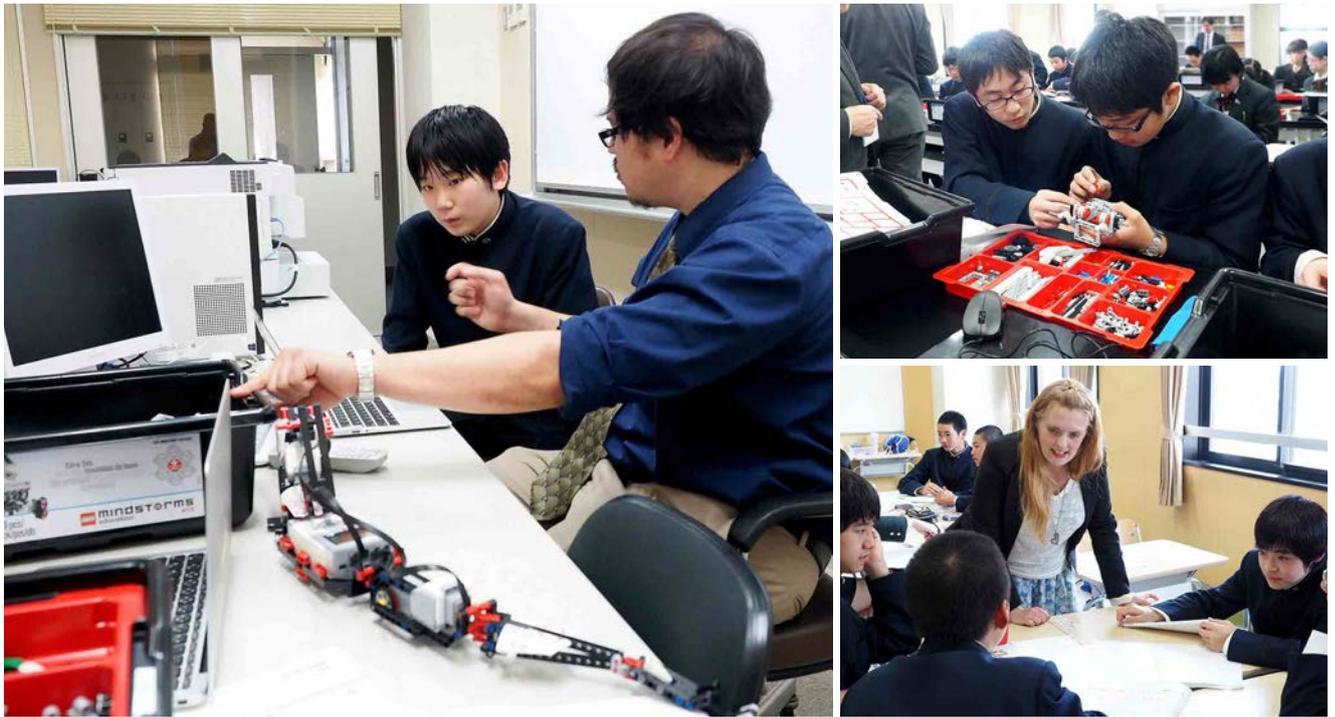
上のための基本パックに取り組み、やがてオプションで Writing、Speaking に進むプロセスとなっていますが、ゲーム感覚で Vocabulary 学習もできることから秀光前期課程の生徒にも取り組みやすいものとなっています。

学園では導入に際し、グローバルリーダー育成を目的とした Institution for a Global Society (IGS) 株式会社代表取締役の福原正大氏による講演・研修を実施して、英語科教員以外にもその内容と学習効果の理解・周知を図りました。

2014年度後半から、秀光中等教育学校・外国語コース・特別進学コースの一部で試験的に導入され、宮城野校舎では e-learning 専用のノート PC40 台も整備されました。2015年度からは外国語コースでは全学年、特進・秀光では低学年及び文科系対象、そして英進進学コースジャンプクラスで実施されるようになっていきます。

英語授業の一部や課外学習でのクラス一斉実施だけでは時間不十分なので、自宅や放課後の自学を督促しており、また進捗チェックや既定の英語授業における評価の一部に用いて実効性の向上を図るなどの工夫が重ねられています。導入後、実用英語技能検定への受験者増加や高グレード取得者の増加傾向が見られることから、今後よりハイレベルの TOEFLiBT への挑戦や、大学入学後の留学対策としてその効果が期待されています。

【副校長 千田 芳文】



■秀光中等教育学校でMYP導入 2020年大学入試改革への挑戦

2020年に大学入試改革が予想され、アクティブラーニングという言葉が教育界で広く意識される中、秀光中等教育学校では“国際感覚を持つ生涯にわたる能動的な探究者”への成長を強く促すIBの中等教育カリキュラム（MYP）のトライアルが開始しました。

グローバルスクールを標榜する秀光中等教育学校では、創設以来「Language, Music & Science」をキーワードに、激しい時代の移り変わりに適宜順応しながら世界各地で国際人として活躍する人材を多数輩出して参りました。今後も継続してこのような有為な人材を輩出するために、2016年4月よりIB（International Baccalaureate）の中等教育カリキュラムにあたるMYP（Middle Years Programme）の候補校となりました。

MYPは、国際的に互換性のある教育カリキュラムであるIBの教育理念を通じ、文部科学省が2020年に大学入試改革の中で本質的に求める「生きる力」の養成をまさに達成するものであります。また、その教育理念は本校の建学の精神である「至誠力行・質実剛健・自治進取」と親和性の高いものとなっております。

昨今はアクティブラーニングを通じた主体的な学習が教育界において広く意識されておりますが、MYPではその

授業内容や国際基準に基づく評価方法、そして学習活動全体を通じた取り組み・教育環境により、生徒が“受動的な学習者”から“国際感覚を持つ生涯にわたる能動的な探究者”に成長することを強く促す国際的教育カリキュラムとなっております。中でも、MYPは「探究する人・知識のある人・考える人・コミュニケーションができる人・信念のある人・心を開く人・思いやりのある人・挑戦する人・バランスのとれた人・振り返りができる人」といった10の学習者像を習得することを生徒及び教職員に求めると共に、それを十分に達成可能な環境整備を学校法人に徹底して求めることから、単なる授業方法の変化に留まるものではないことが明かです。

現在、トライアル期間のため秀光1・2年生の一部教科における導入に留まっておりますが、2018年の正式認可を目指し、順次、導入学年を拡大していく予定です。また、生徒のMYPを通じた探究活動とICT活用を促進させるために、ロボティクスを授業や部活動に取り入れ始めております。今後の秀光中等教育学校では、仙台育英高等学校外国語コースが行っているIBの高等学校用カリキュラムにあたるDP（Diploma Programme）との連携も用意することで、国内難関大学だけでなく、海外大学も視野に入れた幅広い進路指導を展開していく予定です。

【常務理事（秀光中等教育学校 MYP 担当） 加藤 聖一】



■仙台育英孔子課堂の設立 東北初の文化交流拠点が誕生

これまで本校では、学習とスポーツ両面で様々な国際交流事業及び留学生の招へい事業を積極的に推進してきた所ですが、この度、従前より交流して来た北京航空航天大学附属高校との協力関係のもと、東北で初めての孔子課堂が設立されました。

中国語教育の推進と文化交流拠点として、中国政府が海外に開設した「孔子課堂」が、東北で初めて本校加藤雄彦理事長・校長先生が中国駐新潟総領事館王華（おうか）総領事を訪ね、「孔子課堂」設置申請書を提出、平成27年8月に本校の長年にわたる中国との交流促進への尽力が評価され、正式に中国政府教育部より設置が認定されました。そして本年5月12日、駐日公使参事官をはじめ、多数の中国政府関係者並びに教育関係者ご臨席のもと、本校外国語コース生徒の見守る中、本校校長とパートナー提携校となる中国北京航空航天大学実験学校、呉鵬程（ごほうてい）校長が協定書に調印、送られた「孔子課堂」の銘板が披露されました。

本校ではこれまで数多くの中国人留学生を受け入れており、外国語・英進進学コースにおいては選択第二外国語として中国語教育を実施しています。またこれまでの北京体育学院との業務提携を生かし、卓球を中心に中国での遠征合宿、中国人留学生の受け入れ等、積極的にスポーツ交流を進めて来ました。更に仙台市の姉妹都市である吉林省長春の長春外国語学校との姉妹校締結を機に、研修旅行をス

タートさせると共に、中国人教員を招き質の高い中国語授業を実践して来ています。本校ではこれまで培った、これらグローバル人材育成事業のノウハウを生かし、「孔子課堂」設立の準備を着々と進めて来たところです。

今後は、本校多賀城校舎国際センター・孔子課堂室を中心に、生徒たちの意見・要望も取り入れながら、教育事業及び課外・交流事業の二本立てで事業を計画・実施してゆく予定です。教育事業の内容としては、外国語・英進進学コースでの中国人教員による更なる中国語授業の充実と質の向上、中国語履修の他コースへの拡大、また中国語検定試験等にも対応できる内容としたいと思います。更に校内においては、音楽・芸術・文学・料理等、中国文化に関する特別講座を開設することで、生徒たちに「現代中国を学ぶ」機会を提供し、中国語や中国文化教育の質的向上を図ると共に、将来は一般対象の中国語、中国文化の講座等を開設し、地域にこの事業を還元して行きたいと考えています。課外・交流事業の内容としては、校内に中国語ミニ図書館・中国ルームを設置し、本校生徒と留学生が大いに交流できる場を提供するとともに、提携先北京航空航天大学高等学校への短期研修旅行や長期留学プログラムの実施、牽いては北京航空航天大学への進学に繋げて行くことも重要です。

この事業が中国の言語・文化の理解を促進させ、両国の教育文化交流と友好関係の強化・発展に繋がることで、両国高校生のグローバルな人材育成に役立つことを大いに期待しています。

【孔子課堂長 鈴木 茂幸】

沿 革

2011-2016



SENDAI IKUEI GAKUEN 2011-2016

- 平成 23. 3. 1 第 63 回全日課程卒業証書授与式 (702 名)
- 【2011】 3. 2 第 8 回秀光中等教育学校卒業証書授与式 (55 名)
- 3.11 東日本大震災で宮城野校舎の被害甚大(「栄光」「記念 1 号館」「南冥」は補修困難となった。)
3.12 に予定していた通信制課程第 13 回後期卒業証書授与式は中止し、後日、郵便にて卒業証書 (107 名) を送付した。
- 3.19 法人局を「第二北辰」大会議室に移動し、執務を開始した。
併せて、災害復興本部を設置した。
4. 1 東日本大震災のため、秀光・高校とも臨時休校とした。
4. 2 秀光中等教育学校 6 年、疎開学習 (山形蔵王) ～ 4/10
4. 7 東日本大震災の最大余震 M 7.4 が発生し、宮城野校舎は壊滅的な被害を受けた。
- 4.15 秀光中等教育学校 5・6 年暫定授業 ～ 4/19
- 4.18 高校 3 年暫定授業 ～ 4/28
- 4.18 特別進学コース、多賀城校舎で暫定授業開始
- 4.20 秀光中等教育学校始業式
- 4.21 秀光中等教育学校入学式 (53 名)
- 4.21 高校 2 年暫定授業 ～ 4/28
- 4.29 全日課程入学式 (879 名)
5. 2 高校全学年暫定授業開始
- 5.12 高校全学年授業開始
- 5.14 通信制課程入学式 (103 名)
- 5.18 宮城野校舎感謝祭
- 5.22 「I - L i o n D a y」秀光・高校：「生命のメッセージ展」見学
7. 1 宮城野校舎、震災による被災度区分判定 (日本建築学会学校建築委員会による)
「栄光」：大破
「南冥」「第一・第二北辰」：中破
「記念 1 号館」：RC 造部門は軽微、S 造屋根は大破
7. 1 仮設校舎「多賀城 1 号館」完成
7. 4 法人局を宮城野校舎から多賀城校舎に移転
- 7.17 第 42 回国際物理オリンピック 【金メダル】秀光 6 年 佐藤遼太郎
- 7.17 ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル・ジョイントコンサート (グローリーホール)
- 7.20 宮城野校舎、「南冥」解体工事開始
- 7.25 特別進学コース、疎開学習
(第 1 隊、山形蔵王) ～ 7/2 (第 2 隊：7/27 ～ 7/29)
8. 1 仮設校舎「宮城野 1・2 号館」完成
8. 9 宮城野校舎「栄光」解体工事開始
9. 1 仮設校舎「宮城野 3・4 号館」及び「多賀城 2 号館」完成
- 9.22 宮城野校舎「記念 1 号館」解体工事開始
10. 1 仮設校舎「宮城野 5 号館」完成
10. 1 第 55 回育英祭 テーマ「絆」～ 10/2
10. 4 宮城野校舎「第二北辰」解体工事開始
10. 7 第 14 回通信制課程前期卒業証書授与式 (29 名)
10. 7 第 14 回通信制課程後期入学式 (69 名)
- 10.15 自衛官募集の功績により、防衛大臣から感謝状を贈呈される。
11. 3 第 16 回秀光祭 (グローリーホール)
11. 7 宮城野校舎「第一北辰」解体工事開始
- 11.25 創設者生誕 129 年・学園創立 106 周年記念職員会津研修 (東鵬)
- 11.29 理事長・校長加藤雄彦先生がキューバ共和国国家評議会友好勲章を受章
- 12.25 男子第 62 回・女子第 23 回全国高等学校駅伝競走大会 (京都)
【第 3 位】女子：1 時間 08 分 19 秒 [19 年連続 19 回目出場]
- 平成 24. 1.23 宮城野校舎地鎮祭
- 【2012】 2. 5 第 20 回国際高校生選抜書展全国大会
【個人の部 大賞】佐藤そあな 【秀作賞】小湊 陽

- 3.1 第64回全日課程卒業証書授与式(669名)
 - 3.2 第9回秀光中等教育学校卒業証書授与式(82名)
 - 3.10 第14回後期通信制課程卒業証書授与式(78名)
 - 3.29 インドネシア、バンドン市教育委員会来校。14の高校と姉妹校の提携
 - 4.7 秀光中等教育学校入学式(48名)
 - 4.8 全日課程入学式(814名)
 - 4.13 通信制課程第14回前期入学式(114名)
 - 5.22 「I-Lion Day」秀光・高校:「生命のメッセージ展」見学
 - 6.15 石巻教育連絡事務所地鎮祭
 - 7.4 ILC沖縄開設準備室開所式
 - 7.20 ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル・ジョイントコンサート(グローリーホール)
 - 7.28 全国高等学校総合体育大会(インターハイ、北信越)
 - 【優勝】ライフル射撃男子
 - 8.3 多賀城校舎、北区テニスコート開所式(人工芝コートの完成)
 - 9.24 仙台育英獅子太鼓部、インドネシアバンドン市姉妹校を表敬訪問
 - 9.28 アイルランド共和国、ジョン・ニアリー駐日大使本学園訪問及び講演
 - 9.19 宮城野新校舎上棟式
 - 9.21 石巻教育連絡事務所竣工式
 - 9.29 第56回育英祭 テーマ「Glory to us～我らに栄光あれ～」～9/30
 - 9.29 第67回国民体育大会(ぎふ清流国体) ⇒硬式野球部初の国体優勝
 - 【優勝】硬式野球、陸上女子3000m:メリーワイディア他3種目11名出場
 - 10.5 通信制課程第15回前期卒業証書授与式(31名)
通信制課程第15回後期入学式(54名)
 - 10.14 第43回明治神宮野球大会高校の部 ⇒初の神宮野球大会優勝
 - 【優勝】決勝戦 関西高校(中国地区)に12対4で快勝
 - 11.10 BFA“AA”アジア野球選手権大会
 - 【準優勝】日本選抜チーム:佐藤世那(秀光3年)
- 平成 25. [2013]**
- 2.8 第58回青少年読書感想文全国コンクール高等学校の部
 - 【全国学校図書館協議会長賞】遠藤駿介(1年)
 - 3.1 第65回高等学校全日課程卒業証書授与式(756名)
 - 3.2 第10回秀光中等教育学校卒業証書授与式(61名)
 - 3.4 多賀城育英グラウンド(真勝園、多目的グラウンド=サッカー場)竣工式
 - 3.9 第15回通信制課程後期卒業証書授与式(94名)
 - 3.24 宮城野新校舎竣工式
 - 4.1 M-フレックスコース・T-フレックスコースとしての生徒募集を停止し、多賀城校舎にフレックスコースⅠ類・Ⅱ類を新設する。
宮城野新校舎完成に伴い、秀光中等教育学校第6学年、高校特別進学コース、英進進学コースⅡ類、M-フレックスコースの2・3年、通信制課程の生徒が宮城野校舎で学習する。多賀城校舎では、秀光中等教育学校第1～5学年、外国語コース、英進進学コースⅠ類、フレックスコースⅠ類・Ⅱ類の第1学年、T-フレックスコースの第2・3学年の生徒が学習する。
 - 4.9 宮城野新校舎開校式
 - 4.9 秀光中等教育学校入学式(31名)
 - 4.13 全日課程入学式(719名)
 - 4.19 通信制課程第16回前期入学式(75名)
 - 4.23 ILC沖縄スクーリング会場開所式(沖縄市ミュージックタウン内)
 - 5.9 「STAND～Sendai Takes Action No Drinking & Driving」開催
(5/22にDate fmで放送。会場:仙台プラザ)
 - 5.9 インドネシア共和国姉妹校高校生研修訪問団(3校から22名)が来校し、本校で約1週間研修を実施(5月21日修了式)
 - 5.13 インドネシア共和国バンドン市教育長デディ・ダーマワン氏ら教育訪問団来校、インドネ

- シアの高校8校と姉妹校提携調印式を挙
- 5.14 駐日ブルガリア共和国特命全権大使ゲオルギ・ヴァシレフ氏による講演会（特進・外国語コースの生徒を対象に。ゼルコバホール）
- 5.22 「I-Lion Day」
 メモリアルストーン参拝・献花
 秀光・高校：「生命のメッセージ展」見学
 飲酒運転根絶県民大会・多賀城市飲酒運転根絶大会へ代表生徒参加
 飲酒運転根絶に向けた「STAND」ライブラジオ放送（5/9収録、Date fm放送）
 （STAND = Sendai Takes Action No Drinking & Driving）
 飲酒運転根絶に向けた街頭署名活動
- 6.29 サイエンス・コ・ラボ（秀光・特進の理科の共同実験講座②7/13、③9/14、④10/19、⑤11/9、⑥11/16、⑦12/7）
- 7.5 ILC沖縄開校記念ライブ開催（コザスクーリング会場）
- 7.5 「TOMODACHI プロジェクト」によりアメリカから高校生26名来校し、本校生徒の自宅にホームステイをするなどの交流を行った
- 7.8 ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル・ジョイントコンサート（ゼルコバホール）
- 7.28 全国高校総合体育大会（大分県：北部九州インターハイ）
 【優勝】（団体）ビームライフル競技男子団体
 （個人）陸上男子5000m：ヒラム・ガディア（13'44"）
 【準優勝】陸上女子3000m：マリアム・ワイディラ
 ビームライフル60発立射男子個人：野村亮太
- 7.30 第46回埼玉全国舞踊コンクール
 【第1位 埼玉県舞踊協会賞等6つの賞を受賞】宗像 亮（秀光4年）
- 8.2 韓国からの日本語短期研修留学生6名が来校し、2週間の研修を実施
- 8.20 仙台・キューバ友好協会主催「支倉常長遣欧使節400年祭…書と音楽」（アントニオ古賀リサイタル）に秀光中等教育学校生と外国語コース1・2年生が参加（仙台市メディアテーク）
- 8.30 第26回IBAF（国際野球連盟主催）ベースボール18Uワールドカップ（台湾）【準優勝】
 出場選手：上林誠知・熊谷敬宥
- 9.2 広域通信制課程 ILC沖縄平成26年度開設認可
 （広域通信制課程に係る学則変更「秋田県・沖縄県への拡大と沖縄県にスクーリング会場を設置する件」が認可される）
- 9.28 第57回育英祭 テーマ「Go for it～夢に向かって～」～9/29
- 9.28 第68回国民体育大会【優勝】陸上女子3000m：マリアム・ワイディラ
- 10.1 第16回通信制課程前期卒業証書授与式（33名）
 第16回通信制課程後期入学式（62名）
- 10.5 ILC青森後期入学式
- 10.10 訪日ニュージーランド議長団一行18名が宮城野新校舎を訪問
- 10.18 フランス姉妹校サンマルタン高等学校研修訪問団（生徒6名）来校し、10日間にわたり本校生徒宅にホームステイをしながら交流
- 11.1 駐日キューバ共和国特命全権大使マルコス・F・ロドリゲス・コスタ氏来校し、慶長遣欧使節団出帆400年記念・東日本大震災復興祈念講演会を実施
- 11.4 秀光祭
- 11.6 慶長遣欧使節出帆400年記念・東日本大震災復興祈念ロドリゴ・ロドリゲス氏 尺八演奏会（秀光前期課程・特進コース1年・外国語コース1-2年が鑑賞）
- 11.12 インドネシア共和国ラザルディ G.I.S から訪問団が来校し、5日間の研修及び姉妹校提携調印式を挙
- 11.27 加藤雄彦理事長・校長先生 教育功績者として文部科学大臣表彰
- 11.28 東日本大震災復興支援「サンタプロジェクト」開催 フィンランド共和国ロヴァニエミ市長、民族合唱団、復興庁復興副大臣ら来校
- 12.3 仙台育英学園創立108周年・創立者加藤利吉先生ご生誕131年記念研修会並びに仙台育英学園宮城野新校舎落成・加藤雄彦理事長先生文部科学大臣表彰祝賀会

- 第 22 回国際高校生選抜書道展【団体賞：東北地区優秀賞】【個人賞：7 名】
- 平成 26. 2. 5 秀光芸術鑑賞会（「TOMODACHI プロジェクト」の一環）（オルフェウス室内管弦楽団・
[2014] 辻井伸行氏とオーケストラ部共演（東京エレクトロンホール宮城）
- 2.28 第 66 回高等学校全日制課程卒業証書授与式（781 名）
3. 1 第 11 回秀光中等教育学校卒業証書授与式（53 名）
3. 8 第 16 回通信制後期卒業証書授与式（84 名）
4. 1 宮城野校舎では、秀光中等教育学校第 6 学年、高等学校特別進学コース全学年、情報科学コース全学年（旧英進進学コースⅡ類を募集停止し新設）、M-フレックスコース第 3 学年、広域通信制課程 ILC 宮城の生徒が学習し、多賀城校舎では、秀光第 1～5 学年、高等学校外国語コース全学年、英進進学コース全学年（旧英進進学コースⅠ類を募集停止し以前の名称に復活）、フレックスコース全学年（旧フレックスコースⅠ類を募集停止し新設及び T-フレックスコースの第 3 学年を組み込む）、技能開発コース（旧フレックスコースⅡ類を募集停止し新設）第 1 学年の生徒が学習することとなる。
4. 7 秀光中等教育学校入学式（47 名）
4. 7 全日制課程入学式（954 名）
- 4.11 ILC 宮城（広域通信制課程）前期入学式（39 名）
- 4.12 ILC 青森（広域通信制課程）前期入学式（31 名）
- 4.14 山形学習支援センター開所式
- 4.20 ニュージーランド姉妹校のクライストチャーチ男子高校から 12 名の生徒が来校し、本校ラグビー部員宅にホームステイをしながら交流する。～4/23
- 4.27 ILC 沖縄（広域通信制課程）開校式・前期入学式（72 名）
- 5.22 「I-Lion Day」
- 5.31 「千年希望の丘植樹祭（岩沼市主催）」にインターアクト部員、ラグビー部員、空手部員、女子バレー部員、生徒会役員ら約 140 名が参加しボランティア活動を行う。
6. 3 英松庵お茶室披き 千宗室家元に講師を依頼しお茶室披き講演会を開催
- 6.28 サイエンス・コ・ラボ①（秀光・特進の理科の共同実験講座）
- 7.13 NYSE（ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル）コンサート
- 7.16 秀光中等教育学校と仙台育英学園高等学校の収容定員に係る学則変更申請が認可されたことに伴い、秀光の位置変更届を県知事に提出し、平成 27 年度から秀光が多賀城校舎から宮城野校舎に移転することが決定した。
- 7.23 慶長遣欧使節団キューバ共和国ハバナ寄港 400 周年記念行事
「日本・キューバ交流の集い」（キューバ共和国臨時代理大使エリザベス・バルデスマラング氏ら来校し、式典と文化交流会を実施）
- 8.11 あしながインターンシッププログラム
「この夏！世界の超エリート大学からすごい大学生がやってくるぞ！」第 1 回（合計約 90 名の世界の大学院生が来校し、本校生徒約 470 名に英語によるワークショップを実施していただいた。）第 2 回は 8/20
- 8.20 第 36 回全国中学校軟式野球大会（徳島県）8/18～8/20
秀光野球部＝2 年連続 4 回目出場
【優勝】決勝戦 対中標津中（北海道）3 対 0 ⇒秀光全国初優勝
- 9.16 中国長春市民訪問団交流会（英進コース、多賀城校舎）
- 9.27 ILC 青森第 13 回前期卒業証書授与式（23 名）
同 第 13 回後期入学式（13 名）
- 9.28 第 58 回育英祭 テーマ「Let's Fry!」～9/29
- 9.28 秀光祭Ⅰ（合唱コンクール、ゼルコバホール）
- 9.29 ILC 宮城第 17 回前期卒業証書授与式（9 名）
同 第 17 回後期入学式（17 名）
10. 1 慶長遣欧使節団キューバ共和国ハバナ寄港 400 周年記念事業
「全日空チャーター便で行くキューバ・ハバナ 6 日間の旅」に参加
（茶道部・仙台育英獅子太鼓部部員をはじめ一般生徒・保護者、理事長先生、教職員等 29 名が参加、10/1～10/6）
- 10.15 第 69 回国民体育大会（長崎国体）

- 【優勝】東 世菜先生：空手道成年女子組手（個人の部）
- 10.18 仙台フィルハーモニー管弦楽団とのジョイントコンサート（ゼルコバホール）
秀光合唱団・秀光オーケストラが共演、ピアニスト松坂優希さんも参加
- 10.26 秀光祭Ⅱ（合奏発表の部、ゼルコバホール）
- 10.30 加藤雄彦理事長・校長先生 教育文化功労者として宮城県知事表彰
- 11.3 東日本大震災復興支援「第5回ぼくらのワールドカップ in 多賀城」
多賀城キャンパスを貸与し、沿岸部等のU-12とU-9の子供たちが集い、サッカーと音楽を楽しんだ。
- 11.14 秀光中等教育学校野球部第36回全国中学校軟式野球大会優勝報告会（Hメルパルク仙台）
- 11.18 第45回記念 明治神宮野球大会（11/14～18）
【優勝】決勝 対浦和学園高に4対1で快勝（2年ぶり2度目の優勝）
- 11.29 ILC沖縄 スクーリング会場「くもじ」開所式
- 12.3 仙台育英学園創立109周年・創立者加藤利吉先生ご生誕132年記念永年勤続・優良職員表彰式及び職員研修会並びに加藤雄彦理事長先生宮城県教育文化功労者表彰祝賀会（勝山館）
- 12.12 ホノルルマラソン大会参加（～12/17、陸上部員及びチアリーダー14名参加）
- 平成27. 2.17 東北で唯一の国際バカロレア（IB）認定校として正式に決定する
- 【2015】 3.1 第12回秀光中等教育学校卒業証書授与式（29名）
3.1 第67回高等学校全日課程卒業証書授与式（734名）
3.7 第17回ILC宮城後期卒業証書授与式（40名）
3.8 第13回ILC青森後期卒業証書授与式（47名）
3.22 第1回ILC沖縄後期卒業証書授与式（1名）
3.25 第42回全国高等学校選抜卓球大会（高松市～3/28）
【第3位】男子シングルス（2部）武藤史途
- 4.1 宮城野校舎では、秀光中等教育学校全学年、高等学校特別進学コース全学年、情報科学コース全学年、広域通信制課程ILC宮城の生徒が学習し、多賀城校舎では、高等学校外国語コース全学年、英進進学コース全学年、フレックスコース全学年、技能開発コース第1・第2学年の生徒が学習することとなる。
- 4.1 宮城県教委から「みやぎ高校生マナーアップ運動推進校」に指定される。
- 4.7 秀光中等教育学校入学式（46名）
4.7 全日課程入学式（927名）
4.10 ILC宮城（広域通信制課程）前期入学式（46名）
4.11 ILC青森（広域通信制課程）前期入学式（23名）
4.18 ILC沖縄（広域通信制課程）前期入学式（83名）
4.26 第15回東北・北海道なぎなた大会兼第9回東北・北海道中学生なぎなた大会
中学生演技競技の部
【優勝】（秀光）石垣綾香 菅原千桜
【第3位】（秀光）千坂妙恵 櫻田暖乃
- 4.28 創立110周年記念事業 ミクロネシア連邦ジョン・フリッツ大使講演会
「ミクロネシア連邦と日本の関係とさらなる未来への展望」
- 5.16 秀光STAND 仙台フィルジョイントコンサート（5/22にFM仙台で放送）
（STAND = Sendai Takes Action No Drinking & Driving = 飲酒運転根絶運動）
- 5.18 いじめ出張対策講座（宮城野～多賀城両校舎間の校内LANを活用したモニター放映による視聴）
- 5.20 キューバ共和国、キューバ国立芸術学校から5人の学生と先生1名が来日し、本校吹奏楽部『SALTO』との合同演奏を行うなどの交流を深めた。（2014.10.1～「慶長遣欧使節団キューバ共和国ハバナ寄港400周年記念事業」への答礼訪問）
- 5.22 「I-Lion Day」
- 5.24 スウェーデンの剣道ナショナルチームが多賀城校舎に来校・合宿し、本校剣道部と交流。（ナショナルチーム監督の佐藤公美さんは本校出身で、2003年から監督を務めている。）
- 5.30 「千年希望の丘植樹祭（岩沼市主催）」に生徒会執行部、インターアクト部員、生物部員、外国語コースIB・CAS選択生徒らが参加しボランティア活動を行う

- 6.12 MO S世界学生大会 2015 エクセル部門入賞 (情報科学:白崎翔大)
- 6.22 ウガンダ共和国の「あしながウガンダレインボーハウス・寺子屋」の30名の生徒たちが多賀城校舎に来校し、交流会を実施。
- 6.27 サイエンス・コ・ラボ① (秀光・特進の理科の共同実験講座)
②:7/4、③:9/26、④:10/10、⑤:10/17、⑥:10/31、⑦:11/7)
- 6.28 秀光オーケストラクラブ フレッシュコンサート (オーケルルーム)
- 7.4 本学園父母教師会 山形支部設立
- 7.26 NPO 法人「Ashita」主催のニューヨークにおけるワークショップ「Express Yourself! Summer 2015 at Horace Mann School」に特進生5名が参加
- 7.29 第67回全国高等学校総合体育大会陸上競技大会 (～8/2、和歌山市)
【優勝】5000m:サイラス・キンゴリ・ワンゲチ
【8位入賞】1500m:小室 翼、(予選9位)1500m:奈良凌介
- 8.5 第44回若鷲旗争奪東北中学校野球大会 (岩手～8/7)
秀光野球 [2年連続3回目の優勝]
【優勝】決勝 対蛇田中 (宮城代表)5対2 勝
- 8.6 第97回全国高等学校野球選手権大会 (～8/20)
【準優勝】決勝 対東海大相模高 (静岡)6対10 負 [26年ぶり2回目の準優勝]
- 8.9 全日本少年少女武道錬成大会なぎなた競技 中学生の部F
【優勝】演技競技の部 (秀光)石垣綾香 菅原千桜
- 8.17 第2回 Trilateral Leadership Summit (宮城野・多賀城校舎、～8/23)
[ハーバード大学・スタンフォード大学のティーチング・フェロー等による日本・中国・韓国高校生83名参加のリーダーシップ・サミット]
- 8.19 第37回全国中学校軟式野球大会 (～8/22、福島)
秀光野球 [3年連続5回目の出場]
【準優勝】決勝 対門川町立門川中 (九州代表、宮崎県)1対5 負
- 8.24 夏の甲子園大会準優勝に伴い、仙台市長から「賛辞の楯」を、多賀城市長から、「栄誉の楯」(多賀城市として初の授与)を贈呈される。
- 8.28 第27回 WBSC U-18 ベースボールワールドカップ (～9.9、兵庫県)
【準優勝】代表選手:佐藤世那 (ベストナイン=投手、最高勝率)、平沢大河 (ベストナイン=遊撃手)、郡司裕也
- 9.26 ILC 宮城第18回前期卒業証書授与式 (7名)・同第18回後期入学式 (9名)
- 10.1 学園創立110周年・多賀城校舎開設30周年・秀光創立20周年記念式典 (勝山館)
- 10.3 第59回育英祭 テーマ「獅子奮迅」(～10/4)
- 10.3 ILC 青森第14回前期卒業証書授与式 (20名、広域通信制前期卒業生計27名)
同第14回後期入学式 (13名)
- 10.8 第8回 BFA U-15 アジア野球選手権大会 (～10/13、静岡県伊豆)
秀光野球部 代表選手 阿部大夢 高橋 翔
- 10.11 ILC 沖縄第2回後期入学式 (15名)
- 10.17 フランス共和国、レンヌの姉妹校サンタマルタン高等学校サントジュヌヴィエヴ校から10名の研修生が来校し、本校生宅にホームステイをするなどして、日本の伝統文化等を学ぶとともに本校生と交流を深める。(～10/23)
- 11.3 第9回青春のエッセー 阿部次郎記念賞
【学校賞】秀光中等教育学校
【自由作品の部 最優秀賞】(秀光)小野佑華
【課題作品の部 入選】(秀光)大津佑香
- 11.15 秀光祭
- 12.4 塩釜地区交通安全協会及び塩釜警察署長より、加藤雄彦校長先生に、交通安全思想の普及高揚に尽力したということ、感謝状が贈呈される。
- 12.11 ホノルルマラソンに参加 (チアリーダー部員5名参加～12/16)
- 平成28. 1.13 塩釜警察署長より、高等学校に対して、警察活動を積極的に支援し塩釜署管内の治安確保
【2016】に貢献したということ、感謝状が贈呈される。
- 1.20 仙台東警察署長より、高等学校に対し、警察業務に深い理解を示し警察活動各般にわたり

多大な貢献をしたということで感謝状が贈呈される。

- 1.22 日本学生野球協会 【平成 27 年度優秀選手賞】 佐々木柊野
- 1.25 第 26 回日本数学オリンピック 東北・北海道地区大会
【A ランク表彰】 山本直樹 【地区表彰】 山村聡太郎
- 1.25 日本私立中学・高等学校連合会 【会長賞】 (秀光) 齋藤瑞稀
- 2. 5 第 61 回青少年読書感想文コンクール全国大会
【毎日新聞社賞】 (秀光) 小野佑華
【学校賞】 (保管庫～両開き扉～を寄贈される)
- 2. 6 平成 27 年度宮城県スポーツ賞
【特別功績賞】 郡司裕也、佐藤世那、平沢大河
【功績賞】 サイラス・キングリ・ワンゲチ、ヘレン・エカラレ
- 2. 6 平成 27 年度宮城県体育協会
【体育奨励賞】 (秀光) 石垣綾香、菅原千桜
- 2. 7 第 24 回国際高校選抜書展 (2/2 ～、大阪市美術館)
【団体賞】 東北地区優勝 [4 年ぶり 6 回目の東北地区団体優勝]
【個人賞】 優秀賞：齋藤慶樹、佐藤辰哉
秀作賞：阿部莉奈
入 選：亀掛川玲美、館沢莉沙、阿部麻莉紗、高橋祐典、阿部若菜、和泉匡哲、
加藤美月、織田七帆、菅田朋希、大場皓平、大泉徹、小林南海
- 2. 9 宮城県警察本部交通部長より、本学園に対して、みやぎ交通死亡事故ゼロキャンペーンに積極的に取り組み県民の交通安全意識の高揚に尽力したということで、感謝状を贈呈される。
- 2.24 台湾の国際台南高級商業職業学校から生徒 64 名が多賀城校舎を訪れ、外国語コース生徒と交流会を実施。
- 2.28 第 13 回秀光中等教育学校卒業証書授与式 (26 名)
- 2.28 第 68 回高等学校全日課程卒業証書授与式 (662 名)
- 3. 4 第 18 回 ILC 宮城後期卒業証書授与式 (38 名)
- 3. 5 第 14 回 ILC 青森後期卒業証書授与式 (31 名)
- 3.11 第 2 回 ILC 沖縄後期卒業証書授与式 (18 名) 後期通信卒業生計 87 名
- 3.21 NPO 法人「Ashita」主催のワークショップ「Express Yourself! Spring 2016 at Sendai Ikuei High School」を宮城野校舎で開催。ホーレスマン高校生 11 名、特進生 26 名が参加 (～ 3/26)
- 4. 6 秀光中等教育学校入学式 (45 名)
- 4. 7 全日課程入学式 (1,074 名)
- 4. 9 I L C 宮城 (広域通信制課程) 前期入学式 (42 名)
- 4.13 仙台育英学園創立 110 周年記念並びに I L C 青森校舎竣工感謝の集い
- 4.16 I L C 沖縄 (広域通信制課程) 前期入学式 (96 名)
- 4.17 ニュージーランドの姉妹校クライストチャーチ男子高等学校の生徒 14 名が来校し、ホームステイをしながら本校生徒と交流 (～ 4/20)
- 4.23 I L C 青森 (広域通信制課程) 竣工式・前期入学式 (27 名)
- 5.12 仙台育英孔子課堂銘板除幕式
- 5.22 「I - L i o n D a y」
- 5.22 第 10 回宮城県飲酒運転根絶県民大会において、仙台育英学園高等学校が宮城県知事より、飲酒運転根絶への積極的な取り組みに対して、褒状を贈呈される。
- 5.28 授業参観・PTA 総会 (学校法人仙台育英学園と父母教師会とで、「ソーシャルメディアを利用したいじめ防止に向けた活動」に関する共同宣言を採択した。)
- 5.28 千年希望の丘植樹祭に、2 年 IB 生 (CAS 活動の一環)、生徒会、ラグビー部員、柔道部員が参加し、ボランティア活動を行う。
- 5.28 千年希望の丘植樹祭において、一般社団法人森の防潮堤協会会長より、仙台育英学園高等学校が植樹ボランティア派遣に対して感謝状を贈呈される。
- 6. 1 山形学習センター地鎮祭
- 7. 1 平成 29 年度南東北インターハイ特別強化事業に係る平成 28 年度強化指定校

- 【男子】(サッカー) 本校サッカー部(男子)
 【女子】(サッカー) 本校サッカー部(女子)
 (剣道) 本校剣道部(女子)
 (なぎなた) 本校なぎなた部
- 7.10 秀光オープンキャンパスⅠ (STAND 秀光&仙台フィルと秀光オーケストラとのジョイントコンサート鑑賞会)
 ※ STAND = Sendai Takes Action No Drinking & Driving = 飲酒運転根絶運動
- 7.12 ニュージーランド姉妹校 カイアポイ (Kaiapoi) 高等学校から、7名の生徒が約1週間来校し、外国語コース等の生徒と茶道や華道等で交流(～7/19)
- 7.17 第30回A I U高校生国際交流プログラムに参加(2G1 瀬川理彩子、～8/8)
- 7.24 第47回クリーンキャンペーン2016 梅田川(体育会運動部等約200名が参加)
- 7.24 NPO法人「Ashita」主催のニューヨークにおけるワークショップ「Express Yourself! Summer 2016 at Horace Mann School」に特進2年6名が参加(～8/1)
- 7.28 全国高総合体育大会 陸上競技大会(中国インターハイ、～8/2、岡山県)
 【優勝】女子3000M:ヘレン・エカラル
 【第3位】男子4x100mR:島山 悠、長尾隆太郎、津田庸兵、齋藤壮太
- 8.1 第40回全国高等学校総合文化祭広島大会に参加(秀光オーケストラ部)
- 8.2 山形文化教育研修会(山形テルサでの山形交響楽団の演奏鑑賞会後、山形大学・山形県立保健医療大学・東北芸術工科大学の見学会等に、特進コース1・2年、外国語コース1・2年、秀光中等1～4年の生徒611名が参加)
- 8.7 第45回四国大学全国書道展
 【特選】漢字部門 齋藤慶樹、阿部若菜、後藤有由未、加藤美月、菅原優里香、中島結衣、春田依吹
 【特選】仮名部門 千葉綾乃
- 8.20 第37回全国中学校軟式野球大会(～8/22、福島)
 秀光野球 [4年連続6回目の出場]
 第2回戦 対 相生中(四国代表・徳島県)1対0 勝
 準々決勝 対 波佐見中(九州代表・長崎県)3対1 勝
 【第3位】準決勝 対 上一色中(関東代表・東京都)0対2 負
- 8.21 公益社団法人日本書芸院・読売新聞社主催 第21回全日本高校・大学生書道展
 【全日本高校・大学英書道展賞】漢字部門 齋藤慶樹
 【準優秀賞】 篆刻部門 阿部莉奈
- 9.4 山形学習センター竣工式
- 9.8 チアリーダー部韓国研修旅行(原州ダイナミックフェスティバル参加)(～15)
- 9.12 学園創立111周年記念職員研修会:「学園のリスク・マネジメント」
 (講師:慶應義塾大学大学院経営管理研究科 大林厚臣 教授)
- 9.24 ILC 宮城第19回前期卒業証書授与式(10名)・同第19回後期入学式(7名)
- 9.25 ILC 青森第15回前期卒業証書授与式(19名)・同第15回後期入学式(15名)
- 10.1 学園創立111周年職員会津研修(会津若松市飯盛山にて創立者の顕彰碑参拝)
- 10.1 第71回国民体育大会 岩手大会出場(～10/11)
 [陸上競技少年男子] 齋藤壮太、佐藤伸太郎、佐藤礼旺
 [陸上競技少年女子] ヘレン・エカラル
 [バレーボール少年男子] 亀本恍輝
 [レスリング少年男子] 山田剛大、伊藤郁也、佐藤亮汰
 [なぎなた少年女子] 菅原千桜、岡田 瞳、櫻田暖乃(秀光)
- 10.6 秀光スポーツチャレンジ(仙台市宮陸上競技場)
- 10.8 第60回育英祭 テーマ「獅子奮迅 Take U to the world of joy」(～10/9)
- 10.15 ILC 沖縄第3回前期卒業証書授与式(2名)・同第3回後期入学式(20名)
- 10.16 加藤雄彦理事長・校長先生 防衛省陸上幕僚長主催の援護協力功労者招待行事に招待される。(東京、グランドヒル市ヶ谷)
- 11.15 加藤雄彦理事長・校長先生 永年にわたる教育振興功労に対し、藍綬褒章を受章し、皇居にて天皇陛下に拝謁する。

藍綬褒章 受章

加藤 雄彦 理事長・校長先生 主なご功績 概要

平成 28 年 11 月 15 日、加藤雄彦理事長・校長先生が、教育振興に多大なるご功績を上げたことにより、文部科学省で藍綬褒章の伝達を受け、さらには皇居で天皇陛下に拝謁した。

以下に、加藤雄彦理事長・校長先生の主なご功績を列挙し、この栄えある受章に対して学園を挙げて祝したい。

1 昭和 57 年 4 月から学校教育者として、学園の創立者が掲げた建学の精神である「至誠」「質実剛健」「自治進取」を基軸にして、新しい時代や社会の求めているものを的確に捉え、そのニーズに応える私学としての教育活動を展開し、生徒の多様な能力・個性を尊重しながら、確かな学力の習得及び心身共に豊かな生徒の育成に尽力したこと

(1) 学校のコース等の改変

昭和 59 年 4 月 1 日、時代の要請や生徒・保護者の生活や意識の変化に対応するため、商業科を廃止して普通科一本とする県下初の全日制課程普通科総合コース制を導入し、特別進学課程、教養課程（国大進学コース、体育コース、外国語コース、文理進学コース、簿記進学コース、情報処理コース）を設置した。

さらに、社会的な情勢を勘案して、昭和 61 年から、本学園としては初めてとなる外国語コースへの女子生徒の受け入れを開始した。その後、平成 3 年度には、特別進学コースの男女共学化を図るとともに、英進コース（男子）を設置し、平成 4 年度には、英進コースの男女共学化を図り、平成 6 年度には、国際教養コース（男子）を設置した。

一方、昭和 31 年度をもって閉校した仙台育英中学校の再設置ともいえる仙台育英学園秀光中学校を平成 8 年度に開校し、仙台育英学園秀光中学校の卒業生を受け入れるために、平成 11 年 4 月から高等学校に秀光コースを開校し、いわゆる併設型中高一貫教育校の後期課程を設置した。

その間、平成 8 年 7 月 11 日に、仙台育英学園高等学校及び仙台育英学園秀光中学校の校長に就任し、さらなる学校改革を推進した。

そして、文部科学省の提唱する中高一貫教育推進に伴い、平成 14 年度末に仙台育英学園秀光中学校を発展的に閉校し、平成 15 年度から東北初の中等教育学校としての秀光中等教育学校を立ち上げた。

さらに、平成 10 年 4 月 1 日から、高等学校に通信制課程を設置し、平成 13 年 12 月には広域通信制課程の認可を受け、平成 14 年度には I L C 青森を開校し、平成 26 年度から I L C 沖縄を開校した。

(※ I L C : Ikuei Gakuen Learning Center)

その後、平成 15 年度から全日制課程普通科単位制としてのフレックスコースを開校し、平成 21 年度には T フレックスコースと M フレックスコース、平成 22 年度には英進進学コース I 類・II 類、平成 25 年度には、フレックスコース I 類・II 類を開校し、平成 26 年度には英進進学コース II 類を情報科学コースと、フレックスコース II 類を技能開発コースと名称変更し開校した。

このように、高等学校においては、全日制課程普通科総合コース制を導入した外、全日制課程普通科単位制の導入によって、多彩なコース制を実現するとともに、中高一貫教育を実現すべく、併設型中高一貫教育校としての秀光中学校の開校と中高一貫教育校としての中等教育学校の開校（詳細については、後述する。）を実現させ、生徒の興味・関心、目的・希望、適性等に応じた教育を展開し、柔軟で多様な教育指導体制を確立した。

(2) 将来を見据えた学園づくり

2005 年（平成 17 年）10 月 1 日に学園創立 100 周年を迎えたとき、来る 2030 年（平成 42 年）の創立 125 周年に向け、新たな学校づくりを推進していこうという思いと決意を込めて、「I-Challenge125」というスローガンとそのロゴマークを設定した。

毎年度、教育方針と重点目標を明確に示し、来るべき創立 125 周年（平成 42 年）に向けて、以下のような成果を上げている。

① 特色ある教育の推進

仙台育英学園高等学校及び秀光中等教育学校のそれぞれの特色を生かした教育課程を編成するとともに、生徒・保護者の多様なニーズに応える教育環境を整え、教育目標の具現化に努めた。

② 教職員の指導力の向上

建学の精神に則り、教職員一人一人が研鑽を積み指導力の向上に努め、学習指導や生徒指導の充実を図り、毎年度末には1年間の研究成果を集約した「研究紀要」を作成・発刊している。

③ 「70%Club 統括推進委員会」の設置と進学指導の充実・推進

進学指導の充実のために、学園内を横断的に統括する「70%Club 統括推進委員会」を設置し、数値目標を掲げてその推進を図った結果、高等学校の卒業年次在籍者数の進学率については、平成25年度58%、26年度59.6%、27年度62.6%、進学希望者の進学率については、平成25年度88.5%、26年度86.8%、27年度90.2%という実績を上げている。

秀光中等教育学校では、平成26年度、卒業生29名のうち、26名(90%)が大学進学、3名は各種学校へ進学し、平成27年度は、卒業生26名のうち、20名(77%)が大学進学、6名は受験準備という結果であった。

なお、「70%Club 統括推進委員会」という組織は現役での大学進学率70%以上を目指すという趣旨で設置されたものである。

2 多賀城市高橋地区の土地を買収することから始め、多賀城育英グラウンド・多賀城セクション・多賀城校舎の建設・充実に尽力し、現在の仙台育英学園の教育環境の基礎を築いたこと

昭和57年1月に学校法人仙台育英学園常務理事に着任したが、先生の大きな使命は教育環境の整備ということであった。具体的には、全国的な活躍が目立ち始めた運動部のための運動場の確保、県内外から入学してくる入学生のための生徒寮の確保及び生徒数の増加に伴う教育施設の拡充ということであった。

常務理事に就任直後から、仙台市内はもとより仙台市近郊に足を運び、新たな運動場用地を含め教育施設の建設用地としての土地探しに奔走した。その結果、多賀城市高橋地区に広大な農地とその地権者を探し出し、個別に土地の譲り受けの交渉を重ねた。熱意が地権者の方々に通じ、昭和59年5月に仙台育英学園総合運動場敷地として、40,868㎡を取得することができた。さらに、同年7月には、高橋地区に学寮敷地として、1,261㎡を取得し、直ちに設計・建設を開始した。

このようにして、翌年の昭和60年4月には、「大志義塾」(第一寮)・「志明館」(第二寮)を完成させた。さらに昭和60年5月には、多賀城育英グラウンド(総面積40,868㎡)を完成させた。多賀城育英グラウンドの内訳は、野球場(13,764㎡)、サッカー場兼ラグビー場(13,761㎡)、無床体育館(1,231㎡)、テニスコート8面(147㎡)、遊歩道(2,078㎡)、アウトフィールド(2,722㎡)となっており、県内の大学や高校には類を見ない大規模な総合運動場を創り上げた。

その後、昭和63年12月に、多賀城育英第2グラウンドを完成させ、平成3年4月には多賀城校舎の起工式を行い、平成4年4月にウエストウイングを落成させ、同年9月にライオンズホールを落成、同年10月にイーストウイングを落成、同年12月にレオホールを落成、平成5年2月にグローリーホール(体育館)を落成、同年12月にサウスウイングを落成させた。さらに、平成8年11月に多賀城北グラウンド用地を取得し、平成9年6月には多賀城北グラウンド及びノースグローリーホールほか各施設を落成させ、平成11年6月には真勝園グラウンド(硬式野球部練習場)を完成させ、平成12年3月にNCホールを落成させた。

このように、三十数年をかけて、北区・中区・南区に及ぶ多賀城校舎を完成させたほかに、生徒寮として前述した「大志義塾」「志明館」のほかに仙台市宮城野区栄二丁目に「国際交学館」、多賀城市高橋三丁目に「IKUEI 88」「IKUEI 90」を建設、さらに「IKUEI 111」を完成し、現在の仙台育英学園の教育環境の基礎を築き上げた。この業績なくして、現在の文武両面での生徒の活躍は実現できなかったと言っても過言ではない。

加えて、東日本大震災後の宮城野校舎の復興事業を推進する上で、多賀城校舎等の存在なくして宮城野校舎の再生はなかったと断言することができる。

3 東北初の中高一貫教育校である秀光中等教育学校を設立し、中高一貫教育の充実・向上に取り組み、大きな成果を上げたこと

視野の広い真の国際人(以下、グローバルリスト)の育成、知性、感性、思考力、判断力、表現力や創造性に優れた個性豊かな人材を育成し、難関大学入試に対応できる高度な学力の伸長を図ることを目指して、平成15年4月に東北初の中高一貫教育校となる秀光中等教育学校(以下、秀光)を開校し、大きな成果を上げている。

高度な学力の育成という目標達成のために、例えば、平成24年度から実施している仙台育英学園高等学校特別進学コース(以下、特進)とのコラボレーションによる課外活動(サイエンス・コ・ラボ

＝東北大学・大学院の先生方による秀光と特進による理科の共同実験講座）に加え、平成 28 年度から、前期課程において、I B（International Baccalaureate：国際バカロレア）の M Y P（Middle Years Programme）を導入（トライアル）することにより、2020 年の新大学入試にも対応できる体制づくりを始めている。

また、学園独自に作成した「中高一貫教育基本計画」に基づき、Language, Music & Science をテーマに置いた学習活動を展開し、質の高い教育の実践に努めている。

前期課程においては、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して、世界の人々と協調して、コミュニケーションできる力（グローバル・リテラシー）の育成に重点を置いており、その一つの実践として第 1 学年から e-Learning を利用した授業、第 2 学年においてはハワイ研修を行っている。また、前掲の M Y P の導入、さらに、アクティブ・ラーニング（探究型学習）の導入によるグループ学習を多く取り入れ、生徒一人ひとりの個性と能力が伸長できるようプレゼンテーションや発表の機会を多く取り入れるなどの授業形態を工夫している。

後期課程においては、習熟度別のレクチャークラスや選択授業等を取り入れ、効率の良い授業を展開している。また、前期課程でのハワイ研修の成果を踏まえ、より高度な海外での研修となる第 4 学年でのニューヨーク研修 N Y S A（New York Shukoh Academy）を行っている。さらに、特進と連携した放課後の特別講座（サイエンス・コ・ラボ：前掲）や長期休業等を利用した種々の講習計画により、大学現役合格を目指した高度な学力を養成してきた。

また、平成 27 年度から、第 5・6 学年における受験環境を向上させ、大学合格率を一層高めるために、第 5 学年に特進の一部生徒を受け入れ、医学部・歯学部・薬学部系進学希望者対象の「メディカル系クラス」とスーパーグローバル大学や難関大学進学希望者対象の「S G U 系クラス」に分けた学級編制を行い、さらに、英語力の向上を目指し、後期課程でも e-Learning を利用した授業を実践するなどして、希望する大学への現役合格率を高める取り組みを行っている。

さらに、秀光全体の特色ある教育活動として、体育科の授業に日本伝統武道（男子：剣道、女子：なぎなた）を取り入れて、音楽科では、卒業までに 2 つ以上の楽器の演奏ができるように指導し、課外活動の秀光オーケストラ部と一流楽団（仙台フィルハーモニー管弦楽団など）とのジョイントコンサートを継続的に実施するなど、生徒一人一人の個性を伸ばしながら特色ある教育活動を進めてきた結果、開校以来、卒業生のほぼ全員が国公立大学はじめ難関私立大学を含め、各種学校・専門学校に進学を果たすなどの実績を上げている。

4 国際化が進展する中、海外研修や海外スポーツ・文化との相互交流などを推進し、国際理解教育の充実を図るとともに、I B（国際バカロレア）認定校としての取り組みを始め、さらに、高度情報社会に対応するために情報教育の充実を図り、コンピュータ室の設置や学内の情報ネットワークの構築に尽力していること

これからの日本は世界の国々と共存し平和と繁栄に寄与することが大事であり、そのためには、世界の国々について正しく理解し共に生きていこうとする姿勢を育てることが重要であるという視点から、加藤昭前校長の時代に昭和 36 年に本校レスリング部が全国優勝を果たしアメリカ遠征に参加して以来、前任者の意図を継承して他に先駆けて海外語学研修や交換留学等、国際理解教育の推進に常に創意工夫した取り組みを続けてきた。

その結果、平成 26 年度末には、アメリカをはじめ海外に派遣した生徒は延べ約 6,400 名を超えている。また、国際理解教育協力姉妹校についても昭和 62 年カナダの高校と姉妹校締結以降、平成 27 年度まで 96 校の各国の高校等と姉妹校の締結をして、国際交流を継続している。

なお、国際理解教育の面で言えば、例えば、キューバ共和国との継続的・積極的な交流事業が認められ、平成 23 年 11 月 29 日、「キューバ共和国国家評議会友好勲章」を受けるといった栄誉を賜っている。

(1) I B（国際バカロレア）認定校としての取り組み

積極的・先見的な指導によって、本学園は、平成 26 年 1 月に東北地方では唯一の I B（International Baccalaureate：国際バカロレア）認定候補校に選定され、約 1 年間の試行期間を経て、平成 27 年 2 月には正式な I B 認定校となった。

I B（国際バカロレア）とは、世界共通の大学入試資格とそれにつながる小・中・高校生の教育プログラムのことである。本校が正式認定校となったことで、I B（国際バカロレア）のコースを選択した生徒は、卒業時には本校の卒業資格とともに I B（国際バカロレア）の資格取得試験に合格すれば、認定証書も取得でき、それによって、世界 100 か国以上 2,000 校以上の大学への入学資格や受験資格が認められている。

具体的には、平成27年4月から外国語コースでIBDP（IBのDiploma Programme: ディプロマ・プログラム）の講座（2年次・3年次の2年間）を設定し、当時2年次の希望生徒を対象にIBクラスに所属させ、学習を開始した。本校の場合、英語だけでなく日本語も活用した“デュアルランゲージ・プログラム”でのDPを日本で最初に導入しているが、平成28年11月、このデュアルランゲージ・プログラムで2年間学習した生徒たちがIB試験に挑戦した。その結果は平成29年1月に発表になったが、3名の生徒が見事合格し、IB資格を取得するという快挙を果たした。

前述したが、平成28年度から秀光中等教育学校の前期課程でもIBのMYP（Middle Years Programme）を導入（トライアル）して、その実践を進めていることから、今後、ますますIB資格の取得者が増加していくものと期待される。

(2) 情報教育の充実

また、高度情報通信社会が進展していく中、生徒が溢れる情報の中から主体的に選択・活用でき、情報の受信・発信の基本的ルールを身に付けることが一層重要となると判断し、他に先駆けて情報教育の充実を唱え、コンピュータ室の設置や学内の情報通信ネットワークの構築等に尽力した。

さらに、平成26年度から情報科学コースを開設し、コミュニケーションツールとして自在に活用できるコンピュータ技術の習得を掲げ、IT関連の科目を多く設けるなど条件整備を行った結果、本校は東北の普通高校で唯一のグローバルライセンス（MOS試験）受験認定校となり、MOS試験では1級を取得する生徒を多数輩出し、さらには、情報処理検定試験ではエクセル・ワード・パワーポイント部門の全てに「スペシャリスト」資格を取得する生徒が何人も出てくるという大きな成果を上げている。

5 運動部活動を積極的に支援し、多くの種目において全国的な大会トップクラスの成績を上げ、学校スポーツ振興のみならず宮城県内のスポーツの振興に寄与していること

運動部での部活動は、自分自身を鍛えるとともに深い友情を育むことができるなど学校生活をより豊かにする大切な体験の場として位置付け、多賀城北グラウンド、真勝園グラウンド（硬式野球練習場）をはじめ各運動施設の充実に力を注ぎ、スポーツを振興させた。

その結果、各運動部での活動が促進され、各種大会で目覚ましい活躍をみせている。中でも、陸上部・硬式野球部・ラグビーフットボール部・サッカー部・なぎなた部・ライフル射撃部等は全国大会に常時出場するなど、学園のみならず県民に勇気と希望を与えている。

特に、硬式野球部の平成元年に続く平成27年の夏の甲子園準優勝の活躍は、多くの宮城県民に東日本大震災からの復興につながる勇気や希望を与えたと、大きな賞賛を受けた。

6 宮城県私立学校初の通信制課程を設置し、広域化を進め、学びたい生徒の学習機会の確保に貢献したこと

学ぼうとする意欲のある全ての生徒に対して学習の場を提供したいという考えが結実し、平成9年12月に宮城県では唯一の私立高校通信制を設立した。

平成13年12月に広域的通信制の認定を受け、平成14年4月には青森校、平成17年4月には東京校（平成24年度閉校）、平成26年4月には沖縄校を開校するなど順次広域化を進めた。

中学新卒者をはじめ、他の高等学校から転学を希望する生徒や中途退学者など、学ぼうとする意欲のある生徒は15歳以上であれば誰でも応募できるようにした。その結果、開校当初は70名台から100名台だった在籍生徒数は、平成20年度以降は400名台から500名台と続き、平成28年5月1日現在では684名まで達して、卒業生の中には、大学・短大進学者も出てくるなど大きな成果が現れている。

7 外郭団体への積極的な協力姿勢により、広く私学全体の振興はもとより公立学校等とも連携して、高等学校教育全体の底上げに寄与していること

平成12年から宮城県公立高等学校協議会委員として、平成16年から宮城県私立中学高等学校連合会理事として、それぞれ現在まで10年以上にわたって高等学校教育全体の底上げに大いに寄与している。例えば、県教育委員会との調整・連携を図りながら宮城県内の私立高等学校の入試日程や募集定員等について検討したり、県内及び仙台市内の中学校長会との連携を深め中学校長会側からの要望を取り入れて私立高等学校の入試改善を図ったりするなど、私学の振興及び私学と公立高等学校等との関係強化のために尽力している。

この他にも、平成13年から平成25年まで、（社）宮城県私学退職金社団理事として、平成14年4月から平成16年3月まで、日本私立中学高等学校連合会全国収容対策会議委員として、その職責を果

たすなど、全国的な規模の団体においても活躍し、その功績は十分に評価されるものである。

併せて、県内のスポーツの振興にも積極的で、現在も宮城県卓球協会顧問や宮城県高等学校体育連盟 なぎなた専門部長等の重責も担うなど、その功績には大なるものがある。

8 交通事故防止、特に、飲酒運転根絶運動を積極的・継続的に推進していること

仙台育英学園高等学校では、心身の鍛錬や友情の深まり等をねらいとして、多賀城校舎に前泊し、翌朝に多賀城校舎を出発、松島校舎までの23.5キロメートルの距離をウォークラリーするという学校行事「さつき祭」を平成7年度に開催し、それ以降、毎年5月に実施してきた。

第11回「さつき祭」は、平成17年5月21日に開始され、翌5月22日の午前4時に多賀城校舎を出発し、ウォークラリーが開始された。開始まもなくの4時15分頃、多賀城市内の国道45号線で青信号中の横断歩道を渡っていた生徒たちの隊列に、四輪駆動車が飲酒・居眠り・信号無視の暴走運転で突っ込んできた。その結果、男子1名、女子2名の尊い命が奪われるとともに、重軽傷22名という大惨事となった。また、その惨状を直接目の当たりにした多くの生徒に対しても、大きな心的影響を及ぼした。

同年5月31日には、生徒会主催という形で、3名の犠牲者のお別れ会を開催した。

大惨事の発生した5月22日を「I-Lion Day（安全と安寧を祈る日）」と定め、一瞬にして夢や希望を絶たれた3名の安らかなご冥福をひたすら祈願するとともに、安心して暮らせる安寧な環境づくりを推進していこうという決意を新たにするとした。

翌平成18年5月22日には、多賀城校舎レオホール前に設置した「メモリアルストーン」の除幕式を行った後、両校舎で生徒会主催による「安心と安寧のつどい」を実施した上で、交通安全に関する記念講話を開催した。そして、5月22日の午後には、生徒会の代表者が宮城県と宮城県警主催の「飲酒運転根絶県民大会」に参加し、「3人の友達の命を未来に生かすために～事故の防止について考える～」という作文を朗読するなどした。

このような、交通事故防止、特に、飲酒運転根絶運動は、平成28年度現在も続いているが、このような先生の積極的・継続的な取り組みに対して、次のような感謝状が贈呈されている。

- ・平成27年12月4日 交通安全思想の普及高揚に尽力したということで、塩釜地区交通安全協会及び塩釜警察署長からの感謝状

なお、積極的・継続的に取り組んでいる学園の交通事故防止、特に、飲酒運転根絶運動に対する感謝状も次のように贈呈されている。

- ・平成28年2月9日 学園に対して、みやぎ交通死亡事故ゼロキャンペーンに積極的に取り組み、県民の交通安全意識の高揚に尽力したということで、宮城県警交通部長からの感謝状
- ・平成28年5月22日 第10回宮城県飲酒運転根絶県民大会において、高校に対して、飲酒運転根絶への積極的な取り組みに対して、宮城県知事からの感謝状

以上、総括すると、資性穏健・明朗にして実直であり、卓越した指導力と率先遂行の実行力は、衆目が一致して認めるところである。併せて、高雅なる志操に加えて人間味溢れる人柄の持ち主であり、教育に当たっては優れた先見性と指導力を遺憾なく発揮し、また、卓越した教育的識見を活かし教育者としての使命感と情熱をもって職務の遂行に努め、生徒はもとより、教職員や保護者、地域の方々からも絶大な信頼と敬愛の念を得ている人物である。

これまで述べてきたように、前任者加藤昭氏の後継者として校長・副理事長・理事長に就任以降、創立者加藤利吉先生の掲げた建学精神の具現化を目指し、国際理解教育の一層の推進、運動部活動への積極的な支援、通信制課程の開設、秀光中等教育学校の開校、高等学校の多様なコースの改編をはじめ、特色ある学校づくりに努めてきた。併せて、平成24年度以降は東日本大震災からの復興を中心に、常に学園経営や学校改革の中心で指導力を発揮し、多様な教育環境の整備に取り組み、先進的な教育を推進し、新しい時代や社会の求めるものを的確にとらえながら、社会のニーズに柔軟に対応でき、それぞれの社会に貢献できる有為な人材の育成に尽力しながら、現在に至っている。

昭和57年以来、35年間にわたる職務遂行の結果、仙台育英学園は、創立111周年に当たる現在では、高等学校及び中等教育学校合わせて3,000名を超える生徒が在籍する県内有数の私立学校として、県内外から高い評価を得ている。私学経営のみならず、宮城県内の学校教育全体の振興発展に尽力した功績は、誠に顕著であり、平成25年の文部科学大臣からの教育者表彰、平成26年の宮城県知事からの教育文化功労表彰に続き、この度の内閣府からの藍綬褒章受章の栄に浴されたことは、この上ない慶事であるとともに、学園の東日本大震災からの復興を象徴する出来事であることとして、学園を挙げて祝したい。

加藤 雄彦 理事長・校長先生 略歴

昭和 33 年 2 月	宮城県仙台市に生まれる
昭和 45 年 3 月	仙台市立片平丁小学校卒業
昭和 48 年 3 月	慶應義塾中等部卒業
昭和 51 年 3 月	慶應義塾高等学校卒業
昭和 55 年 3 月	慶應義塾大学経済学部卒業（経済学学士）
昭和 57 年 3 月	慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了（MBA：経営学修士取得）

【資格】

昭和 55 年 5 月	中学校教諭 1 種免許状（社会）、高等学校教諭 1 種免許状（社会）
昭和 57 年 4 月	高等学校教諭専修免許状（社会）

【経歴】

学校教育関係

昭和 57 年 4 月	学校法人仙台育英学園事務職員
昭和 57 年 4 月	学校法人仙台育英学園教諭
昭和 57 年 4 月	仙台育英学園高等学校校長室長
平成 8 年 7 月	仙台育英学園秀光中学校長
平成 8 年 7 月	仙台育英学園高等学校校長
平成 15 年 4 月	秀光中等教育学校校長

学校法人仙台育英学園関係

昭和 56 年 11 月	学校法人仙台育英学園理事
昭和 56 年 11 月	学校法人仙台育英学園評議員
昭和 57 年 1 月	学校法人仙台育英学園常務理事
平成 元年 4 月	学校法人仙台育英学園法人局事務局長
平成 8 年 7 月	学校法人仙台育英学園副理事長
平成 19 年 6 月	学校法人仙台育英学園理事長

体育団体関係

平成 10 年 5 月	宮城県卓球協会会長
平成 19 年 5 月	宮城県卓球協会顧問
平成 13 年 4 月	宮城県高等学校体育連盟ライフル射撃部部长
平成 16 年 4 月	宮城県高等学校体育連盟ボクシング専門部部长
平成 24 年 5 月	宮城県高等学校体育連盟なぎなた専門部部长

私学・教育関係の団体

平成 14 年 4 月	日本私立中学高等学校連合会全国収容対策会議委員
平成 20 年 6 月	(財)日本私学教育研究所評議員
平成 12 年 6 月	宮城県公私立高等学校協議会委員
平成 16 年 4 月	宮城県私立中学高等学校連合会理事
平成 20 年 4 月	宮城県高等学校長協会理事

その他の団体

平成 27 年 1 月	茶道裏千家淡交会宮城支部副支部長
-------------	------------------

【賞罰】

平成 23 年 11 月	キューバ共和国国家評議会から友好勲章を授与される
平成 25 年 11 月	教育者表彰（文部科学大臣）を受ける
平成 26 年 10 月	教育文化功労表彰（宮城県知事）を受ける
平成 28 年 10 月	陸上幕僚長援護協力功労者表彰（防衛省）を受ける
平成 28 年 11 月	秋の褒章 藍綬褒章（内閣府賞勲局）を受章する

【編集委員】

菅原 忠雄
高橋 泰
千田 芳文
菅原 文男
眞山 晴夫
菅原 義明
佐々木 豊
澤田 敏明
内海 幸廣
阿部 英伸

【編集後記】

東日本大震災からの復興をテーマに、加藤雄彦理事長・校長先生のリーダーシップのもと記念誌編集を開始したのは、2015年（平成27年）6月でした。2年にわたる編集作業をとおして、仙台育英学園創立111周年記念誌「創造ある復興を目指して～東日本大震災から学ぶ教育機関のリスクマネジメント～」としてここに発行されることになりました。

この記念誌は、大きく2部構成となっており、第1部では東日本大震災からの復興の軌跡を追い、最後に慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授大林厚臣氏の特別寄稿「教育機関のリスクマネジメント」により本学園の復興への取組を総括しています。第2部では創造ある復興に向けての取組を「学園創立110周年記念事業」としてまとめました。

編集に当たりご協力いただいた皆様に厚く御礼を申し上げ、編集後記といたします。

結びに、進取の精神が脈打つ復興への槌音を響かせて6年、このたびの加藤雄彦理事長・校長先生の藍綬褒章受章という慶事は、まさに本学園の復興を象徴する出来事となりました。心よりお慶び申し上げます。

発行日	2017年（平成29年）3月24日
編者	仙台育英学園創立111周年記念 仙台育英学園史 仙台育英学園111年への歩み 「創造ある復興を目指して ～東日本大震災から学ぶ教育機関のリスクマネジメント～」 編集委員会
発行者	学校法人 仙台育英学園 〒983-0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野2丁目4-1
印刷・製本	笹氣出版印刷株式会社